未来を創る子供たちの育成に向けて

埼玉教育

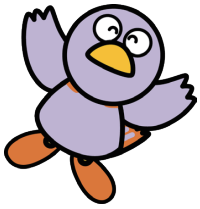
第3号
令和5年11月
No.823

特集
① 豊かな心と健やかな体の育成
② 異校種との円滑な接続・連携

於：久喜市立久喜中学校
令和5年7月12日
久喜市教育委員会・東部教育事務所教育支援担当・学力向上推進担当学校訪問より

「指導主事として埼玉県の子供たちの未来を創る ～指導主事の役割と心構え～」

教育局　東部教育事務所　指導主事　牛島（うしじま）　健一（けんいち）



[コバトン]

埼玉県立総合教育センター

[さいたまっち]

農業・環境・自然の体験学習で豊かな学びを支援する江南支所

○江南支所は、農業教育と環境教育の支援・推進を目的とし、農業関係高等学校等の生徒の実験・実習を通して、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を目指します。また、「農業・環境・自然」をテーマに、教職員の指導力向上のための研修を実施しています。

○一般教員研修

食農、自然、環境の研修を推進する
○高等学校初任者研修（施設体験）
○特別支援学校初任者研修（施設体験）
○新規採用学校栄養教員等研修
（食育体験）
○【新規】特別支援学校と農業分野企業法人をつなぐ「農福連携」推進研修会

〔高初研・飼育体験〕

〔高初研・田植体験〕

〔特支初任研・収穫体験〕

〔農福連携・農業体験〕

令和5年度 新規事業
特別支援学校と農業分野企業・法人をつなぐ「農福連携」推進研修

プログラムは、こちらからも読み取れます

新入り、紹介！

写真右　名前「彩晴(いろは)」

名前の由来は、彩の国の「彩」、埼玉県は快晴日本一の「晴」から取りました。元気いっぱいの２歳の女の子です。
令和５年２月には、写真左「サクラ」も新しく仲間に加わりました。

○農業教員研修

教科「農業」の指導力向上を目指します
○高等学校初任者研修（教科　農業）
○農業科新任教員等実技研修
○高等学校５年経験者研修（教科　農業）
○高等学校中堅教諭等研修（教科　農業）

農業科新任教員等実技研修

〔ドローン操作研修〕

〔作業機の着脱研修〕

○生徒実習

農業関係高校を支援する
○生徒共同実験実習
○大型特殊
・けん引免許技能講習会
・出張試験

〔トラクタ基本実習〕

〔飼育実習〕

〔ドローン実習〕

〔実習の内容〕

一般就労を支援する
○特別支援学校「生徒実習」

〔トラクタ基本実習〕

〔建設機械実習〕

○児童生徒体験活動

「農業」「環境」「自然」を学ぶ
○「自然・農業・環境」体験活動
・食と農のチャレンジ教室（小学生）
・公立学校「自然・農業・環境」体験活動
○「農業・環境・自然」高校生体験活動
○農と緑のふれあいスクール（適応指導教室）
○草花頒布事業（学校への草花苗の頒布）

公立学校「自然・農業・環境」体験活動

〔園芸・土づくり〕

〔お米教室〕

「農業・環境・自然」高校生体験学習

〔河川環境に関する講義〕

〔フィールドワーク・外来植物の駆除〕

○要請研修

先生方の依頼待ってます。詳しくは、江南支所へお問い合わせください。

【主な研修テーマ】
○食農教育
○体験活動の指導法
○学校ファームの活用方法
○植物バイオテクノロジーの活用
○環境教育
○出前授業（紙漉き体験・お米教室等）

調査研究

農業関連高校でのスマート農業化に伴う「農場における生徒のICT活用の促進」に向けた調査研究

農業関連高校におけるスマート農業に関する学習の実施状況を調査し、結果を集計・分析してまとめることで、各校で活用できるネットワーク環境の改善や実践事例集（学習指導案・学習の評価方法を含む）を作成して情報共有し、学習内容の深化を図る。

総合教育センター
江　南　支　所
〒360-0113
埼玉県熊谷市御正新田1355-1
TEL 048-536-1586　FAX 048-536-1710
https://ecsweb.center.spec.ed.jp/1001/

埼玉県立総合教育センター
Saitama Prefectural Education Center

令和５年度「埼玉教育」第３号（秋号）　目次

目次 1

巻頭言

生徒指導と進路指導・キャリア教育との連携の重要性　早稲田大学大学院教育学研究科　教授　三村　隆男　2

体育授業で教師の求められるアプローチ
～ OECD ラーニング・コンパスを手掛かりにして～　帝京大学　教育学部　教授　成家　篤史　4

県教委施策事業紹介

「少年の健全育成に関する協定」締結について　教育局　県立学校部　生徒指導課　生徒指導・いじめ対策・非行防止担当　主幹　佐野　智　6

高校内分校の設置について　教育局　県立学校部　特別支援教育課　教育環境整備推進担当　指導主事　橋本　昌一郎　8

「鎌倉殿の 13 人」に沸いた一年　嵐山史跡の博物館　副館長　安藤　伊知郎　10

教育法規・情報

児童生徒の自立を促す小中一貫教育　玉川大学　教師教育リサーチセンター　客員教授　福井　正仁　12

特集①豊かな心と健やかな体の育成

教育委員会・学校・家庭の連携による子供たちの SOS をキャッチする取組
～鶴ヶ島市「心と身体の健康観察」～　鶴ヶ島市教育委員会　学校教育課　指導主事　梅舘　雅敏　鶴ヶ島市立教育センター　主幹兼指導主事　田中　仁也　同　カウンセラー　服部　彩子　教育部　参事　深谷　朋代　14

産婦人科病院だからこそ出来る〝いのちと性の授業〟
～愛和病院の助産師が行う二つの出張授業について～　医療法人愛和会 愛和病院　広報企画課 課長　内田　卓也　18

実践論文

学校課題研究を通した人材育成
～「運動好きで、心も体もたくましい児童の育成」を目指して～　坂戸市立三芳野小学校　校長　佐藤毅一郎　教頭　大澤　裕美　教諭　宮﨑　春菜　教諭　吉川　和也　20

「運動好き」な児童を増やし、「運動の日常化」に繋げる体育学習の充実
～「体育授業」と「体育的活動（運動遊び）」の視点から～　北本市立中丸東小学校　教諭　塩澤　大　22

図画工作科における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な実践
～対話を通して児童一人一人が主体的に活動できる図画工作科の取組～　羽生市立三田ヶ谷小学校　教諭　五十嵐はる菜　24

「ハートフル桶西水族館」の取組　県立桶川西高等学校　教諭　奥村　崇生　26

特集②異校種との円滑な接続・連携

義務教育学校　武蔵台小中学校開校までの１年間の軌跡
～感謝、そして未来へ　未来の扉を開く１年の取組～　日高市立武蔵台小中学校　校長　秋馬　信之　28

加須市保・幼・小中一貫教育事業「中学校区リンクミーティング」の取組
～加須幼稚園から加須小学校への円滑な接続を期して～　加須市立加須幼稚園　園長　加須市立加須小学校　校長　増田　正夫　30

実践論文

教材で教える～工業高校で活きるコラボ授業～　県立大宮工業高等学校　教諭　西　哲未　32

高等部におけるデュアルシステムの導入と生徒の新たな主体性の芽生え
～「健やかな成長と幸福を目指す地域と共にある学校」の学校教育目標をテーマに～　県立行田特別支援学校　教諭　天野　真樹　34

特別支援学校における高校通級指導への関わり　県立和光南特別支援学校　教諭　高萩　直子　36

新設校紹介

熊谷市初の統合新設校　成田星宮小学校
「世に立つ力」～知・徳・体を磨き　未来を拓く～　熊谷市立成田星宮小学校　校長　爪川　由美子　38

指導主事からのメッセージ

指導主事として埼玉県の子供たちの未来を創る
～指導主事の役割と心構え～　教育局　東部教育事務所　指導主事　牛島　健一　39

管理職の魅力発信

「三方よし」のススメ
～〝生徒・保護者よし、学校よし、社会よし〟の学校運営を目指して～　県立春日部高等学校　校長　上原　一孝　40

教育長からのメッセージ

八潮市の教育 ～小中一貫教育の歩み～　八潮市教育委員会　教育長　井上　正人　41

我がまち、こんなまち

輝く未来へトライ　熊谷市　熊谷市市長公室　広報広聴課　主事　磯野　駿太郎　42

子供たちに伝えたい埼玉の偉人

生涯をかけた情熱～木村九蔵と養蚕～　本庄市教育委員会　文化財保護課　主事補　田辺　萌那　43

校外学習施設紹介

川越の歴史と文化の魅力を発見！　ここがすごい！　川越市立博物館　川越市立博物館　指導主事　長谷川　和志　44

シリーズ　改訂版生徒指導提要

第３回　個別の課題に対する生徒指導　～不登校児童生徒への支援～　県立総合教育センター　指導相談担当　主任指導主事　中川　こずえ　45

センター事業

動画コンテンツの活用による研修の充実を目指して
～あらたな教師の学びワーキンググループによる今年度の活動～
電話・メール相談の現場から～不登校の相談から～　県立総合教育センター　教職員研修担当　指導主事兼所員　浅見　寿文　指導相談担当　46

コラム

部活動で学んだ生徒育成と学校運営　県立不動岡高等学校　教頭　島田　淳一　47

教職員相談道しるべ／次号予告

教職員相談道しるべ　県立総合教育センター　教職員研修担当　指導主事兼主任専門員　永田　祐子

次号予告 48

表紙	指導主事として埼玉県の子供たちの未来を創る ～指導主事の役割と心構え～	教育局　東部教育事務所　指導主事　牛島　健一
表紙見返し	農業・環境・自然の体験学習で豊かな学びを支援する江南支所	県立総合教育センター　農業教育・環境教育推進担当
裏表紙見返し	回転！お寿司づくしの花	熊谷市立佐谷田小学校　４年　神沼　陸斗
裏表紙	大きな庭に小さな水道	羽生市立西中学校　１年　大澤　寧々

生徒指導と進路指導・キャリア教育との連携の重要性

【プロフィール】
1953 年石川県生まれ。埼玉県立高校の教師を 24 年間勤め、2000 年上越教育大学、
2008 年早稲田大学に勤務。専門は、進路指導・キャリア教育、生徒指導、教師のキャリア形成。
国立教育政策研究所フェロー、埼玉県地域職業能力開発促進協議会構成員（座長）、アジア地区
キャリア発達学会副会長、日本キャリア教育学会理事。

早稲田大学大学院教育学研究科　教授　三村（みむら）　隆男（たかお）

はじめに

2023（令和５）年で 75 周年を迎える『埼玉教育』の巻頭言を万感の思いで執筆させていただいている。なぜかというと、『埼玉教育 500 号』（1990）に「生徒指導と進路指導との連携の重要性」とのタイトルで原稿を書かせていただいたからである。当時、埼玉県立与野高等学校の進路指導主事として生徒の進路指導に携わる中、特に３年生の進路選択の場面での進路指導に限界を感じていた。このためには、進路選択の過程で直面する課題を、進路指導における選択決定の課題に限定せず、生徒指導の観点からこの課題に取り組むべきではないかと『埼玉教育 500 号』を通して提案させていただいた。あれから 33 年が経過し、同様のタイトルで書かせていただいている。

2000（平成 12）年に県立蕨高等学校教諭を最後に、上越教育大学８年、早稲田大学 16 年と勤務してきた。その間に今回のタイトルについてどのような進展があったかを記していきたい。

エーリッヒ・フロム『悪について』より

エーリッヒ・フロムの以下の攻撃性と生産性に関する記述に出会ったことで筆者にとってタイトルについての考えを大きく進展させることになった。

フロム（1964）は、人がもつ攻撃性（破壊性）と生産性（創造性）との関係を次のように示した。

「無能な者や不具者は自尊心が傷つけられたり砕かれると、その回復の手段として頼れるものはただひとつしかない。つまり『眼には眼を』というたとえのように復讐することだけである。一方、生産的に生きている人にはそういう必要はほとんどない。たとえ傷つけられ、侮辱され、損害を与えられても、生産的に暮らしている過程そのものが過去の傷を忘れさせる。生み出す能力というものは、復讐の欲求よりも強いことがわかる。」（p. 24）

ここでは、攻撃性をしのぐ人間の生み出す生産的能力を指摘している。さらにフロムは、以下のように結論づけている。

「代償的破壊性を治療する唯一の方法は、人間の内部に存在する創造のポテンシィ（潜在力）、つまり彼の人間的な力を生産的に利用しうる能力を発達させることである。」（p. 32）

生徒指導の課題である児童生徒のもつ「破壊性」と進路指導の機能である児童生徒の将来を創り出す「創造性」との関係性において、後者は前者をしのぐものというフロムの指摘は、進路指導と生徒指導との相互作用を教育活動の中で展開する筆者の提案を支持しているように捉えることができた。

キャリア教育と進路指導の関連

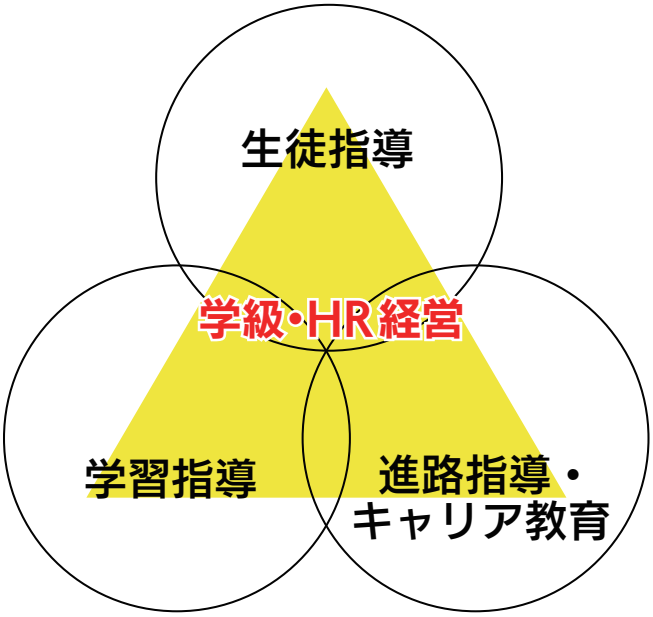
ここで『埼玉教育 500 号』の時にはなかったキャリア教育の概念を、進路指導との関係でみていきたい。1999（平成 11）年に中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」にて初めて登場したキャリア教育と進路指導との関係は、2017（平成 29）年の中学校学習指導要領、2018（平成 30）年の高等学校学習指導要領の改訂でようやく整理された。それぞれの「第１章総則」では、キャリア教育の中に進路指導があるとの位置づけとなっている。そのため本稿では以後、「進路指導・キャリア教育」と表記する。

学習指導要領の改訂で登場した「発達の支援」

2017（平成 29）年と 2018（平成 30）年の学習指導要領の改訂の特徴は、児童生徒の「発達の支援」が盛り込まれたことである。それ以前の学習指導要領では「第４　指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」として網羅的に示されていた教育活動を、具体的な児童生徒の発達を支援する内容を抜き出し、「児童（生徒）の発達の支援」として新たに項目を設定したのである。小・中・高の学習指導要領はほぼ同様の記述がされているが、最もわかりやすい中学校学習指導要領を挙げて説明する。同指導要領の「第１章総則」の「第４生徒の発達の支援」にある「１生徒の発達を支える指導の充実」の（１）、（２）、（３）及び（４）についてふれる。紙幅に限りがあるためこれら各項目を一つずつ吟味することはできないが、それぞれの項目に使用されているキーワードを中心に整理すると、生徒の発達を支える指導として以下の４項目、（１）学級・ＨＲ経営の充実、（２）生徒指導の充実、（３）キャリア教育の充実、（４）学習指導の充実、を特定することが

できる。

これら４項目の関係性であるが、学級・ＨＲ経営の充実が後に続く生徒指導、進路指導・キャリア教育、教科指導充実の基盤を形成すると考えると図１になるのではないか。学級 ・ ＨＲ経営を基盤にし、生徒指導、進路指導・キャリア教育、学習指導を充実することが、児童生徒の発達の支援を支える指導を充実することにつながるということである。33 年前の私の提案は、発達を支援すると解釈し直すと、学習指導も包含し、図２を目指すといえる。学習指導において授業技術等を身に付けることに加え､生徒指導や進路指導･キャリア教育を遂行する力量を身に付けていくことこそ、児童生徒の発達を総合的に支援することにつながるのである。



【図１　学級･HR 経営（三角形）を基盤に三つの指導が存在】

【図２　三つの指導が融合された形】

生徒指導提要の改訂

2022（令和４）年 12 月に 13 年ぶりに改訂された『生徒指導提要』では、生徒指導を「生徒指導とは、児童生徒が、社会の中で自分らしく生きることができる存在へと自発的・主体的に成長や発達する過程を支える教育活動のことである。なお、生徒指導上の課題に対応するために、必要に応じて指導や援助を行う。」と定義している。前半はほぼ進路指導・キャリア教育と同様の概念が提示され、後半に課題対応的生徒指導が示されている。

『生徒指導提要』の特徴の一つとしては、13 年前に出された旧版の生徒指導提要では５回のみを数えた語句「キャリア教育」の出現数が 35 回を数えることである。単なる「キャリア教育」の出現数であるが、『生徒指導提要』が進路指導・キャリア教育を捉える姿勢がこの 13 年間でも大きく変わったことを示している。さらにキャリア教育との関係性については、「１．１．３生徒指導との関連性」「（１）生徒指導とキャリア教育」の項に、「いじめや暴力行為などの生徒指導上の課題への対応においては、児童生徒の反省だけでは再発防止力は弱く、自他の人生への影響を考えること、自己の生き方を見つめること、自己の内面の変化を振り返ること、将来の夢や進路目標を明確にすることが重要です。」（p. 16）と記されている。「自他の人生への影響」は最初に引用したフロムの破壊性と創造性のもつ他者への影響に通底するところがある。いじめや暴力行為は、不登校や高校中退にもつながり、他者の人生への破壊的行為として影響を与える。この作用に対し、自分らしい生き方をめざすキャリア教育のもつ創造性で抑止につなぐということである。

おわりに

生徒指導と進路指導・キャリア教育の連携の必要性は、学習指導要領改訂や『生徒指導提要』で確実に明らかになり、さらには両者に学習指導が加わった。今こそ、生徒指導、進路指導・キャリア教育、さらに学習指導が力強く連携し、自分らしい生き方をめざすキャリア教育がもつ創造性を中核に､よりよく生き（生徒指導）、よりよく学ぶ（学習指導）学校教育が実現する道筋が示されたことに、この 33 年間の時の経過の重さを振り返るのである。

引用・参考文献

Fromm, E.（1964） THE HEART OF MAN-Its Genius for Good and Evil, Harper & Row, Publishers, New York（エーリッヒ・フロム　鈴木重吉（訳）（1965）悪について、紀伊国屋書店）

体育授業で教師の求められるアプローチ
～OECDラーニング・コンパスを手掛かりにして～

【プロフィール】
博士（教育学）。スポーツメンタルトレーナー。埼玉県公立小学校教諭、お茶の水女子大学附属小学校教諭を経て現職。著書は『ビジネスのハイパフォーマンスは「体育」が教えてくれる！』、『健康科学の話』、『感じと気づきを大切にした体育授業づくり』シリーズなど多数。小学校や教育委員会主催研修会の講師を務めたり、N－感覚的アプローチや組織文化といった視点からの研究を行ったりしている。

帝京大学教育学部 教授　成家（なりや）　篤史（あつし）

はじめに

2020年に新型コロナウイルスが世界中でパンデミックを起こし、現在もその猛威は収束していない。また、2022年２月にはウクライナで第２次世界大戦以降、最も激しい武力衝突と言われているロシアによる領土をめぐる争いが起きている。

これらの事案は数年前には多くの人々にとって予見できるものではなかった。AIの進展が著しい現代であっても先述した世界的に動揺を招いた事案は予測することは難しかった。その意味で、現代はVUCA[注1]と呼ばれる予測困難な時代といえるだろう。このような時代において、どのような体育授業が目指されていくべきか本稿で考えていきたい。

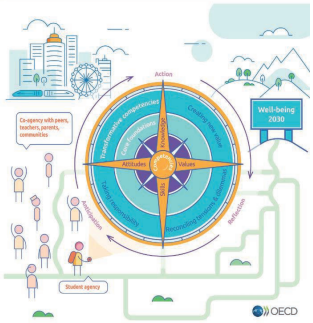
1　世界の動きから―OECDラーニング・コンパス―

体育授業は意図的・計画的な教育の場である。その授業づくりの指針として文部科学省は学習指導要領を告示し、この国の教育の道筋を示している。その一方、国の動きに影響を与えているのが世界の動きである。

世界的に影響がある指針の一つにOECDラーニング・コンパス（OECD、2020）が挙げられよう。我が国の体育授業の望むべき姿を議論するうえでは、世界の動きにも目を向ける必要があり、本稿ではこの点を押さえながら論を進めていきたい。

2　OECDラーニング・コンパスが目指すもの

OECDでは、予測がさらに困難になるであろう2030年の社会で、子供たちの個人的・社会的なウェルビーイング[注2]を目指し、育てていきたい人物像を検討してきた。その中で、生徒エージェンシーというキーファクターを示した。生徒エージェンシーとは「変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力」として定義づけられ、ラーニング・コンパスの中核をなしている。この生徒エージェンシーは、「働きかけられるというよりも自らが働きかけることであり、型にはめ込まれるというよりも自ら型を作ることであり、また他人の判断や選択に左右されるというよりも責任を持った判断や選択を行うこと」を指し、「生徒が自分の受ける教育において能動的な役割を果たす能力」と説明されている。



【OECDラーニング・コンパスイメージ図】
（OECD、2030）

生徒エージェンシーで定義づけられている「目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力」は目新しい能力ではないだろう。例えば、体育のボール運動を例にすれば、子供たちに次の試合の目標を立てさせ、実際に試合をしてみて、そこで発見した課題に対し、教師や仲間、副読本、ICT機器などを手掛かりにして解決していく能力である。そのため、子供たちが自ら主体的に取り組んでいける学習の仕掛けが求められている。このような授業づくり自体は従前より取り組まれていよう。

一方で、さらに検討が必要なのは、「働きかけられるというよりも自らが働きかけること」や「型にはめ込まれるというよりも自ら型を作ること」、「他人の判断や選択に左右されるというよりも責任を持った判断や選択を行うこと」という三つのキーワードである。これらのキーワードを掘り下げて検討することで、望まれる体育授業について理解を深めていきたい。

(1) 働きかけられるというよりも自らが働きかけること

ラーニング・コンパスでは受け身での学習ではなく、主体性のある学習が提起されている。主体性とは子供自身が主役の学習である。すなわち、自らの学習について選ぶ権利を有しており、その課題の解決についてはこれまでの経験や教師、仲間、副読本、ICT機器などを活用して取り組んでいくことである。

鉄棒運動の授業であれば、自分の能力に応じた技を選択し、その技に取り組んでいく中で生まれる課題について、様々な解決方法を試しながら学習していく。この課題を解決していく学習そのものが2030年を生きる子供たちには重要であり、“学び方”を学ぶことが必要とされている。鉄棒運動であれば、教師から“やらされる”学習ではなく、自ら“主体的に参加する”学習が求められる。そのためには、子供自ら、取り組んでみたい技を選び、練習方法を選択し学習していけるような展開が考えられる。子供が「やってみたい」と思えるような“自ら働き

かけたくなる”仕掛けが授業の前提であろう。

(2) 型にはめ込まれるというよりも自ら型を作ること

この言葉には注意が必要である。ややもすると、基本をないがしろにした自由奔放な学びが推奨されているようにも受け取れる。日本の武道には「守・破・離」という言葉がある。この言葉は、「守」の段階で技や動きの基礎基本を学び、それを自在に活用できるようになったうえで、「離」の段階でオリジナリティある技や動きへと昇華していくという意味で用いられている。

すなわち、基礎基本があって初めて型にはめられず、自ら型を作っていく段階にあるということである。その意味で、子供一人一人が自らの型を作っていくことができるように、基礎的なことを学んだ上で、それぞれの個に応じた学習が、子供の創意工夫のもとで展開されるというように理解できよう。

(3) 他人の判断や選択に左右されるというよりも責任を持った判断や選択を行うこと

責任を持った判断や選択を行うためには、拠り所となる根拠を持つことが求められる。ここでは、自らの偏った経験や志向で判断や選択を行っていくことが期待されているのではなく、いくつかの情報を手掛かりにして最適解にアプローチできる判断や選択が求められる。子供たちが活躍する2030年はSociety5.0の社会であり、他者と協働して仕事を行うことの重要さが更に増している。そのため、根拠となる情報をもとにして、仲間に意見を述べたり、仲間の意見に耳を傾けたりしながら最適解を求めていく学習が考えられる。

体育授業では、自分やグループの動きを動画に撮り、その動画を自分や友だちと分析し、課題解決の最適解を考えていく学習が挙げられる。例えば、バスケットボールの授業であれば、ゲーム後に自分たちでプレーを分析し、その分析に基づいて練習を考え、取り組んでみて、またゲームで試すという展開である。すなわち、教師の決めた練習を黙々とこなしていくということではなく、学習に関する裁量権を委譲するエンパワーメントを子供に与え、自分たちの責任のもと、学習を展開する機会を設けることが求められる。

3　体育授業で具現化していくために

先述してきた三つのキーワードを体育授業で具現化するための視点を整理したい。まず、「働きかけられるというよりも自らが働きかけること」が具現化されていくには、そもそも子供が「やってみたい」と思える仕掛けが必要であり、単元の中で「もっとやってみたい」と思える工夫が求められる。

「型にはめ込まれるというよりも自ら型を作ること」については、その運動をさらに楽しめるための基礎的なことを学んだ上で、それぞれの子供の創意工夫が生かされる授業展開が望まれる。そのため、先述したように子供たちにエンパワーメントがなされ、子供の思いや創意工夫が生かされる展開が求められる。

「他人の判断や選択に左右されるというよりも責任を持った判断や選択を行うこと」については、根拠となる情報をもとにして責任を持った判断や選択を行うことである。半面、ラーニング・コンパスでは共同エージェンシーという概念が提唱され、子供を取り巻く仲間や教師、保護者といったコミュニティーの中で協働して学習を深めることが求められている。そのため、学習においてはいくつかの情報をもとにして責任を持った判断や選択を行うが、その際に他者との関わりが重要になってこよう。

ここまでOECDラーニング・コンパスをもとにして議論をしてきた。この体育授業の根幹をなすのは心理的安全性である。授業を楽しむことも他者と関わり合うことも、自ら考えたアイディアを臆することなく学習の中で生かすこともその集団の中で心理的安全性が保障されていなければ発揮することは難しいだろう。その意味で、これからの体育授業の姿として、まずは日頃の集団づくりから心理的安全性が高い学級を目指しながら、楽しかったり、子供の創意工夫が生かされたり、仲間と関わり合ったりする授業を実践し、学級というコミュニティ全体の学習を高めようとする教師の視点が求められてくるだろう。それは、誰一人として取り残さないというSDGsの理念と重なる部分が大いにあると考える。

【他者と手をつなぎ、遊びの中で心理的安全性を育む】

注１:柴田ら(2019)によるとVUCAとはV(Volatility:不安定さ)、U(Uncertainty:不確実さ)、C(Complexity:複雑さ)、A(Ambiguity：曖昧さ)
の四つの単語の頭文字から作られた造語である。
注２：OECD（2020）によると、ウェルビーイングとは子供が幸福で充実した人生を送るために必要な心理的、認知的、社会的、身体的な働き（functioning）と潜在能力（capabilities）を指している。

参考文献

OECD（2020）OECD Future of Education and Skills 2030 Conceptual learning framework Concept note: Student Agency for 2030（日本語仮訳）.
柴田彰・岡部雅仁・加藤守和（2019）VUCA―変化の時代を生き抜く７つの条件―. 日本経済新聞出版社

連絡先：nariya@main.teikyo-u.ac.jp

「少年の健全育成に関する協定」締結について

教育局　県立学校部　生徒指導課　生徒指導・いじめ対策・非行防止担当　主幹　佐野（さの）　智（あきら）

1　はじめに

令和５年７月 26 日（水）、埼玉県教育委員会は、埼玉県警察、さいたま少年鑑別所及びさいたま市教育委員会と「少年の健全育成に関する協定」を締結した。

警察と鑑別所の連携協定は全国 26 地域で行われているが、県教育委員会が参加して締結するのは全国初となる。

今回は、協定に基づく少年鑑別所との具体的連携方法について説明する。

なお、協定では、20 歳未満の者を「少年」と記載しているので、今回は協定と同じように表現する。

【協定締結式の写真令和５年７月 26 日】
左側からさいたま市教育委員会教育長（竹居秀子）、埼玉県教育委員会教育長（日吉亨）、さいたま少年鑑別所所長（井上和則）、埼玉県警察本部長（鈴木基之）

2　少年鑑別所について

一般的に「少年鑑別所」というと、逮捕された少年の鑑別を行うために、収容して観護処遇を行うことから少年院と混同されることがあるが、両者は全く別の組織である。少年院は、家庭裁判所の審判の結果、保護処分となった少年を収容して、矯正教育その他の必要な処遇を行う施設である。

少年鑑別所が行う業務は、以下のとおりである。（法務省作成の「少年鑑別所のしおり」参照）

(1) 家庭裁判所等の求めに応じて行う鑑別
(2) 少年鑑別所に入所している者に対する観護処遇
(3) 非行及び犯罪の防止に関する地域援助

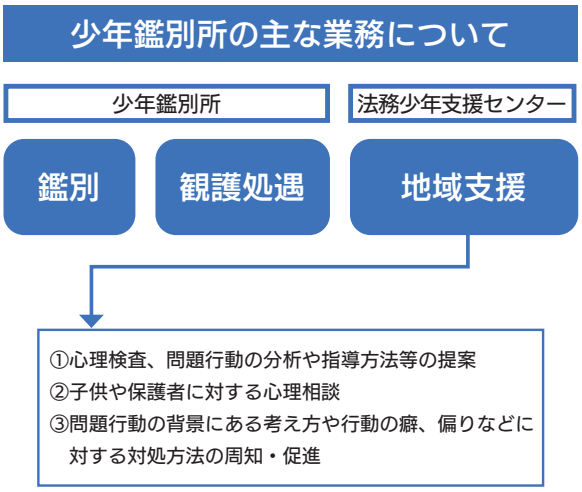
鑑別とは、医学・心理学・社会学・教育学などの専門的知識に基づき、少年の問題を明らかにし、処遇の適切な方針を示すことである。

観護処遇とは、鑑別所に収容している者に対する取扱いの全てを言い、入所した少年の自主性を尊重しつつ、健全な社会生活を営めるよう指導・助言も行う。

地域援助とは、少年鑑別所が持つ非行・犯罪の防止に関する専門的な知識や技術を活用して、地域社会における非行及び犯罪の防止に向けた活動を支援する取組である。

地域援助の活動は「少年の心理や性格面のアセスメント、心理検査、行動分析、心理相談、問題行動の背景にある考え方や行動の癖、偏りなどに注目した対処方法の提案、非行防止教室や要保護児童対策地域協議会などへの派遣」など多岐にわたり、少年鑑別所は、この業務を行う際は、「法務少年支援センター」という別称を用いて活動する。

なお、法務少年支援センターについては、令和４年 12 月に改訂された「生徒指導提要」にも外部関係機関として紹介されているので、参考とされたい。



【少年鑑別所の主な業務について】

3　協定について

法務少年支援センターは、先述のとおり、少年や保護者から心理相談等を受け、少年の特性について分析し、その結果を少年や保護者に提供し、少年の内面に焦点を当てた指導をしている。

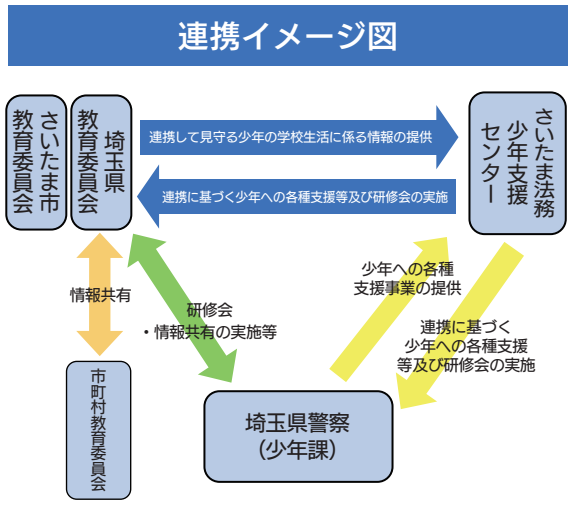
その結果を少年や保護者だけでなく、学校にも提供

できれば、家庭生活上の対応に加えて、学校生活における生徒指導の方法について幅が広がることが期待できる。

また、法務少年支援センターにとっても学校生活における日常の情報が加われば、より質の高い分析結果が得られ、少年への指導・援助に役立つことになる。

各関係機関が保有している情報は、それぞれの機関内で活用することを目的とした個人情報であり、外部機関と共有することは前提とはしていなかった。協定を結ぶに当たり協議を重ね、少年や保護者から同意を得て個人情報のやり取りを行うこととし、スムーズな連携が図れるよう要綱を定めて運用することとした。

これにより、協定に沿った枠組みで行われた心理検査や心理相談等の結果は、少年や保護者等に加え、学校にも法務少年支援センターの職員が説明し、少年の特性等を共有することができるようになった。



【連携イメージ図】

4　対象の少年について

法務少年支援センターは、非行や不良行為、家庭や学校でトラブルを繰り返すなど、学校だけでは対応が困難である少年を対象としている。

例えば、友人との問題解決における手段として「すぐに手が出て暴力を振るってしまう」少年がいたとする。

そのような場合、本人に対して「暴力を振るうことは、やられた人の心も体も傷つけることなので、やってはいけない。」等と繰り返し説諭するのが一般的である。

それで改悛（かいしゅん）すれば、その指導に効果があったことになるので、この段階では連携の対象とならない。

しかし、粘り強い指導でも暴力が止まらない場合や、教員が指導の手応えを全く感じられず、保護者も少年の行動に悩んでいる場合、今回の協定に基づく連携の対象となる。

5　法務少年支援センターに依頼できる支援について

繰り返し指導しても効果が上がらない場合は、学校だけでの対応が困難であり、外部関係機関と連携して問題行動の背景を探っていくことが重要である。

外部関係機関の例には、

・非行や不良行為等であれば「警察」

・虐待、福祉的要素の保護等は「児童相談所」

があるが、少年の心理的内面に関する指導方法の相談等であれば、「法務少年支援センター」が挙げられる。

法務少年支援センターに対して依頼できる支援としては、

・面接や心理検査の実施に基づくアセスメント及び情報提供

・少年への心理教育プログラム

・少年へのカウンセリング

・その他、健全育成に関する必要な支援

がある。

6　期待される効果について

協定に基づく連携が図られた場合、検査等の結果は、少年や保護者に加え、学校にもフィードバックされる。

つまり、科学的知見に基づいた少年の性格等に関する特性を知ることができる。学校は検査結果の読み解き方や、それに伴う留意点等について法務少年支援センターから直接アドバイスを受けることができる。それは、従来の指導方法に加え、医学、心理学、社会学に基づく見立てに繋がり、少年一人一人により合わせた指導が可能になるものと考えている。

7　おわりに

この協定では、県教育委員会が設置した学校のみならず、市町村教育委員会が設置した学校にも、法務少年支援センターとの連携が図れるよう県教育委員会が仲介することとしている。協定締結式で日吉亨教育長は「今後は、少年鑑別所から医学、心理学、社会学などを踏まえた専門的なアドバイスをいただき、児童生徒の『問題行動』の背景にある『考え方や行動の癖、偏り』など、児童生徒の内面に焦点を当てた、より効果的な指導が可能になるものと期待している。」（一部要約）との所感を述べた。

この協定によって、課題を抱えた児童生徒がより良い方向になることが期待されるとともに、学校がより的確な生徒指導を行うことが可能になる。この連携を通して、生徒指導上の課題を抱える学校をサポートしていきたい。

高校内分校の設置について

教育局　県立学校部　特別支援教育課　教育環境整備推進担当　指導主事　橋本（はしもと）　昌一郎（しょういちろう）

1　高校内分校とは

県では、障害のある生徒とない生徒が共に学ぶ機会の拡大を図るとともに、特別支援学校の生徒増加に伴う教育環境の整備を進めるため、特別支援学校の高校内分校設置を進めている。高校内分校とは、高等学校の施設内に設置される知的障害特別支援学校高等部の分校のことである。教科学習に加え、職業教育にも力を入れた学びの場であり、自力通学が可能な高等部の生徒を対象としている。通学区域は県内全域となっており、市町村立中学校の特別支援学級に通う生徒や特別支援学校中学部に在籍する生徒にとって、進路選択の幅を広げるものとして大変意義深いものとなっている。

2　本県における高校内分校の設置状況

県では、平成20年度に県内初となる高校内分校として川越特別支援学校川越たかしな分校、大宮北特別支援学校さいたま西分校、三郷特別支援学校草加分校（現草加かがやき特別支援学校草加分校）が開校した。その後、令和３年度に越谷西特別支援学校松伏分校が開校した。さらに埼玉県特別支援教育推進計画に基づき、令和４年度に春日部特別支援学校宮代分校、上尾特別支援学校上尾南分校、騎西特別支援学校北本分校が開校した。また、令和５年度には川口特別支援学校鳩ケ谷分校、狭山特別支援学校狭山清陵分校、久喜特別支援学校白岡分校が開校した。県内の高校内分校は、今年度の時点で合計10校となり、高校段階におけるインクルーシブ教育システムの構築を推進する取組として一定の成果をあげている。

3　令和５年度開校分校の特色

⑴　高等学校との交流

同じ敷地・校舎内で学ぶという環境を生かし、既存の高校内分校と同様に、交流及び共同学習に積極的に取り組んでいる。今年度は既に、分校と高等学校との対面式、新体力テスト、体育祭、球技大会など、様々な学校行事を合同で実施した。今後は、文化祭などに加え、学校によっては強歩大会や芸術鑑賞会、防災訓練等も合同で実施する計画となっている。また、互いの授業を体験し合う取組や、部活動を通した交流なども実施しているところである。これらの取組により、高等学校の生徒は互いを尊重することの大切さを学び、分校の生徒は自信を深め、積極的に社会と関わる意欲が育まれている。

【高等学校の体育祭に参加する様子（鳩ケ谷分校）】

⑵　分校同士の交流

４月下旬には名栗げんきプラザでの宿泊学習を鳩ケ谷分校と狭山清陵分校とが合同で実施し、現地において分校間の交流が実現した。宿泊学習終了後も事後学習として互いに手紙を交換し、分校同士の絆を深め合うことができた。

【名栗げんきプラザでの交流（鳩ケ谷分校・狭山清陵分校）】

⑶　地域との交流

各分校においては、地域の施設や企業等との連携に力を入れ、特色ある教育活動を実施している。鳩ケ谷分校では、大型ショッピングモールや市立グリーンセンターや介護老人保健施設が徒歩圏内にあるという立地条件を生かし、様々な就業体験を行う「鳩ケ谷分校版デュアルシステム」の実施に向け、

準備を進めている。狭山清陵分校では、近隣の高等学校や特別支援学校と共に、市内の高等学校が地域の茶園の協力の下で実施している狭山茶を使った紅茶づくりに参加し、「５校連携　狭紅茶プロジェクト」として、協働して茶摘みや茶揉みなどの活動を行っている。白岡分校では、市の包括支援センターからの誘いを受けて、白岡市・蓮田市で行われている「ひまわりプロジェクト」に参加し、ひまわりの栽培育成を行った。

【茶園での茶摘みの様子（狭山清陵分校）】

⑷　教育環境の特色

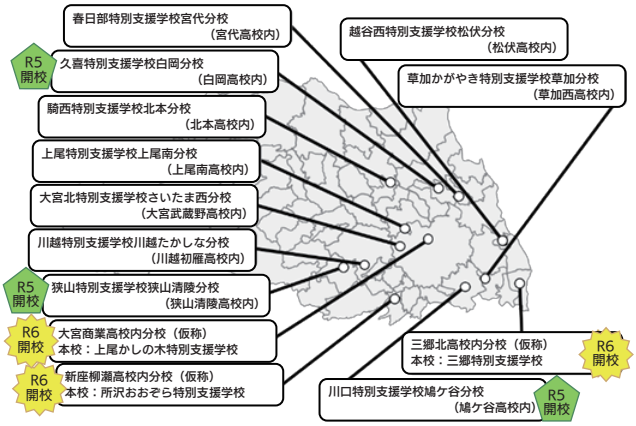
既存の高校内分校と同様、ICT を活用した教育環境の充実にも力を入れており、各教室にはプロジェクターを設置している。また、高等学校と同様に校内ではほぼすべての敷地内からネットワークに接続できるようになっている。さらに、３校共に職員室の一部をフリーアドレス制にしたスマート職員室となっており、業務においても ICT を活用し、ペーパーレスに取り組むなどの働き方改革にも工夫を凝らしている。

【スマート職員室（白岡分校）】

川口特別支援学校鳩ケ谷分校
(https://kawaguchitokubetusienbunkou-sh.spec.ed.jp)
狭山特別支援学校狭山清陵分校
(https://sayamatokubetusienbunkou-sh.spec.ed.jp)
久喜特別支援学校白岡分校
(https://kukitokubetusienbunkou-sh.spec.ed.jp)

4　令和６年度開校予定の分校

埼玉県特別支援教育推進計画に基づき、上述した10 校の高校内分校に加えて、令和６年４月の開校を目指して大宮商業高校内分校（仮称）、新座柳瀬高校内分校（仮称）、三郷北高校内分校（仮称）の整備を進めている。これらの分校を含め、県内の高校内分校は合計 13 校となる予定である。各分校における工事の進捗状況や学校説明会の案内などについては、それぞれの開設準備室のホームページにて公開している。
大宮商業高校内分校（仮称）開設準備室
(https://kasinokitokubetusienbunkou-sh.spec.ed.jp)
新座柳瀬高校内分校（仮称）開設準備室
(https://oozoratokubetusienbunkou-sh.spec.ed.jp)
三郷北高校内分校（仮称）開設準備室
(https://misatotokubetusienbunkou-sh.spec.ed.jp)



【県内の高校内分校】

5　今後の展望

高校内分校の管理職と分校設置校（高等学校）の管理職による連絡協議会など、各学校における実践や課題の共有、情報交換を年１回ではあるが実施しており、高等学校と共に行う高校内分校の実践は毎年ブラッシュアップされている。

特別支援教育に対するニーズが年々高まっている状況の中、高校内分校の整備により知的障害のある生徒にとって進路選択の幅が広がっている。しかし、知的障害特別支援学校を中心に学校の過密状況は依然として本県の課題となっている。こうした状況に鑑み、県では今後もインクルーシブ教育システムの構築による、障害のある者とない者が共に学ぶ環境づくりの推進と、連続性のある多様な学びの場の充実を両輪として、教育環境の整備に引き続き取り組んでいく。

「鎌倉殿の 13 人」に沸いた一年

嵐山史跡の博物館　副館長　安藤（あんどう）　伊知郎（いちろう）

昨年・2022（令和４）年の NHK 大河ドラマのタイトルは「鎌倉殿の 13 人」であった。

カマクラドノとは？ 13 人？謎めいたタイトルに、まず興味をひかれる。NHK は、このドラマを次のように宣伝した。「三谷幸喜が贈る予測不能エンターテインメント！」

血で血を洗う中世の黎明（れいめい）期を、様々な人たちの笑いや涙、駆け引きの機微などを通じてエンターテインメントとして描くのかと思っていたが、それが当館とゆかりの深いものになるとは、最初は思っていなかった。

【嵐山史跡の博物館について】

当館は、県央部の嵐山町にある国指定史跡「比企城館跡群菅谷館跡」に建つ県立博物館である。この「館跡」（図１）は鎌倉時代の武将・畠山重忠が居所を構えたところと伝えられ、今年（2023 年）で国の史跡に指定されてから 50 周年を迎えた。史跡の範囲はおよそ 13 万㎡に及び、現在みられる遺構は、畠山重忠の時代から 300 年ほど後の戦国時代に築かれた平城だとされている。堀や土塁（図２）がよく残っていることから、菅谷館跡（菅谷城）は続日本百名城の一つに名を連ねている。

【図１　館跡】

【図２　土塁】

現在の当館は、常勤職員６人、当初予算（当館予算措置分）1200 万円弱という小規模な博物館だ。年間約 300 日を開館し、企画展や学校団体対応、講座講演会の開催などにも取り組んでいる。収入は、入館料やグッズの売上などで年間 200 万円程度を見込んでいるが、事業費の２割にも満たないのが実情である。

【畠山重忠とは】

重忠（図３）は、武蔵国の豪族・畠山重能の次男として 1164 年に深谷市畠山で生まれたとされる。畠山氏は秩父平氏の流れをくむ一族であり、重忠も当初は平氏方についていたが、その後は源氏（源頼朝）に仕えるようになり、宇治川の戦いや一の谷の合戦、奥州合戦などで手柄を立てた。頼朝が鎌倉幕府を開いたのちも御家人として数々の実績を積み重ね、音曲（おんぎょく）の才能にも恵まれた重忠は「坂東武士の鑑（かがみ）」とも呼ばれるようになった。

そんな重忠も、「鎌倉殿」たちのパワーゲームの果てに、北条氏の謀略により非業の死を遂げることとなる。1205 年、重忠 42 歳の時であった。

なお、大河ドラマで重忠を演じたのは、若手の俳優・中川大志さんだった。NHK の方針によって出演者を前面に出した PR はできなかったが、中川さんの何かを期待してきた若い入館者も少なくなかったようだ。

【誘客施策】

映画・ドラマのロケ地やアニメのモデルになった場所を熱心なファンが訪れることを「聖地巡礼」と言う。富良野や葛飾柴又、尾道などは有名だし、県内でも鷲宮神社や秩父はアニメの聖地として知られている。

そうした中、「青天を衝け」「鎌倉殿の 13 人」と２年連続して大河ドラマのゆかりの地となる深谷市は動きが早かった。渋沢栄一は言うまでもないが、畠山重忠が深谷市畠山（旧川本町）の生まれと伝えられているからだ。

【図３畠山重忠像】

また、菅谷館跡を擁する嵐山町や、歴史の舞台から忽然（こつぜん）と消えた（消された）比企氏一族の本拠・東松山など比企郡の市町は、「鎌倉殿の 13 人」放送に合わせて地域の知名度アップや活性化に動いた。大河ドラマの放送開始前後から、当館やその周囲に何種類もののぼり旗がはためくようになった。

県全体の観光振興を推進する観光課からも、様々な働きかけがあった。多様なメディアに対して畠山重忠や比企氏の PR を仕掛け、比企地域の観光情報を盛り込んだパンフレットの作成に力を貸してくれた。さらに、オリジナルのクリアファイルやエコバッグなどの作成、「埼玉の鎌倉」をめぐるデジタルスタンプラリーの開催、菅谷館跡の見学を組み込んだ「はとバス」ツアーの設定など、当館にとって、かつてない異様な高揚感の漂う年だったように感じられる。

【嵐山重忠まつり】

嵐山町では、以前から 11 月上旬に「時代まつり（嵐山まつり）」が町主導で開催されていたが、コロナ禍で開催中止が続いていた。しかし、2022 年は大河ドラマに地元ゆかりの畠山重忠が登場するとあって、嵐山町も動き出した。

2022 年５月 15 日、菅谷館跡と当館を会場に「嵐山重忠まつり」（図４）が開催された。和太鼓やなぎなたの演武、流鏑馬（やぶさめ）など、「お

【図４　嵐山重忠祭り】

祭り」を華やかに開催する一方、重忠に関する知識と町への愛着を持ってもらうことを目的に、町長発案のご当地検定「らんざん重忠検定」（図５）が開催された。この検定に当たっては、広く町民から問題文を募るとともに、当館の学芸員も監修に加わった。

【図５　らんざん重忠検定】

【企画展】

当館では年に１回、企画展を開催してきたが、2022 年の企画展は、大河ドラマに寄せたテーマでなければ誰も納得してくれないような状況になっていた。

そこで名付けたタイトルは「武蔵武士と源氏―鎌倉殿誕生の時代―」である。畠山重忠をメインとしつつ比企氏なども取り上げ、鎌倉時代における武蔵武士の実像をあぶりだすことを目指した。会期は 10 月１日から 11 月 14 日までとした。

【図６　企画展のチラシ】

菅谷館跡では主に 1970 年代に数回の発掘調査が行われたが、鎌倉時代の遺物はほとんど出土していない。企画展でその時代の武蔵武士を紹介するには資料が少なく、地域に残る武士ゆかりの品々や伝承などにも目を向けて内容を構成し、企画展開催にこぎつけた。

埼玉県警察学校の校長室に“馬をかつぐ重忠”の大きな絵があったという情報を得て担当者が調査・交渉し、「博物館で初公開」の絵画として展示したのがヒットだった。企画展のチラシ（図６）や図録の表紙にも、その絵を採用した。

【重忠ロボット】

当館の展示室入口に、重忠ロボットと呼ばれる等身大の人形が立っている。観覧者が近づくと身振り手振りとともに館内外の案内を語りかけていたが、年老いた今ではまったく体が動かなくなり、声を発するのみとなっていた。

【図７　重忠ロボット】

その「声だけ重忠」を逆手に取り、プロ声優を起用した案内音声を流すことにした。その方は杉田智和さん。嵐山町出身の声優で、ドラマや CM 等での声の出演多数、『ワンピース』や『鬼滅の刃』などのアニメ作品にも数多く出演されている。企画展の期間中のみという契約で、いい声を聞かせてくれた。広報効果は抜群で、杉田さんの声を目当てに来館する方も多くいた。

契約終了後、重忠ロボットによる案内音声は、県立滑川総合高校放送映像部の協力を得て、校内オーディションで選ばれた生徒や教員ら４人の声を交互に登用した。残念ながらロボットは喉の調子も悪くなり、今では山門の仁王のように黙って観覧者を見つめるのみとなっている。

【数字に見る大河ドラマ効果】

大河ドラマに限らず、出版物や映像作品等の舞台などになると世間の注目が高まり、地域の価値の向上や観光入込数の増加、それに伴う地域経済の活性化など多くの効果が期待できる。行政としても、経済波及効果を試算して地域振興策を立案していくということが多く行われてきた。

【図８　来館者】

「鎌倉殿の 13 人」は、主な舞台は鎌倉であり、また北条氏の本拠だった伊豆方面でもかなり観光誘致に力を入れた。そうしたところでは経済波及効果の試算値などを公表しているが、「源頼朝」や「畠山重忠」といった単発の人物に関する試算値となると、ほとんど目にすることはできない。

比企地域でも、観光・経済面における“大河ドラマ効果”は未知数であった。当初は、１月の放送開始から比較的早い時期に比企氏や重忠は退場するのではないかとの推測もあったが、始まってみれば中川さん演じる重忠は９月まで出番が続いた。当館では 10 月１日から企画展が始まり、盛り上がった重忠人気を受けて入館者数は近年になく好調な結果となった。

しかし、12 月をもって大河ドラマ「鎌倉殿の 13 人」が終了すると、当館の入館者数は落ち着きを見せた。大河ドラマという“宴”が終わり、当館が閑静な“本来の姿”に戻ったことが読み取れる。

【大河ドラマのレガシー継承は…】

ドラマの開始とともに地域が盛り上がり、その終了でブームが去るというのは自然な流れである。大切なのは、いったん高まった人々の興味関心を、いかに持続させていくことができるかという難しい取組である。

【図９　御城印】

当館では、新出の資料や収蔵品が乏しく、常設展示で入館者を引きつけるのは厳しい。展示で客が呼べなければ、話題で呼ぶしかない。しかし独自のイベントを打つような底力のない当館としては、当面、オリジナルグッズの作成・販売に活路を見出すことにした。当館では、以前から過去の展示図録や「御城印」などを販売してきたが、2022 年度以降、畠山重忠ファンには重忠をモチーフとしたトートバッグやカプセルトイ（ガチャ）の企画販売を、お城・城郭ファンに対してはカード型パンフレット「武蔵国城館カード」の作成・配布と、大妻嵐山高校の書道部生徒４人が書いた文字を採用した御城印（図９）の販売も始めた。これらのグッズはいずれも好評を得ており、大人１人 100 円という観覧料より販売単価が高いこともあり、当館歳入の大きな柱となっている。

【おわりに】

NHK 大河ドラマ「鎌倉殿の 13 人」の放送が終わり、間もなく１年が経過する。嵐山でも、もう鎌倉殿云々という言葉を耳にすることはほとんどなくなったが、私たちは、地中に眠るであろう坂東武士の鑑・畠山重忠の足跡をしっかりと未来へ残していく使命を負っている。重忠の世からおよそ 800 年、これからも１年１年、静かに、そして確実に、嵐山菅谷の地を守っていく所存である。

児童生徒の自立を促す小中一貫教育

【プロフィール】
東京都公立中学校外国語科教員。香港日本人学校、台東区教育委員会、東京都教職員研修センター等でも勤務。港区立お台場学園、同青山中学校の校長を経て、現職。中央教育審議会小中一貫教育特別部会委員、全日本中学校長会教育研究部長等を歴任。現在、港区お台場アカデミー学校運営協議会委員。大学在学中から現在も、地域青少年野外活動リーダーとして活動中。
玉川大学　教師教育リサーチセンター　客員教授　福井（ふくい）　正仁（まさよし）

1　９学年間連続の長い視点

小中連携・一貫校、義務教育学校等、義務教育段階の子供たちの学びを分断せず９学年間の視点で教育を行う学校が年々増加している。かつての小学校、中学校は、それぞれの発達段階の児童生徒の教育に集中して取り組む一方、異校種への理解は必ずしも十分ではなかったように感じる。

筆者は、2008 年度から５年間、港区立港陽小学校及び小中一貫教育校お台場学園（東京都）で勤務した。本稿では、一貫校の開校準備、開校後の実践を基にして、９学年間の視点の重要性について整理したい。

2　「小中一貫校文化」の創出

「小学校文化」、「中学校文化」を融合し、「小中一貫校文化」に昇華させるため、「『就学時健康診断』から『成績一覧表調査』まで」をキャッチ・フレーズとし、小・中学校相互の理解を促進し、協働できる組織作りを目指した。

一貫校開校当初は、小・中学校の教員間の「壁」が目立った。例えば、文化的行事の準備では、教師主導で細かく丁寧に指導を進める小学校と、生徒主体で企画・運営を進める中学校との間のギャップが大きく、教員相互も批判的に異校種の指導を見る傾向があった。それでも、両者が共に準備を進めていくと、それぞれの学年の発達段階に適した指導内容や方法があることを理解するようになった。そして、互いの指導のよさを認め合うことが、「小中一貫校文化」の創出につながった。

【１年生から９年生までが使う机といす】

3　小中一貫校の利点を生かした多様な取組

(1) ４－３－２制の教育区分

９学年をⅠ期（第１～４学年）、Ⅱ期（第５～７学年）、Ⅲ期（第８・９学年）とし、発達段階に合わせた指導を工夫した。毎週の児童生徒朝会は、全校朝会、Ⅰ～Ⅲ期別のブロック朝会等、多様な形態・内容で実施した。ただし、全ての教育活動を全校単位やブロックごとに行うのではなく、小学校単位、中学校単位の行事や活動も大切にした。つまり、小中一貫教育は、堅実な小学校教育、中学校教育が基盤であると捉えた。

(2) ９学年間で「子供」を「大人」に

今日、学校や社会で子供たちに対して大変丁寧な対応がなされ、失敗を事前に回避し、安心して生活できる環境が整っている。一方で、子供たちが自ら選択する機会が少なく、「皆と同じ」考えをもち、一緒に行動することで安心し、受動的になりがちである。

そこで、小中一貫校の利点を生かし、学年ごとの発達段階を踏まえ、生活面、学習面で段階的に自立を促す取組を工夫した。例えば、１年生は、幼稚園・保育所等でのリーダーシップを超える経験をさせるため、定期的に隣接する幼稚園に行き、幼児の遊びに関わらせた。６年生は、一貫校になることによってリーダーシップ発揮の機会が減少しないよう、１年生を迎える会等の小学校行事の企画・運営を全面的に任せた。さらに、全国の自治体等の視察受入れの際、児童・生徒会に学校の説明や校内案内を分担させた。

様々な機会に児童生徒を「大人扱い」することで、一人一人が自らの考えをもち、行動するよう促した。小中一貫教育校の教員は、学年の発達段階に応じて児童生徒に適した指導が行える専門家集団である。専門家集団でこそ、児童生徒が「横並びに安住する」のではなく、それぞれの特性や興味・関心に応じて多様な活動に挑戦する勇気を引き出すことができる。

生徒指導では、思春期の生徒への指導経験が豊富な中学校教員の指導が、小学校高学年の指導に役立つ。高学年児童は思春期の入り口に差しかかっており、これまでの教師主導から脱却し、自分たちの考えの下に自分たちで活動を計画し実行した

いとの思いが強まる。一方、教師は、高学年であってもまだ子供で、教師が丁寧に指示して活動させなければと心配しがちである。児童も自立への気持ちが芽生え、教師も熱心に指導したいと思っている。この両者の思いがかみ合わないことが大きな課題で、その解決の糸口は、子供の成長を９学年間の長い視点で俯瞰（ふかん）することにあると考える。

他方、小学校教員が、児童一人一人への深い理解を基にしてきめ細かく指導を進める姿勢からも、中学校教員が多くを学び、生徒の指導にも役立つ。

(3) 意図的な「中１ギャップ」の設定

お台場の地域は海に囲まれ、最新技術を駆使して計画的に設計された街に約 5,500 名が居住し、人間関係は濃密で、大変温かい雰囲気である。

一貫校開校準備の段階で、学校と家庭、地域の段差が少ない温かい環境下で、一貫校になると中学校進学の緊張感もなくなるとの意見が多くの保護者から寄せられた。一般に、小中一貫教育のねらいの一つに、「中１ギャップ」の解消があるが、お台場学園は、７年生の「児童返り」を防ぐため、意図的な「中１ギャップ」を設定した。つまり、６年生までの経験を十分に生かし、その次のステップに上ることを生徒も教員も強く意識した。そのため、７年生には、教育区分Ⅱ期の最上級生としてブロック朝会・集会でリーダーシップを発揮させるなど、自分たちが計画し、実行する機会を数多く設けた。

【小・中学校の時程の工夫】

(4) 小中一貫教育のカリキュラム編成

全教員が各教科等の分科会に分かれ、学識経験者の助言を受けながら、小中一貫カリキュラム「ODAIBA プラン」を作成した。

初めに９学年間で育てたい力を明確にし、各学年の発達の特性に応じて重点指導項目を設定した。次に、９学年間の指導内容を一覧表にまとめ、各学年間の指導内容の関連を明らかにした。さらに、９学年間の相互に関連する指導内容を抽出し、単元や項目ごとに整理した。そして、同じ内容の反復学習や「先取り」を取り入れた。また、家庭学習の習慣化のための取組、校内のコンテストの実施、外部の検定の活用なども組み込んだ。

第５・６学年の一部教科で教科担任制を取り入れ、算数・数学では教育課程特例校の指定を受け、一部上級学年の内容を先取りして指導する学習内容の組み換えを行った。学習のつまずきを解消し、苦手意識を克服させることで、児童生徒の学習意欲の向上を図り、「繰り返し学習」や「発展的学習」を充実させ、基礎・基本の定着と活用力の向上を図った。

教員が、小･中学校両方の授業を担当できるよう、小学校 45 分、中学校 50 分の長さは変えず、一日の時程を工夫した。（【小･中学校の時程の工夫】参照）

また、中学校の部活動に小学校高学年の希望者が参加し、５～９年生による活動を実施した。

(5) 地域の特性を生かした小中一貫教育

お台場学園は、コミュニティ・スクールとして、にじのはし幼稚園、台場保育園、台場児童館と日常的に情報を共有しながら教育活動を推進している。また、青少年対策地区委員会、防災協議会など、お台場の様々な組織が有機的につながり、子供たちの多様な体験の機会を創り出している。

海に囲まれた環境を生かした活動として、お台場海苔づくりや部活動のセーリングヨット部の活動が挙げられる。海苔づくりは、学校、PTA、海洋･環境の専門機関、地域組織と国・都・区の行政等で構成する「お台場環境教育推進協議会」を組織して、17 年間継続して実施している。

５～９年生全員が「お台場学園防災ジュニア・ティーム」を編成し、定期的な訓練を実施して災害に備えている。東日本大震災では、約千名が学園に避難し、うち 600 名が一夜を明かした。このティームの中学生が日頃の訓練での手順どおりに避難場所の設営や食糧の提供を淡々と行う姿は人々の感動を呼び、避難者相互の助け合いにつながった。

4　質の高い小中一貫教育を目指して

幼稚園３歳児から９年生までが協働して取り組む幼小中合同運動会に象徴されるように、学園では毎日異学年が触れ合って生活している。加えて、地域組織の重層的な支援により、多くの人々が日常的に子供たちと関わっている。子供たちは､数多くの人と関わり、多様な経験を重ねることにより、自分の考えをもち、主体的に行動できるようになっている。卒業後のつながりも強く、地域の活動にリーダーとして参加することも多い。お台場学園の「小中一貫校文化」を土台に、これからの時代に求められる幅広い資質・能力を児童生徒に育成するため、時代を先取りした小中一貫教育の内容を模索し、児童生徒の一層の自立を促すことが課題である。

教育委員会・学校・家庭の連携による子供たちのSOSをキャッチする取組
～鶴ヶ島市「心と身体の健康観察」～

【プロフィール】
本稿では、長期休業中の児童生徒の心身の状況把握や教育相談の実施に向け、保護者に協力をいただき、教育委員会と学校が行ってきた取組を紹介する。

鶴ヶ島市教育委員会
学校教育課　指導主事　梅舘（うめだて）　雅敏（まさとし）
鶴ヶ島市立教育センター　主幹兼指導主事　田中（たなか）　仁也（じんや）
鶴ヶ島市立教育センター　カウンセラー　服部（はっとり）　彩子（あやこ）
教育部　参事　深谷（ふかや）　朋代（ともよ）

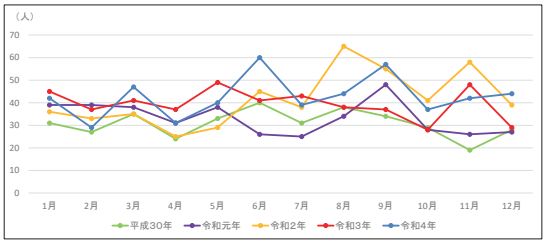
1　はじめに

鶴ヶ島市は、人口約７万人で埼玉県のほぼ中央に位置している。山や大きな河川がなく災害リスクが少ない市である。また、交通機関は、東武東上線鶴ヶ島駅から池袋まで約 40 分で、東京メトロ有楽町線・東横線直通、高速道路においては、圏央道と関越道が市内で交わり、二つの IC を持つなど首都圏の重要な交通の要衝である。

さて、近年、児童生徒を取り巻く社会環境や生活環境の急激な変化が、児童生徒の心身の健康に大きな影響を与えている。警察庁・厚生労働省の自殺統計によると、令和４年の児童生徒の自殺者数は 514 人と過去最多となり、大変憂慮すべき状況にある。また、令和５年の児童生徒の自殺者数は、１月から５月までの暫定値で 164 人（令和４年同期間：190 人）という状況である。

18 歳以下の自殺は、学校の長期休業明けに増加する傾向があり、これらの時期に、学校として、保護者、関係機関等と連携しつつ、児童生徒の尊い命を守るため、自殺予防の取組に全力で取り組む必要がある。

児童生徒の月別自殺者数［推移］



（人）

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
平成30年	31	27	35	24	33	40	31	38	34	29	19	28	369
令和元年	39	39	38	31	38	26	25	34	48	28	26	27	399
令和2年	36	33	35	25	29	45	38	65	55	41	58	39	499
令和3年	45	37	41	37	49	41	43	38	37	28	48	29	473
令和4年	42	29	48	31	40	62	39	44	57	37	41	44	514

（出典）「自殺の統計：地域における自殺の基礎資料」（暫定値）及び「自殺の統計：各年の状況」（確定値）を基に作成。

【児童生徒の月別自殺者数［推移］】

そのような状況を踏まえ、本市では、「１　児童生徒が声に出しづらい心の辛さを訴えやすくする。」「２　児童生徒の抱える精神不調や自殺リスクの見過ごしを防ぐ。」「３　必要な対応を早期に開始する。」ことを目的とした、児童生徒の心と身体の状態に関するアンケートを実施することとした。アンケート実施後は、教職員が児童生徒の精神不調や自殺リスクのスクリーニングを行うとともに面談等の支援につなげることで、長期休業明けの自殺リスクや登校不安の軽減を図っていく。

【本調査】令和５年８月 19 日（土）、20 日（日）
【面談対応】令和５年８月 21 日（月）～ 25 日（金）
【対　象】市内全小中学校　小学４年生～中学３年生

2　本調査実施までの取組

本調査実施に向けて、保護者に協力をいただき、教育委員会・学校が計画・実施してきた取組は以下のとおりである。

(1) アンケート作成

ア　専門的知見を踏まえた担当者会議の実施

令和４年８月から、月１回程度、担当者会議を実施した。担当者は、学校教育の様子が分かり、かつ、生徒指導・教育相談を担当している指導主事と専門的知見を備えている教育センターカウンセラー（公認心理師・臨床心理士）とした。

抑うつ状態の評価尺度である PHQ-9（Patient Health Questionnaire-9）や国立成育医療研究センターの調査（2021）、心理学の SUD（Subjective Units of Distress）を参考にし、協議を重ねた結果、次の質問項目を設定した。

1.　この２週間のうち、次のことがどれくらいありましたか。当てはまるものを選びましょう。

１－１．いつもよりおなかがすかない・食欲がない	ない・少しある・とてもある
１－２．食べすぎてしまう	ない・少しある・とてもある
１－３．イライラする	ない・少しある・とてもある
１－４．夜、眠れない	ない・少しある・とてもある
１－５．寝すぎてしまう	ない・少しある・とてもある
１－６．夜中や朝早くに目が覚めてしまう	ない・少しある・とてもある
１－７．怖い夢を見る	ない・少しある・とてもある
１－８．自分が好きなことでも集中できない	ない・少しある・とてもある
１－９．何をしても楽しめない	ない・少しある・とてもある
１－10．元気が出ない	ない・少しある・とてもある
１－11．自分はダメな人間だと感じる、家族に迷惑をかけていると感じる	ない・少しある・とてもある
１－12．生きていても仕方ないと思うことがある	ない・少しある・とてもある

2.　この１か月、以下のようなことはありましたか。当てはまるものを選びましょう。

２－１．週１回以上、頭が痛い	いいえ　・　はい
２－２．週１回以上、おなか（もしくは胃）が痛い	いいえ　・　はい
２－３．週１回以上、腰が痛い	いいえ　・　はい
２－４．週１回以上、めまいがする	いいえ　・　はい

３．１学期を終えて、あなたの学校生活の満足度について質問します。
３－１．学習面の満足度は何点ですか。（０～１００で答えてください）　（　　点）
３－２．友人関係の満足度は何点ですか。（０～１００で答えてください）　（　　点）
（100点は『とても満足している（とても楽しい）』、０点は『まったく満足していない（とても不満、つまらない）』５０点は『ふつう、まあまあ』と考えて、大まかに点数をつけてください。）

４．これから迎える２学期に対して、質問します。
学校に行きたくない気持ちがありますか。　はい　・　いいえ
「はい」と答えた人は、その理由を教えてください。

５．面談する場合、だれとどんな方法で話がしたいですか。当てはまるものすべてを選びましょう。
５－１．誰　…校長先生／教頭先生／保健室の先生／その他（　　先生）
５－２．方法…直接会う／オンライン／電話

【「心と身体の健康観察」質問項目（小学校版）】

児童生徒の精神不調や自殺リスクの要因は、心理的・身体的要因や家庭的要因、学業、友人関係などの学校生活上の問題、進路問題など多岐にわたる。したがって、アンケート後に個別面談をする場合、児童生徒が話をしたい相手を選べることが大切であると考えた。

また、自分が相談したい人と相談できる機会とすることで、「困ったときには、誰に相談しても良い。」ということを実感させることができる。

そこで、質問の最後に、児童生徒が面談相手・方法を選ぶことができる項目を設定した。面談実施の際、特に小学校では、「まずは担任が面談」と考えがちだが、これからの学校は、教職員のメンタルヘルスリテラシーの向上を図り、全教職員で児童生徒一人一人を見守っていく体制づくりを行うことが重要である。

イ　ICT の活用

様々な悩みや不安を抱えた児童生徒に対する多様な相談の選択肢を用意することは、問題の深刻化を未然に防ぐという点から自殺予防において不可欠な取組であると捉えている。また、本取組は、長期休業明けの自殺リスクや登校不安の軽減を図る目的から、長期休業中に実施することが重要である。

そこで、一人１台の学習用端末の活用により、家庭でアンケートを実施し、その結果を即時に教職員が把握できるようにした。

また、特別なアプリケーションではなく、標準仕様の Google Forms を活用した。

(2)　段階的な調査の実施

ア　第１回試行調査

【調　査】令和５年２月下旬
【ねらい】リスク分析の指標を立てる。
【対　象】市内小・中学校１校ずつ（協力校）
【成果等】調査結果から、以下の指標とした。

判断基準	面談者	自殺・自傷リスク
「合計スコア」上位（基準：10点以上）かつ問1⑪⑫両方について、「とてもある」と回答	スクールカウンセラー（以下、SC）※1	高 ↑ 低
「合計スコア」が 10 点以上 ※2	管理職、養護教諭、担任等（児童生徒の希望者）	
問3に 30 点以下の項目有	面談を行うか組織(学年等)で判断 ※3	
問4に「はい」と回答		

※１　SC が直接児童生徒や保護者に連絡することが逆効果と判断する時は、まず教職員（養護教諭や担任等）が連絡し、SC とつなげる。
※２　面談対象者があまりにも多い場合は、組織（教育相談部会、生徒指導部会等）で判断の上、「合計スコア」11 点以上を対象にすることも可能。
※３　担任一人で判断せず、必ず組織で判断する。

第１回試行調査を通して、アンケートに回答しなかった児童生徒が一定数いることが分かった。そこで、児童生徒の視点に立った配慮事項として、以下のことを加えた。

・アンケートに回答しなかった児童生徒については、再度アンケートを行わせないこと。
・アンケートに回答しなかった理由があるかもしれないため、注意深く観察するとともに、必要に応じて、声をかけること。

イ　第２回試行調査

【調　査】令和５年５月６日（土）、７日（日）
【面談対応】令和５年５月８日（月）～ 12 日（金）
【ねらい】・自殺リスクの高まる５月に実施し、自殺リスクや登校不安の軽減を図る。
・休日実施による実態把握、リスク分析、該当児童に対する個別面談を実施する。
【対　象】市内小学校４校（協力校）
【成果等】調査結果の概要は、以下のとおりである。

判断基準	該当児童の割合	自殺・自傷リスク
「合計スコア」上位（基準：10点以上）かつ問1⑪⑫両方について、「とてもある」と回答	1.6%	高 ↑
「合計スコア」が10点以上 ※2	6.6%	
問3に30点以下の項目有	17.0%	低
問4に「はい」と回答		

回答率は、71.1%であり、第１回試行調査と同様、回答しなかった児童はいたが、前述のとおり、再度アンケートを行わず、登校時に注意深く観察するとともに、必要に応じて、学校の教職員から声かけを行った。

また、第２回試行調査に協力した学校からは、児童の心の辛さを発見し、必要な対応を早期に開始できたことに加え、以下のような効果があったとの報告を受けた。

- 気になっていた児童はリスクが高い傾向にあり、児童のことを詳しく知る良い機会になった。
- 担任の観察だけでは気づくことができないこともアンケートで気づくことができた。
- 「面談を行うか組織（学年等）で判断」対象のリスク群には、普段、あまり話をしない児童が多くいた。
- リスクの高さに関わらず、児童理解につながる良い資料となっている。

(3) 教職員のメンタルヘルスリテラシー向上

ア 養護教諭の専門性を生かした役割の明確化

養護教諭は、心身両面から児童生徒の健康に関わることができる、学校内の「健康の専門家」として重要な役割を担っている。

そこで、まずは養護教諭に対し、本取組の目的等について説明を行った。そして、児童生徒が回答したアンケート結果を最初に把握・整理する役割を依頼した。これは、学校内でより専門性の高い者が実態把握することで、児童生徒の抱える精神不調や自殺リスクの見過ごしを防ぐことにつながると考えたからである。

教育委員会では、「心と身体の健康観察」結果の整理マニュアルを作成し、誰でも短時間で対応できるようにした。

イ 説明動画・個別面談マニュアルを踏まえた全教職員の校内研修

前述のとおり、これからの学校は、教職員のメンタルヘルスリテラシーの向上が必要不可欠である。

そこで、教育委員会では、社会的背景や本取組の目的、具体的な支援方法等をまとめた動画を作成した。また、アンケート後の個別面談では、全教職員が適切に対応できるように、個別面談マニュアルを作成した。

現在の学校は、若手教職員がとても多い。また、児童生徒や保護者対応に不安を抱えている教職員も少なくない。そこで、本マニュアルは、基本原則とTALKの原則を中心とした内容にした。

各学校では、これらの動画やマニュアル等を活用し、長期休業前にメンタルヘルスリテラシー向上につながる研修を実施した。

基本原則

- □ 「話してよかった」と児童生徒が思える対応をしましょう。
- □ 児童生徒が一人で抱え込まず、話せる機会を作ることが目的と捉えましょう。
- □ 指導はせず、共感・傾聴を行いましょう。
- □「話したくない」気持ちも尊重しましょう。「話したくない」場合は、深堀は控えましょう。

TALKの原則 －自殺の危機に気づいたときの対処法－

Tell　言葉にして心配していることを伝える　／　Listen 絶望的な気持ちを傾聴する

丁寧に話を聴き、「あなたのことを心配している」ことを伝えましょう。
叱責や、安易な励ましは控えて下さい。
- □ 落ち着いた態度で
- □ 正直に告白してくれたことをねぎらう　※例：話してくれてありがとう、よく話してくれたね
- □ 死にたいくらい辛いことがあったことに共感する　※例：死にたいくらい辛いことがあったんだね

Ask　「死にたい気持ち」について率直に尋ねる

「死にたい気持ち」について尋ね、どれくらいリスクが高いか把握します。「尋ねることで自殺を促してしまうのでは」と心配する人もいますが、「死にたい気持ち」を尋ねて自殺が促されるというエビデンスは全くありません。

【質問例】
- □ このごろ調子はどう？　□学校に来るのは楽しい？
- □ 何か辛いことがあったら相談に来てね　□よく眠れている？

上記の質問に心配な回答が返ってきた場合、さらに詳しく聞きます。
↓

※ 下記の質問を順番に聞き、Yesの場合、次の質問に進みます。
① 最近、生きていても仕方ないと思うことがある？
② 最近、死にたいと思うことがある？
③ 死ぬ計画を立てたことがある？
④ 準備しかけたことはある？
⑤ 実行しかけたことはある？
⑥ 過去に、死にたい気持ちが強かったときはなかった？
⑦ 過去に、自殺しかけたことはない？

【「心と身体の健康観察」結果の個別面談マニュアル一部抜粋】

(4) 調査実施に向けた環境整備

ア SCの配置

本市では、県費SCに加え、市費SCを配置することで、SCを毎週配置としている。本取組では、自殺・自傷リスクが最も高いと判断した場合、SCとの面談へつなげることにしている。それを可能にするために、昨年度末からSCの勤務日の調整を進めてきた。

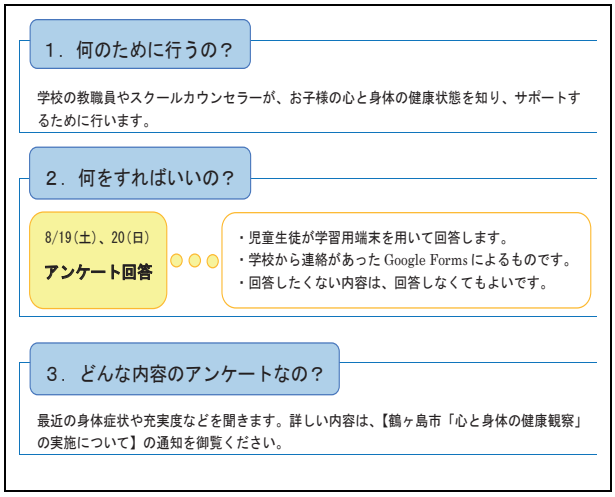
具体的には、面談対応期間である令和５年８月 21 日（月）～ 25 日（金）に勤務日を設定し、自殺・自傷リスクが最も高い児童生徒がいた際の面談対応や、リスク分析の結果を教職員と SC が共有できる体制づくりを行った。

イ　保護者のメンタルヘルスリテラシー向上

長期休業中の児童生徒は、家庭で長い時間を過ごすことから、自殺リスクや登校不安の軽減につなげるためには、保護者の理解が必要不可欠である。

そこで、教育委員会では児童生徒・保護者向けのリーフレットを作成し、本取組の概要を示すとともに、家庭で過ごす間の児童生徒の観察や話を聞くこと、必要に応じて学校へ相談することなどを依頼した。

また、学校を通した通知文だけでなく、教育委員会から直接保護者へメールを送り、長期休業中の子供への関わり方や本取組への理解を促した。



【「心と身体の健康観察」保護者リーフレット一部抜粋】

3　成果と課題

本取組により、今まで実現できていなかった長期休業中の児童生徒の心身の状況を把握することができるようになったことはとても大きな意義があった。

また、アンケートからは全ての児童生徒の様子を把握することはできていないが、一方で、「回答しなかった理由があるかもしれない。」と教職員が当該児童生徒を注意深く観察することにつながった。

各学校では、教職員が校内研修、実態把握・リスク分析・個別対応を丁寧に行ってきた。本取組を通して、教職員のメンタルヘルスリテラシーが確実に向上してきていると言えるだろう。

また、養護教諭が積極的に関わることで、より適切な支援につなげることができた。本市では、養護教諭による「いじめ対策プログラム」の授業も実施している。養護教諭の専門性を生かした生徒指導・教育相談体制を引き続き構築していきたい。

児童生徒においては、本取組が援助希求的態度の促進（相談する力）につながったと捉えている。今後も児童生徒が、困ったときに進んで援助を求めたり、自己肯定感を高め、自己を受け入れることができたりする態度や能力である「未来を生き抜く力」を育む教育や、困ったときに相談できる児童生徒と教職員との信頼関係づくり、保健室や相談室などを気軽に利用できる場とする居場所づくりなど、「安全・安心な学校環境」づくりを推進していく。

判断基準	該当児童の割合　※4	自殺・自傷リスク
「合計スコア」上位（基準：10 点以上）かつ問1⑪⑫両方について、「とてもある」と回答	0.5%	高 ↑
「合計スコア」が 10 点以上	2.9%	
問3に 30 点以下の項目有	6.9%	低
問4に「はい」と回答		

【「心と身体の健康観察」結果概要】

※４　小学４年生～中学３年生の全児童生徒に対しての割合

4　おわりに

試行調査から本調査に当たって、協力いただいた学校及び保護者に深く感謝している。児童生徒を取り巻く環境が大きく変化する中、先行き不透明な社会を生きる児童生徒に必要な力を身に付けさせるため、そして何より、命を守るため、教育委員会・学校・家庭の更なる連携・協働を目指していく。

産婦人科病院だからこそ出来る〝いのちと性の授業〟
～愛和病院の助産師が行う二つの出張授業について～

川越市の愛和病院では、助産師が主体となり「いのちの授業」「性教育授業」を小学校や高校大学にて実施している。助産師だからこそ伝えることが出来る生徒へのメッセージを通じて豊かな心と健やかな体の育成にどのように寄与出来るのか、活動の取組と成果をまとめた。

医療法人愛和会 愛和病院　広報企画課 課長　内田（うちだ）　卓也（たくや）

1　はじめに

愛和病院は今年創立50周年を迎える産婦人科を中核とした56床の病院である。現在川越市とさいたま市にて１病院、３クリニックと１産後ケア施設を運営している。

今回のテーマである「いのちの授業」及び「性教育授業」は助産師からの発案だ。昨今のいじめや子供の自殺などの暗いニュースを聞くたびに、「こんなに奇跡的に生まれて来たいのちが軽く扱われてしまうのは悲しい」、「いのちが誕生する現場で働く助産師だからこそ出来ることはないか？」と考えたことから今回の取組がスタートした。

まず取り組んだのは「いのちの授業」だ。内容は2004年に福岡県柳川市のめぐみ助産院の助産師、寺田恵子氏が考案したものを参考に、助産師の想いを加えて作成した。作成にあたっては、助産師が院内の有志で「いのちの授業チーム」を結成し、業務の合間や休暇を使い構築。その後小学生の子供がいる職員を対象に、デモ授業と意見交換を行い完成させている。

2　「いのちの授業」の目的と想い

「いのちの授業」は、小学４年生を対象とし「生まれてくること、今生きていることがいかに奇跡的で素晴らしいか知ってもらうこと」が最大の目的だ。併せて思春期におきる二次性徴への正しい理解と不安の払拭、プライベートゾーンの概念を伝えることも目的である。

授業を通じて「いのちを育んでくれた家族や周りの大人への感謝の気持ちを持ってもらうこと」や「“私は生きているだけですごいんだ”という自己肯定感の醸成」への期待、そして何より「やり直しが絶対にきかない“いのち”の大切さをしっかりと理解し、自分も他人も大切に出来る大人になってほしい」という助産師の想いが込められている。

3　「いのちの授業」の内容

上記目的を果たすために展開している授業内容を紹介していく。まず児童の緊張をほぐすため、冒頭に赤ちゃんの人形を使ったお産劇を学校の先生に御協力いただき行っている。

【図１　お産劇の様子 父親役は毎回学校の先生に依頼】

その後、お腹の中で赤ちゃんが成長する過程や初経、精通などについて説明。さらに、実際の出産シーンを収録した映像の視聴も行う（※希望制）。このような保健体育分野に相当する内容の他に、助産師が自分の言葉でいのちの誕生はなぜ奇跡なのか、いのちが誕生する瞬間の家族の想い、更に、妊娠中の子がお腹の中で亡くなった際の悲しみなどを話すことで、いのちの大切さがリアリティを持って伝わるように努めている。

授業の最後は、主に両親目線で我が子が生まれた際の喜びや想いを綴った詩を読み上げる「詩の朗読」を行っている。この詩は保護者にもぜひ聞いていただきたい内容であるため、授業を学校公開日に設定していただき、保護者御参観の上で開催することも多い。

さらに、近年の家族構成の傾向に配慮し、全体を通して過度に母親、父親にフォーカスした表現は避けるよう工夫も行っている。

4　授業開催までの道のり

本活動は2014年に院内のデモ授業からスタートした。コロナ禍で中断はあったものの、現在では毎年10～15校の御用命をいただけるようになった。このように順調に進められた理由として、川越市の理解と協力を得られ、協働で進められたことが挙げられる。

まずは当時実施していた「川越市提案型共同事業補助金」の申請を行うことで、授業の質を上げる教材が購入出来たほか、各学校への告知や日程調整も一部市に担っていただけた。さらに、校長会で直接説明する

機会を設けていただいたことで、多くの学校の理解を得ることが出来た。なお、各学校への告知は今も川越市教育委員会に担っていただいている。

また、今年度は愛和病院が創立50周年の節目を迎えることから、川越市への感謝の意を込めて、市内の全小学校で無償開催させていただいている。

今年度の全校開催については、教育長を始めとした川越市教育委員会の御協力のおかげで実現することが出来た。この場をお借りして改めて感謝申し上げたい。

5　授業実施の結果

これまで9年間で述べ64校、計6105名の児童に授業を開催してきた。おかげさまで一度開催した学校のほとんどは次年度以降も継続して開催させていただいており、強い手応えを感じている。

また、児童の感想文を読むと『みんなにあいされて、ささえられて生きられた自分が幸せだっていう気持ちがものすごくつたわりました』、『最初は（受精卵が）あんなに小さかったのが、自分の今の大きさまで育ててくれて本当にありがたいと思いました』（※共に感想文より抜粋）などの声をいただいており、微力ながら想定していた目的も果たせているのではないかと考えている。中には下図のように装飾を施した感想をわざわざ送っていただける学校もあり、非常にうれしく思うと同時に助産師のやりがいにもつながっている。

【図２　実際にいただいた児童御感想まとめ】

6　課題と展望 ～性教育授業の展開～

授業実施校が年々増加していることや、生徒や保護者からいただく授業の感想などから、小学生に対していのちの大切さを伝える取組については一定の成果を上げられていると感じている。

不安に感じているのは高校生、大学生における性知識の不足だ。現代はスマートフォンで性についての知識が簡単に手に入る一方、情報の取捨選択の難易度が増した結果、誤った知識を信じてしまうケースも少なくない。このような現状に対し、正しい性知識を伝えたいという想いで実施しているのが、もう一つの出張授業「真剣に聞いてほしい命と性の話」である。

この性教育授業でも「いのちの授業」同様、毎日出産に立ち会っている助産師だからこそ伝えられるリアルなメッセージを盛り込むことで、自分事として捉えてもらえるよう工夫している。

具体的には、多感な高校・大学生でも見やすいようデフォルメした動画を用いて、正しい避妊法であるコンドームとピルを併用したダブルブロックの紹介や、生物学的と社会学的な妊娠適齢期の違い、代表的な性病であるクラミジアの特徴や症状などの説明を行っている。特に避妊については、以前授業中にクイズ形式で確認したところ、多くの生徒が誤った知識を持っていることがわかったため、説明に力を入れている。

そして、授業の最後には、改めて命の大切さや奇跡についても考えて欲しいという想いから、「いのちの授業」後半と同様のスライドを使い、詩の朗読で結んでいる。

この性教育授業は現在、県内複数の高校や大学から徐々に依頼が増えてきているが、「いのちの授業」に比べると御用命いただく学校はまだまだ少ない。もし上記内容について課題感をお持ちの学校があれば、まずはお気軽に御相談いただきたく思う。

高校生や大学生にとって、産婦人科はまだまだ未知の世界。通院のハードルも高いと思われているため、あまり身近ではないと思う。しかし、高校生や大学生の時期にこそ知ってもらいたい知識は多々あるため、それらをどのように伝えていくことが出来るのか、非常に大きな課題だと感じている。

7　おわりに

愛和病院はこれまで妊娠、出産、子育てというフィールドで50年間医療を続けて来た。今後はそれらの経験から得られたノウハウを活用し、微力ながら地域に還元していきたいと考えている。この取組を通じて、児童生徒一人一人の豊かな心と健やかな体の育成と、産婦人科を身近に感じていただく文化形成に寄与出来ることを期待し、今後も活動を続けていきたいと思う。

学校課題研究を通した人材育成
～「運動好きで、心も体もたくましい児童の育成」を目指して～

坂戸市立三芳野小学校　校長　佐藤（さとう）　毅一郎（きいちろう）
教頭　大澤（おおさわ）　裕美（やすみ）
教諭　宮﨑（みやざき）　春菜（はるな）
教諭　吉川（よしかわ）　和也（かずや）

1　はじめに

本校は、明治６年４月に開校し、本年度 150 周年を迎えた伝統ある学校である。全校児童数は 251 名 14 学級（令和５年度）の中規模校で３世代もしくは４世代本校に通う家庭もある。周囲には、田畑が多くあり、自然豊かな地域である。

本校の学校教育目標は、【のびのびと生きる子】「みんなと仲よくする子」「よろこんで学ぶ子」「しんけんに体をきたえる子」であり、知・徳・体のバランスのとれた児童の成長を目指している。また基本理念を【自立と自尊】とし、「自分のことは、自分でできるように、あきらめずに挑戦し続ける子」「一人一人の良さを認め合い、仲間と共によりよく生きようとする子」を目指す児童像にし、教育活動を実践している。

教職員は、本校勤務年数が平均 3.2 年と短い。教職経験年数は平均約 14 年であるが、１年から 30 年以上までと、かなり幅が広い。そこで、組織として教職員一人一人の良さを生かしながら、学校の組織力と教職員の指導力の向上を目指して、学校全体で研究を進めてきた。

2　研究の全体構造

(1) 研究主題

「運動好きで、心も体もたくましい児童の育成」

(2) 研究の概要

【研究について】

運動が苦手、嫌いという児童の増加が顕著である。特に高学年では新体力テスト総合評価Ａ＋Ｂ＋Ｃの児童の割合が減り、６年生では 53.1％だった。（令和３年度の結果）

そこで、「わかった・できた」という達成感や伸びを実感させる体育の授業を展開し、体を動かす楽しさを味わわせ、運動好きな児童の育成を目指す。

【研究の仮説と手立て】

仮説①　「わかった・できた」や伸びが実感できる楽しい体育授業が展開できれば、運動好きで、心も体もたくましい児童が育成できるだろう。

手立て①・授業スタイルの確立
・学習過程の工夫
・教材・教具の工夫

仮説②　自らの生活を見直し、体を動かす楽しさを日常から味わえれば、運動好きで、心も体もたくましい児童が育成できるだろう。

手立て②・体育的活動の充実、運動の生活化
・保健・食育指導
・家庭との連携・啓発

【研究の組織】

研究推進委員会

研究を推進していく。研究の要。

メンバー：研究主任・各部の部長・校長・教頭

○健康教育部

保健指導・食育指導、家庭との連携

○環境整備部

年間を通して授業で使用する教材・教具の作成

○授業研究部

学習過程・授業スタイルの確立

指導案の検討作成

3　具体的な取組と組織の要【要となる教員】

令和４年度

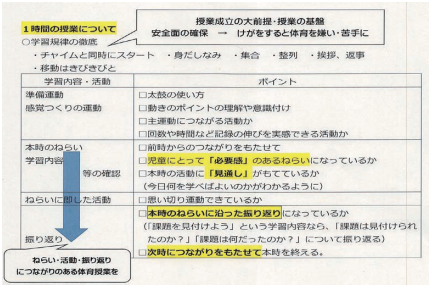
(1) 三芳野小学校の体育授業の流れの統一

【体育主任】

目的：①全ての学年、学級でも、児童が見通しをもって授業に取り組めるようにする。
②教員が自信をもって体育授業に取り組めるようにする。

方法：①年度当初に体育主任が先生役、他の教員が児童役になり模擬授業を実施。
②体育授業に係る疑問点を教員同士で話合いながら、資料をもとに授業の流れの確認。

５月 13 日の校内研究資料



【１時間の授業について】

(2) 全学級で指導者を招聘した授業研究会の実施

【研究主任と教頭】

目的：①体育授業における指導力の向上。
　　②同僚性の向上。

方法：①低・中・高学年ブロックでの研修計画にそった進捗状況の確認を丁寧に行っていく。
　　②教員同士で授業を見合い、研究協議でお互いに学び合う。

(3) 西部地区研究発表による他校の教員との交流

【授業研究部長】

「第 53 回小学校体育授業研究会（西部地区）」
令和４年 10 月 28 日実施

１年１組　バナナとりゲーム
　　（的あてゲーム・ボールゲーム）
４年１組　クールに決めよう！！
　　くるくるシャキッ！！
　　（マット運動・器械運動）
６年１組　パスをつないで、みんながシュート！
　　（ハンドボール・ボール運動・ゴール型）

【授業と研究協議の様子】

〈授業・協議の視点〉
・夢中になれる授業（主体的な学び）
・仲間と学び合える授業（対話的な学び）
・「なぜ」を考える授業（深い学び）

令和５年度

主題により迫れるよう、手立てと組織について検討・修正を行った。

手立て・児童の思いに寄り添った学習過程の工夫
　　・魅力ある教材の設定

研究の組織
　授業研究部・・・授業について
　健康教育部・・・授業以外のことについて

→全教員で研究について共有するため、年度当初に体育主任による示範授業を実施。

4　研究を進めるために

(1) 研究主任より　宮﨑　春菜

次の三つのことを意識して、研究を進めた。

【授業の様子①】

①ブロック長を中心に、様々な学年と連携することで、教員の学びたいという思いを引き出し、組織的、計画的に体育授業を進められるようにした。②課題だけでなく、児童の良い面や伸びに注目することで、教員が前向きに、研究に取り組めるように努めた。③助けを求められる雰囲気作りにより、体育を苦手とする教員と寄り添いながら授業作りを進めた。主に体育主任を中心に、単元計画の作成に力を入れたことで全体的に体育授業へ自信がついたと感じる。

(2) 体育主任より　吉川　和也

【授業の様子②】

学校全体の体育授業の充実と教職員の指導力の向上のために、三つのことに焦点を当てて研究を進めた。①「運動好きな児童生徒育成のためのリーフレット」を活用し、各学年の単元計画作成に積極的に関わった。②運動の特性や魅力を味わうことができ、子供たちが夢中になって運動する教材・教具の工夫を行った。教職員が実際に体験して、試行錯誤することで児童の実態に合った教材設定ができた。③児童の学びの雰囲気を創る温かい教師行動の充実に努めた。児童への肯定的な関わりと励ましの言葉掛け、授業のねらいに即した言葉掛けを促した。

5　成果と課題（○成果、▽課題）

○学校課題研究として組織の要となる教員を中心に、教職員全員で取り組むことができた。その中で、何度も指導者の先生に来ていただき、体育について学ぶことで学校全体の指導力が高まった。

○教職員アンケートの結果、全教員が研究を始めた当初より、体育の指導力が高まったと実感している。

○他のブロック研修にも、教員が積極的に参加し、児童の様子が共有されたことで、同僚性が高まった。

▽令和４年度は、授業を中心に取組を進めたので、令和５年度は、手立てを焦点化し、研究協議を充実させ、一人一人が活躍できる場を設定する。そして児童の伸びを児童も教員も実感できるような研究を進めていきたい。

「運動好き」な児童を増やし、「運動の日常化」に繋げる体育学習の充実
～「体育授業」と「体育的活動（運動遊び）」の視点から～

「体育授業」と「体育的活動（運動遊び）」の視点で、体育主任、研究主任、学級担任の立場から実践を重ねてきた。本校で実践した「体育授業」と「体育的活動（運動遊び）」の一例を紹介する

北本市立中丸東小学校　教諭　塩澤（しおざわ）　大（だい）

1　はじめに

「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果によると、運動・スポーツが「好き・やや好き」と感じている埼玉県の小学校５年生の割合は、令和３年度と令和４年度を比較すると、男女共に1.8%向上してきているものの、依然として全国平均よりも低い結果となっている。また､本校でも10%の児童が運動･スポーツを「やや嫌い・嫌い」と回答している。

このような調査結果や、本校児童の様子から、「体育授業」と「体育的活動（運動遊び）」の視点から､「運動好き」な児童を増やし、「運動の日常化」に繋げる体育学習の充実が必要であると考えている。

文部科学省発行の「子どもの体力向上のための取組ハンドブック，2012．３月」によれば､「生涯にわたって健康的な生活を営む上で、体力を保持増進することは重要であり、**青少年期における運動の習慣化が生涯にわたり、大きく影響する**」と述べられている。

そのため、小学生年代の間に運動の基礎を培い、運動の楽しさに触れさせ、中学生年代の様々な領域を経験し、運動・スポーツに多様な形で関わることができる段階に繋げていくことが、とても重要なのではないかと考える。よって私は、以下のような取組を実践した。

2　実践内容

(1) 運動の日常化に繋がる「体育授業」の実践

私の小学生時代を振り返ると、自分たちで運動遊びを考え工夫し、休み時間や放課後に熱中して体を動かした思い出がある。しかし、本校の児童の様子を見ていると､休み時間にいつも同じ「鬼遊び」や「ボール遊び」をしており、自分たちで遊びを新しく創造し、体を動かしている様子があまり見られない。

そのため、運動遊びを工夫すると運動が楽しくなる経験や、友達と一緒に目標を達成すると嬉しくなる経験を体育授業でも進んで取り入れていく必要があると考える。

このことを検証するため、１年生で授業を実践した。以下、授業の一例を紹介する。

「みんなで作ろう！１年１組スーパー運動遊びメーカー」（多様な動きをつくる運動遊び）

ゲームのスーパーマリオメーカーをイメージし、グループごとに基本的なコースをアレンジし、オリジナルのコースを作成する授業を実践した。コースは、ターザンコース、バランスコース、ジャンプコース、的あてコース、集団で行う的あてコース、の５つを用意し､①場の工夫（用具なし）②場の工夫（用具あり）③動きの工夫④行い方の工夫について、１時間ごとにグループで考える活動を行った。その際、第64号学校体育必携（2023，p16）を参考に魅力ある教材を設定し、**「みんなが楽しいと思えるコース」を考えること**を大切にした。みんなが楽しいと思える工夫について毎時間考え、試していく授業を行ったことで、運動遊びがさらに楽しくなる経験や、上手くいかないときには、改善するともっと楽しくなる経験をさせることができた。その結果、工夫改善することのよさを知り、日常の遊びでも、「みんなが楽しくなるようにはどうしたらよいか」話し合っている様子が見られるようになった。

さらに､学習のゴール像を明確にする「単元計画」（表１）の検討は、埼玉県運動好きな児童生徒育成推進委員会発行の「単元計画作成リーフレット，2022．３月」（図１）及び「単元計画作成授業動画，2023．３月」（図２）を活用した。

時間	1	2	3	4	5	6	7	8
学習内容	オリエンテーション	運動遊びランドに挑戦	用具なしの場の工夫 **ターザンコース**	用具ありの場の工夫 **バランスコース**	動き方の工夫 **ジャンプコース**	行い方の工夫 **的あてコース**	スーパー運動遊びランドに挑戦	

【表１　ゴール像を明確にする単元計画】

【図１　単元計画作成リーフレット】

【図２　単元計画作成授業動画と二次元コード】

【授業実践の様子】

(2) 運動の日常化に繋がる「体育的活動（運動遊び）」の実践

①運動遊びマスター

遊具や用具を用いた、様々な遊び方を身に付けることで、「多様な運動感覚」を養うことや、異学年との教え合いを通して、「できた喜び」や「できるようにした喜び」を味わわせることを目指して、運動遊びマスターを実施した。

スーパー遊具マスター、遊具マスターを目指し、異学年がペアとなり、３段階に分かれた８種目のミッションに挑戦した（表２）。レベルを分けることで、自分の挑戦してみたいと思える課題を見つけやすくし、できた喜びを味わえるようにした。

スーパー遊具マスターになった児童には、「裏ミッションカード」を配付し、更に高いレベルの運動遊びに挑戦する楽しさも味わわせた。

登り棒	雲梯（てい）	タイヤ	ケンパ＆ジャングルジム
鉄棒①	鉄棒②	竹馬	フラフープ
全種目レベル２までをクリア→遊具マスター 全種目レベル３までをクリア→スーパー遊具マスター			

【表２　運動遊びマスター　８種目のミッション】

【遊具マスターの様子】

片手ずつ、交互に雲梯ができる。
後ろ向きで、雲梯ができる。
移動しながら、登り棒を一周できる。
登り棒で、前回りと後ろ回りができる。
片足ケンケンで、10 回竹馬ができる。
一輪車で、トラックを１周できる。

【裏ミッションカードとミッションの一例】

②全校外遊び

異学年も含めた、たくさんの仲間との関わり合いを通して、運動の楽しさを存分に味わえる「全校外遊び」を運動委員会の児童と企画した。

「今日は、だるまさんがころんだをやります。鬼は、運動委員会の６年生です。」などと児童が放送し、外に出て遊べるように促した。他にも、「全校ドロけい」「全校ドッジボール」などを行った。

【全校だるまさんがころんだの様子】

3　実践の成果と課題

①成果

運動好きな児童を増やすためには、「みんなが楽しいと思える」をキーワードに、魅力ある教材の設定や単元計画作成の工夫など、こだわりを持った授業計画や実践に加え、「できた喜び」を感じられる有能さの涵養が重要だと捉えている。

１年間を通して１年生の体育授業を実践し、運動有能感調査を行った結果、低学年の有能感測定標準値より高い数値となった（表３）。これらの授業実践は、「できた喜び」を感じさせるとともに、運動が好きな児童の割合を増やすことに繋がったと考えられる。

体育的活動（運動遊び）の実践では、運動遊びマスターや全校外遊びなどを通じて、縦割り活動のよさを生かし、楽しく運動する機会を多くした。その結果、本校の運動やスポーツが「好き・やや好き」な児童の割合が毎年２％ずつ向上し、令和４年度は、94％となった（表４）。また、休み時間や放課後に外遊びをする児童も増え、その過程で遊びを工夫したり、仲間と集まったりして、運動を楽しんでいる様子が多く見られた。

	標準値	本校１年生
身体的有能さの認知	12.62	13.73
統制感	13.42	14.00
受容感	11.34	13.12
運動有能感（合計）	37.38	40.85

【表３　小学校１年生における運動有能感の比較】

（注）標準値は岡澤祥訓、木谷博記、木谷真佐美「小学校低学年用運動有能感測定尺度の作成」による

運動やスポーツは、好きですか？

	Ｒ２年度	Ｒ３年度	Ｒ４年度
好き・やや好き	90%	92%	94%
やや嫌い・嫌い	10%	8％	6%

【表４　運動への愛好的態度の変化（全校児童）】

【放課後の学校に集まり遊ぶ子供たち】

②課題

令和４年度の結果をみると、運動やスポーツが「やや嫌い・嫌い」と感じている児童が６％いた。運動好きな児童を育成するために、本実践をさらに深めると共に、学習指導のさらなる改善と充実を図っていく必要がある。

図画工作科における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な実践
～対話を通して児童一人一人が主体的に活動できる図画工作科の取組～

児童が思いを表現する達成感を味わい、他者と思いを伝え合う喜びを実感するために、児童自ら課題を見出し、対話を通して変容を目指した「個別最適な学び」の工夫と、他者と積極的に関わることで「協働的な学び」を実感できる授業改善の工夫に取り組んだ。

羽生市立三田ヶ谷小学校　教諭　五十嵐（いがらし）　はる菜（な）

1　はじめに

本校は、埼玉県羽生市に所在する自然豊かな学校である。詩人･宮澤章二の母校であり､田山花袋の著「田舎教師」の舞台でもある。そして､NHK の「らんまん」の主人公のモデルの植物学者・牧野富太郎が発見したムジナモを 40 年にわたり保護・育成し、近くの宝蔵寺沼に毎年放流している、今年度開校 150 年目の学校である。全校児童 61 名という小規模校ではあるが、教師が児童一人一人の特性を理解し、個に応じた指導を行っている。

2　テーマ設定の理由

変化の激しい社会において、課題を主体的に捉え、既習事項を活用しながら他者と協働することを通して、課題を解決する力を身に付けることは、重要である。図画工作科においては、題材から創造的に発想・構想し、児童自身の思いを表現する達成感を味わい、他者と共に自分の思いを伝え合う喜びを実感することができる授業展開の工夫が大切である。そこで、児童自ら課題を見出し、対話を通して変容を目指した「個別最適な学び」の工夫と、「個別最適な学び」を基に児童が他者と積極的に関わりながら「協働的な学び」を実感できる授業改善の工夫に取り組むことで児童一人一人が主体的に活動することのできる図画工作科の実践を行おうと考え、本テーマを設定した。

3　実践のねらいと期待する効果

私が考える図画工作科の魅力とは、児童がつくり出す喜びを味わいながら主体的に活動できるところである。主体的に活動できるとは、児童自ら課題を見つけ、他者と関わり合いながら解決し、よりよいものをつくり出すことである。よりよいものをつくり出すために児童自身が造形的な見方・考え方を働かせ、主体的に活動できるようになることを実践のねらいとしている。そのためには、教師は児童一人一人のよさを認めることが重要である。児童一人一人のよさを認めるための手立てとして、特に対話に着目した実践を行うことで、児童は主体的に活動し、図画工作科の目標である感性を育み、豊かな情操を培うことができると期待して以下の実践を行った。

4　実践内容

(1) 対話を重視する表現・鑑賞活動を通して、主体的に活動できる児童を育成する。

ア　机を円形に配置することで表現・鑑賞活動を同時に行うことのできる学習環境の整備

【机を円形に配置し表現と鑑賞を同時に行う】

表現・鑑賞活動を通して、対話を重ねることで、児童がつくり出す喜びを味わいながら、主体的に活動できるよう指導にあたった。全学年において製作途中は机を円形に配置することで、表現と鑑賞を同時に行いながら、様々な価値観をもった者同士が自由に対話できるような教室環境を整え、「個別最適な学び」から「協働的な学び」に広がるような場面設定を心掛けた。

イ　「児童と教師」「児童同士」「児童と作品」との対話を意識した授業づくりをする。

「児童と教師」の対話として、児童一人一人が主体的に活動することができるように一人一人と丁寧に対話をすることで指導を重ねた。「楽しそうな様子が伝わってくるね、この後どうなるの。」「素敵な色だね。どうしてこの色を選んだの。」などと、肯定的に捉えながら、児童の思いを引き出すことを意識した「個別最適な学び」を、対話を通して繰り返し行った。児童に寄り添った対話を心掛けることで、児童が表現したいと思っていることを、言語化し、表現化につなげることができるようにした。悩んでいる児童に対しては、技法を紹介したり、練習コーナーでやり方を確認したりしながら、その児童が何を表現したいのかを会話や仕草、表情から読み取りながら向き合うことを意識した。「児童同士」の対話として、製作途中の友達の絵を鑑賞していた児童が、「絵の具の線が生き物に見えるね。」と発言し、この発言を受けて製作者の児童は「本当だ。海の生き物に見えてきた。」と対話を重ね、

発想する姿が見られた。児童同士で学び合う際、他者の作品の色使いや構図等の良さに着目して鑑賞するよう指導すると、「私の絵の具の線はまっすぐだけど、あなたの線は動いているところがいいね。」「まっすぐな線だと窓になりそうだよ。」などとお互いの良さを認め合いながら児童同士で対話を重ね、「協働的な学び」を通して生き生きと作品づくりができていた。

ウ　他者を認め合う学級経営から対話を深める。

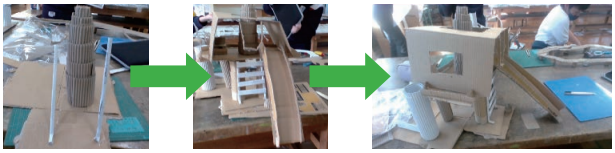
図画工作科だけでなく、日頃の学級経営や他教科の中でも他者理解をする姿を認めたり、担任が模範となって児童を認めたりする機会を大切にした。日頃から認め合い、励まし合う姿勢を意識し、安心できる環境の中で生活することで、改めて図画工作科の授業の中でも認め合い、励まし合いながら学び合う「協働的な学び」ができると考えた。友達との対話をきっかけに、クラゲやタコに見立てた絵の具の線に夢中で描き込み、つくりだす喜びを味わいながら主体的に活動する姿が見られた。そして、他者と関わり、発想を膨らませ、自分の作品と向き合い、構想を練る姿からも、児童は自身の作品とも対話を重ねて製作することができていた。児童はこれらの対話を重ねることで、主体的に表現・鑑賞活動することができたと捉えている。

【友だちの製作途中の作品を鑑賞しながら対話を重ね発想を膨らませている児童の姿】

(2) ICT の積極的な活用を通して、主体的に活動できる児童を育成する。

ア　「児童と作品」との対話に ICT を活用することで「個別最適な学び」を充実させる。

「児童と作品」との対話として、製作途中 20 分毎に 1 回、作品をタブレット端末で撮影し、撮りためるよう指示した。作品を客観的に捉え、どんな思いで製作していたのかを振り返ることで、更に作品をよりよいものに仕上げようと、「個別最適な学び」を通して、意欲的に取り組む児童の姿が見られた。



【撮りためた写真を基に発想・構想を膨らませる】

イ　対話を活性化させるために ICT を活用し、主体的に活動できる児童を育成する。

ICT を活用することで対話が活性化され、児童自身が造形的な見方・考え方を働かせ、主体的に活動できるよう指導にあたった。５年生のほり進み版画の授業では、タブレットで版木を撮影し、彫る予定の箇所をペンや指で描き込めるようにした。タブレットを活用することで彫りを疑似体験及び試行錯誤でき、ICT を通して「個別最適な学び」が深まった。児童は何度もタブレットを通して作品と対話することができた。作品との対話を通して「タブレットに描きこんでいるうちに細かい線の方が動物の毛に見えることに気付いた。三角刀がイメージにぴったりだ。」といった発言から、児童が造形的な見方・考え方を働かせる手段として、ICT の活用は有効であると実感することができた。さらに、「動物の毛は、体の中から外に向かって彫れば毛並みを表すことができる。」とタブレットで描き込みながら試行錯誤することで、作品との対話を活性化することができた。

これらの姿から、ICT を活用することで対話が活性化され、主体的に活動することができた。なお、この実践は、北埼玉地区小学校図画工作科授業研究会で公開し、参観した先生方にタブレットの新たな使い方を広めることができた。

【彫る予定の箇所をタブレットに描きこみながらイメージしている児童の姿】

【ICT を通して試行錯誤することで、三角刀でハリネズミの針を表現】

5　今後の展望

図画工作科における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現のために、対話を通して児童一人一人が主体的に活動できるよう、対話を軸として実践を行ってきた。今後は図画工作科を通して学んだことを教科横断的に関連付けて学びを深めることができるような実践を行いたい。以上、私の実践を述べたが、今後も対話を通して児童一人一人が主体的に活動することで児童が成長することができるように、児童を認めながら指導していきたい。

「ハートフル桶西水族館」の取組

埼玉県には、全国的にも珍しい普通高校内設置の水族館がある。開館以来、地域に親しまれ、さらなる進化を目指して日々活動してきたハートフル桶西水族館の教育的価値と実践を紹介する。

県立桶川西高等学校　教諭　奥村（おくむら）　崇生（たかお）

1　桶西水族館の成り立ち

ハートフル桶西水族館の歴史は古く、平成 16 年 6 月 1 日に一般公開をする水族館として開館し、令和 5 年 6 月で丸 19 年となった。

平成 15 年に、前身となる大宮光陵水族館を創設した小熊教諭の転勤とともに桶川西高校に水槽と魚が移設されて桶西水族館の準備が整った。平成 16 年に県立高校特色化事業に指定され、水族館がある普通科県立高校という特色をもったハートフル桶西水族館が誕生した。

平成 17 年には『埼玉教育』に紹介され、今回が二度目の掲載になる。開館以来、地域に親しまれてきた桶西水族館は近年、多くのメディアでも紹介され、その存在意義と地域への貢献はさらに拡大してきている。

私と桶西水族館との出逢いは平成 17 年であった。当時、教諭で館長をしていた小熊先生と同じ大学の出身であったことと、何より魚の飼育が好きな者同士で話が弾み、「僕の定年退職でこの水族館を閉じることはしたくないんだ。」という先生の言葉に、私は「では僕が後を継ぎます。」と言ったことに遡る。あれから 18 年が経ち、私は平成 27 年度から桶川西高校の教諭として勤務し、現在ハートフル桶西水族館の二代目館長として今年で 3 年目となった。昨年には社会教育士の資格を取得し、桶西水族館が生涯学習の場としてより一層機能的に役割を果たせるようにしていきたいと考えている。

2　施設紹介

本校の生物室に約 40 本の水槽を置き、約 50 種類 800 匹以上の魚類を中心とした生物を飼育・展示している。本水族館のテーマは進化であり、進化を学べる施設である。古代魚とよばれる肺魚やアミアを中心に展示しており、イモリとヤモリも展示することで魚類の上陸から両生類、爬虫類の進化を、実物を観察しながら学習することができる。さらに、在来生物と外来生物を別々の水槽で並べて展示しており、外来生物問題を学習することもできる。外来魚は農林水産省の飼育許可を得て展示しているので、生きて泳ぐ姿を見られるのは貴重である（図 1）。

【図 1　在来魚・外来魚の展示】

中には 20 年以上飼育している個体や継代をしている種類もある。他にも本水族館で誕生し、飼育していた珍しいピラニアのアルビノ個体と、今では入手不可能と言われるオーストラリアハイギョ（ネオケラトドゥス）の剥製も展示している（図 2）。

【図 2　オーストラリアハイギョの剥製】

また、展示室を付属し、そこでは科学部員が作製した作品や来館者が楽しめるコンテンツがある。特に当館オリジナルで、ゲーム感覚で遊びながら在来・外来生物が学べるマグネット釣りゲームは小学生以下の子供たちに大人気である（図 6）。他にも段ボールから切り出した 88 枚の三角形を使って組み立てたジオデシック型のプラネタリウムは中に入って四季折々の星空を眺めることができ、当水族館の名物の一つとなっている。さらにフロアには化石やジオラマを展示し、進化についての知識を深めることができる。

開館から 18 年間の来館者延べ人数は 3 万 7 千人を超え、年間平均の来館者数は 2000 人以上、利用団体数は延べ 20 団体以上である。令和 5 年の夏季休業期間中は来館者のない日は 3 日のみ、利用団体数は過去最高の 12 団体であった。

このように桶西水族館の生物たちは校内の高校生に向けた教材として存在し、水族館は地域の名物の一つとして紹介される施設となっている。

3　地域交流を中心とした活動

(1) 生物の飼育・管理

本水族館は科学部が管理・運営し、部員は日々、水温検査、機器点検、水換えや底砂利掃除を行い、水槽の状態を保つことで生物の健康を維持している。平日の放課後は来館者を迎え入れているため、常に水槽の掃除と飼育生物の状態管理には気を遣っている。歴代の科学部員の不断の努力が桶西水族館の生物たちの命を繋いできたと言える。水族館で亡くなった生物は校内につくった慰霊碑の前で、手厚く埋葬する。

(2) 一般来館者の対応

本水族館の特徴の一つは科学部員の高校生が来館者にガイドをすることである。丁寧に説明して案内するスタイルは開館当初から受け継がれてきた。「人の喜びが自らの喜び」というボランティア精神で子供やお年寄り、障害がある方というような様々な来館者に対して適切に応対する力とコミュニケーション力を向上させ、感謝される喜びから豊かな人間性を育んでいる（図３）。

【図３ 利用団体からの感謝の作品】【図４ 生徒のオリジナル紙芝居の上演】

水族館は子供が利用することが多いため、科学部員は折り紙を教えるスキルも身に付けている。また、科学部員が制作したプラネタリウムを案内したり、環境問題を学んで遊べるスゴロクを一緒に楽しんだりする。

(3) 桶西水族館が拠点となった地域交流

桶西水族館は、地元小学校２年生の生活科の「町探検」で利用されている。また、地元公民館が主催する市内小学生対象の夏休み講座の一つとして活用されている。今までに、水族館で学ぶ進化、ミニ水槽の製作、天文講座、化石のレプリカ作成、在来種・外来種問題などのテーマで講座を行った。さらに、地元の桶川出身の偉人でお茶のカテキンを発見した日本初の女性農学博士である辻村みちよを題材として制作したオリジナルの紙芝居を、市内の園児・小学生などに向けて上演している（図４）。

地元公民館への出張水槽メンテナンスも行っている。専門知識を持つ科学部員が公民館で飼育・展示している魚の飼育・管理を手伝い、公民館を訪れる地域の人たちへの癒しの提供に寄与している。

(4) 地域イベントへの参加

水族館内での活動にとどまらず、地域で開催される各種イベントに積極的に参加している。桶川市のほか、隣接する市町で行われるイベントに「出前水族館と折り紙教室」として参加している（図５）。その他、保育所や小学校の文化祭、老人ホームなどの依頼にも応えてきた。近年は釣りゲーム（図６）や生きているカメに実際に触れられるタッチ水槽が特に人気である。

【図５　折り紙教室】

【図６　釣りゲーム】

(5) 環境保全活動

開館以来、荒川にサケを放す会の活動に参加してきた（図７）。毎年 12 月にサケの受精卵を孵化させ、２月に荒川に一斉に放流する。受精卵は地元の小学校や幼稚園等にも配り、孵化から稚魚になるまでを子供たちと共に見守った。しかし近年、気候変動による高海水温化によって、サケが荒川に遡上しなくなってきている。このような環境問題についても発信し、令和５年２月にはこの活動が新聞で紹介された。また、国土交通省の自然再生事業である荒川太郎右衛門地区の生態系を守る生態系保護協会の活動に参加し、外来生物問題を発信する拠点として機能している（図８）。この活動については令和５年６月に新聞で紹介された。

【図７　サケの放流】

【図８　出前水族館】

4　今後の展望

様々な方々の理解と支援のおかげで続けることができたこのような活動が評価され、「令和４年度彩の国埼玉環境大賞」で優秀賞を受賞した。また、「ボランティアスピリット賞」を 17 年連続受賞し、過去には平成 24 年度に「第７回 SYD ボランティア奨励賞」で文部科学大臣賞も受賞した。新聞各紙やテレビでも紹介され、「桶川西高校といえば水族館」として多くの方々に知っていただくことが増えてきた。来年は開館 20 周年となる。本校の生徒や卒業生にも誇らしく思ってもらえるような存在として、また地域に歓迎される公共施設としてハートフル桶西水族館は進化を続ける。

義務教育学校　武蔵台小中学校開校までの１年間の軌跡
～感謝、そして未来へ　未来への扉を開く１年の取組～

本校は県内２番目の義務教育学校として、本年４月に開校した。令和４年度の１年間、開校に向け保護者や地域、そして子どもたちと教職員が一体となって取り組んだ実践を紹介していきたい。

日高市立武蔵台小中学校　校長　秋馬（あきうま）　信之（のぶゆき）

１　はじめに

令和５年４月、昭和 55 年に開校した武蔵台小学校と、平成元年度に開校した武蔵台中学校が統合され、義務教育学校 日高市立武蔵台小中学校が開校した。

義務教育学校とは、一人の校長の下、一つの教職員組織がおかれ、義務教育９年間の学校教育目標を設定し、９年間の系統性を確保した教育課程を編成・実施する学校のことである。

現在の県費負担教職員数は、５月１日現在、前期課程（小学校）16 名、後期課程（中学校）14 名である。また、児童生徒数は前期課程（小学校）199 名、後期課程（中学校）113 名、合計 312 名である。

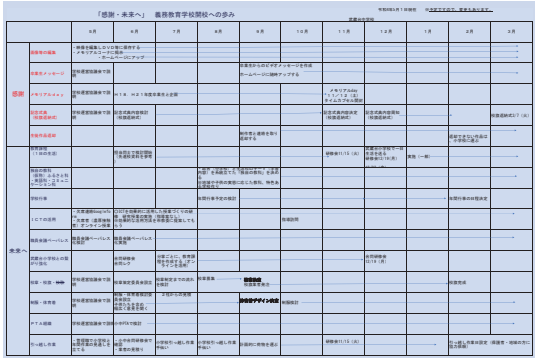
本市は令和２年度からコミュニティ・スクールを基盤とした小中一貫教育を推進し、本校は施設一体型の義務教育学校として令和５年度の開校を目指して準備を進めてきた。令和４年度における、保護者や地域、子供たちと教職員が一体となって取り組んだ開校準備の様子を紹介したい。

２　コンセプト「感謝・そして未来へ」の共有

令和４年４月、武蔵台小中学校は、武蔵台小学校の特別教室や下駄箱等の校舎を一部改修し、中学生が小学校の校舎に入る形で開校することが既に決まっていた。つまり、このことは中学校の校舎が廃校となることを示しており、そこに通う子供たち、教職員、保護者・地域の方にとっては、この上なく寂しいことである。そこで、子供たちも含め、関係各位が未来志向で新たな学校づくりに意欲的に取り組むためには、ビジョンを共有する必要があると考え、開校に向けてのコンセプトを「感謝・そして未来へ」と設定した。

３　開校に向けての行程

新型コロナウイルス感染症の影響により、児童生徒の交流はもちろんのこと、開校に向けて教職員同士の交流や話合い、保護者・地域との具体的なビジョンの共有が十分にされていない状況が垣間見られた。そこで、「いつまでに」「何を行うか」を明確にするために行程表を示した。また、学校運営協議会を中心として各実行委員会を組織し、開校に向けての取組をスタートさせた。



【開校に向けて：行程表】

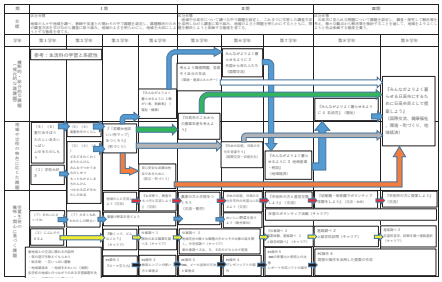
４　開校に向けての取組

(1) 校務会の実施

開校に向け月に２回程度開催した校務会は非常に有意義で、開催回数は 20 回を超えた。校務会のメンバーは小中それぞれの管理職と教務主任の合計６名である。話し合った内容は、①日課表などの教育課程②校章・校旗の作成③校旗返納式など、延べ 43 項目で多岐にわたった。校務会で方向性を出し、職員会議や校内研修で教職員に説明し共通理解を図った。

(2) 小中一貫カリキュラムの作成

本校は目指す子ども像を共有し、９年間を通じたカリキュラムに基づき、系統的な教育を行う義務教育学校である。つまり、カリキュラム編成こそが、小中一貫を進めていく上での肝となる。本校では、令和元年度に日高市小中一貫教育課程推進委員会が作成した「日高市小中一貫教育各教科等カリキュラム試案」を基に、本校独自のカリキュラム「武蔵台ふるさと科」を作成した。



【武蔵台ふるさと科：内容系統配列一覧表】

(3) 日課表の作成

本校は施設一体型の義務教育学校なので、日課表が重要となる。武蔵台小学校と武蔵台中学校の今まで培ってきた教育活動のよさを生かしながら、何度も話し合いを重ね、日課表が完成した。本校の特色は、朝の読書、業間休み、昼清掃である。

武蔵台小中学校日課表案

	1～4年生	5・6年生	7～9年生		
登校	8:00～ 8:10				
全校での朝会・朝の活動	8:25～ 8:40		8:15～ 8:20	無責打ち会わせ	
			8:25～ 8:30	朝読書	
朝の会	8:35～ 8:50	8:25～ 8:35	8:30～ 8:35	朝の会	
第１校時	8:55～ 9:40	8:45～ 9:30	8:45～ 9:35	第１校時	
第２校時	9:50～10:35	9:45～10:30	9:45～10:35	第２校時	
20分 業間休み	10:35～10:55			業間休み	20分
第３校時	10:55～11:40	10:55～11:40	10:55～11:45	第３校時	
第４校時	11:50～12:35	11:55～12:40	11:55～12:45	第４校時	
45分 給食	12:35～13:20	12:40～13:20	12:45～13:20	給食	35分（5・6年40分）
15分 清掃	13:25～13:40			清掃	15分
15分 昼休み	13:40～13:55			昼休み	15分
第５校時	13:55～14:40	13:55～14:40	13:55～14:45	第５校時	
第６校時	14:50～15:35	14:55～15:40	14:55～15:45	第６校時	

第５・６校時終了後　５分で帰りのしたく
15分間で帰りの会　さらに15分後　完全下校または部活動

【5・6年生の部活動について】
5・6年生の部活動は最長5:00まで
一斉下校の日は、部活動に参加しない。
5・6年生の活動期間は4～9月及び3月
10～2月は部活動オフ期間とする。

昇降口は前期課程の登校に合わせて開ける。
出欠確認は
全学年8:25

平日総下校時刻	
期間	下校時刻
4月～	6:00
9月16日～	5:45
新入帰～	5:15
11/1～11/15	4:45
11月16日～	4:30
1月～	4:45
1/16～2/10	5:00
2月11日～	5:30
3月～	5:45

5・6年生は、授業終了後5分間はその教室等から出ない。
（給食前を除く）

【日課の特徴】
①業間休み、昼休み、清掃の時間を統一している。1～4年生が外遊びのために外に行くときなどに5～9年生に迷惑をかけない。縦割りで清掃活動に取り組むこともできる。
②小学校のクラブ・委員会を水曜日に移動し、中学校と統一する。
③全校朝会の時間は、8:25 ～ 8:40 とするが、前期課程のみで行う朝会等は 8:20 ～ 8:40 に行う。

【日課表】

(4) 校章・校旗の制定

学校のシンボルである校章については、武蔵台小・中学校の児童生徒、保護者・地域から多数応募していただき、選定委員会で武蔵台中学校３年生の作品が選ばれた。著作者は、武蔵台の頭文字「m」の下、小学校と中学校が一つに結ばれ、それぞれが協力し、素晴らしい学校を創っていくことを表現した。

校旗については、校旗の専門業者に発注し、立派な校旗が完成した。

【校章】

【校旗】

(5) 体育着の選定

選定委員会（実行委員会）において協議検討を重ね、機能性や速乾性を重視し、保護者、児童生徒の投票を基に新たな体育着を選定した。

【体育着】

(6) 中学生が小学校で１日生活体験

義務教育学校開校に向け、「中学生が小学校の校舎で生活するイメージをもつこと」を目的に中学１、２年生が１日小学校の校舎で生活をした。服装は「私服可」としたが、多くの子はジャージで登校し、私服の生徒はごく少数であった。

【中学生の小学校生活体験】

(7) 音楽イベントの開催

学校の統合に伴い武蔵台中学校の校舎が使われなくなることを受けて、自治会主催の音楽イベント「台中ありがとうフェスティバル～地域のみんなで一緒に～」を武蔵台中学校体育館で実施した。出演団体は本校吹奏楽部、地域の囃子連、おやじバンドで、本校吹奏楽部とおやじバンドとの合同セッションを行った。

【台中ありがとうフェスティバル】

(8) 校旗返納式

武蔵台中学校体育館において、校旗返納式を開催した。日高市長に小学校と中学校の校旗をそれぞれ返納し、児童生徒の愛唱歌である「ずっとおなじ」を合唱し、武蔵台小学校 42 年間、武蔵台中学校 34 年間の歴史に幕を閉じた。

【校旗返納式】

5　開校　未来へ時を刻む

令和５年４月 10 日、義務教育学校である日高市立武蔵台小中学校が開校した。開校式並びに入学式は、７年生が１年生の手を引いて体育館に入場し、大変温かい雰囲気の中、式が執り行われた。なお、他学年は各学級においてオンラインで参加した。

本校の特色ある教育活動は、①異年齢交流活動の推進、②地域の教育力を生かした教育活動の推進、③前期課程における一部教科担任制の実施である。

現在、子供たちは、業間休みは校庭で一緒になって遊び、５、６年生の一部は部活動に参加し、また後期課程（中学生）と一緒に委員会活動も行っている。そして、10 月７日の運動会（体育祭）に向け、赤団と青団に分かれ、９年生の団長を中心に一生懸命練習に励んでいた。後期課程（中学生）のお兄さんお姉さんが前期課程（小学生）の児童と一緒に活動している姿は、微笑ましい限りである。

日高市立武蔵台小中学校ホームページ
http://www.hidaka.ed.jp/msd-gimu

加須市保・幼・小中一貫教育事業「中学校区リンクミーティング」の取組
～加須幼稚園から加須小学校への円滑な接続を期して～

加須市立加須幼稚園　園長　加須市立加須小学校　校長　増田（ますだ）　正夫（まさお）

1　はじめに

本校は全校児童 398 人、17 学級（12 通常学級＋５特別支援学級）からなり、市街地と商用地を学区とする中規模校である。昨年度 150 周年を迎えるなど歴史と伝統があり、家庭・地域との密着型教育を推進している。また、市立加須幼稚園と隣接しており校長が園長を兼務していることから、日頃から幼小の交流等に意図的・計画的に取り組んでいる。

今年度の１年生はのべ 20 の公・私立幼稚園や保育所（園）から入学している。そのこともあり、年度当初の学級経営や生徒指導では、多様な児童の実態に対応していく上での課題もみられた。

さて、加須市では保幼・小・中一貫教育事業に力を入れており、市内８つの中学校区でリンクミーティングを設置し、校(園)種間の円滑な接続を期して人(幼児・児童・生徒や教職員）のみならず教育活動の交流に力を入れている。

ここでは、リンクミーティングの取組の中から本校と加須幼稚園との交流に焦点化して、その成果と課題について述べる。

2　加須幼稚園の取組

加須幼稚園は、年少学級８名、年中学級 13 名、年長学級 26 名、合計 47 名３学級である。昨年度創立 100 周年を迎え、公立幼稚園では県内で最も古い歴史をもつ。恵まれた環境を生かし、子供たちは日々元気に生活している。２階の余裕保育室は「創立 100 周年資料展」の他に、子供たちが遊んできたものを展示し、学びの過程を見られるようにした「遊び展」の部屋として全室活用している。教育目標は「あかるい子・おもいやりのある子・がんばる子」で、笑顔があふれ一人一人が輝く楽しい幼稚園づくりを目指している。また、「夢中になって遊び込む幼児の育成」を研修主題に位置付けて取り組んでいる。教育方針としては、県教委が掲げる子育ての目安「３つのめばえ」と幼稚園教育要領を踏まえ、年間指導計画や月案、週案、日案を作成して通常の教育活動を展開している。特に遊びを通して学びの自立・生活の自立・精神の自立につながる経験を大事にしている。年長学級に対しては「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」を目指している。

【100 周年記念式典】

3　本校のスタートカリキュラム

小学校教育では、ゼロからのスタートではなく幼児期における学びを生かしたカリキュラム編成が求められる。小学校での基本的な学習環境を学んだり、子供同士でコミュニケーションを図ったりすることで、子供たちは学校への安心感だけでなく、喜びや楽しさも感じられるのではないだろうか。子供の学校への安心感は、学校環境への適応だけでなく小１プロブレムの予防にもつながるはずである。そこで、１年生のスタートカリキュラムについて、主に学級活動や生活科を中心とした実践例を述べる。

- ４月の登校は通学班、下校は保護者送迎当番をお願いし安心・安全な登下校ができるようにした。
- ５月の連休明けまでは、給食、掃除活動で６年生が援助した。また、給食の配膳は地域のボランティアの方にも協力をいただいた。
- 一人一台学習者用端末の操作については、６年生にマンツーマンで補助してもらった。
- 小学校生活に慣れることを中心に、体操着の着替え方、学習の仕方、椅子の座り方、机上の使い方、校庭での遊び方、掃除の仕方等丁寧に指導した。
- 市費介助員を当面は各クラスに配置し必要に応じて個別対応した。
- 生活の約束事については、丁寧に繰り返し指導した。

4　幼児と児童の交流

・令和５年度幼小交流計画（予定含む）

回	実　施　日	内　　容
1	５月 19 日（金）	自己紹介・グループ作り
2	５月 30 日（火）	サツマイモ苗植え
3	10 月 26 日（木）	学校探検
4	11 月２日（木）	サツマイモ掘り
5	11 月上旬	リース作り
6	11 月中旬	交流遊び
7	Ｒ６・１月下旬	交流遊び、１年生体験授業

※活動場所は主に加須小学校の校庭や学校ファーム

【サツマイモの苗植え】

【サツマイモの収穫　Ｒ４】

【学校探検　Ｒ４】

【交流遊び　Ｒ４】

主に５年生と年長児の交流である。このことで、新年度の１・６年生の交流が円滑に展開できる。双方にとって教育効果が高く WIN-WIN の活動といえる。

5　教職員等の連携

・令和５年度幼保小教職員交流計画（予定含む）

回	実　施　日	内　　容
1	４月３日（月）	合同着任式
2	５月 22 日（月）	心肺蘇生法講習会
3	６月６日（火）	引き渡し訓練
4	11 月 28 日（火）	持久走大会
5	12 月中旬	餅つき大会
6	２月６日（火）	入学説明会
7	３月末日	辞令交付式・送別会

幼稚園の教師が、１年生の授業や音楽等技能教科の授業の様子を視察する。逆に小学校の教師が幼稚園の公開保育の様子を視察する。双方にとって指導援助の在り方、教材の作り方や使い方、掲示物等理解し合い、その後の自身の教育活動に生かしている姿がみられた。双方に幼児児童を託している保護者にとっては、連携の様子を実感し安心感に繋がっているようである。

6　成果と課題（○成果、●課題）

○「小１プロブレム」の解消には、幼児から児童への段階的かつ円滑な接続が必要である。加須幼稚園との交流等を通してその解消に繋がっている。

○幼稚園では夢中で遊び込む教育を心がけている。その遊びが小学校での豊かな学びに繋がっている。また、子供の自己肯定感や自分で考えて行動する力、他者とのコミュニケーション能力の向上が図られている。

●５歳児から小学校１年生までの２年間は幼保小の架け橋時期である。目指す子供像を明確にして共有し、更なる円滑な接続を意図した教育課程の編成、実施、評価、改善が必要である。

●障害のある児童や家庭の教育力に課題のある児童もいる。そのような児童に対する個別最適な学びを保障していく体制を整備する必要がある。

7　おわりに

前述の交流以外にも、年長児が小学校で音楽の授業を体験したり、校庭の遊具で遊んだりして馴染みながら入学を迎える。ただし、前述したように本校には 20 の公・私立幼稚園や保育園（所）から児童が入学してくる。小学校１年生が学習指導要領に基づいた教科教育を実施する前提として、幼稚園教育要領や保育指針で、円滑な橋渡しとなる教（保）育を受けてはいても、子供の実態等で差異が生じており一律という訳にはいかない現状がある。

少子高齢化、認定こども園の増加、幼保小の連携強化等、社会の情勢が変化する中、次代を担う子供たちに校（園）種の垣根を越えて、学習指導要領における三本柱の資質能力を育み、生きる力を身に付けさせなければならないと自覚し、今後の経営を充実させたい。

教材で教える～工業高校で活(い)きるコラボ授業～

触れてきた言葉の量が、そのまま知識になる国語。その特性を生かし、たくさんの分野と結びつけて「考えるから知ることができる」「知っているから面白い」経験を増やす授業に挑戦した。

県立大宮工業高等学校　教諭　西(にし)　哲未(さとみ)

1　はじめに～普通科教員の視点で見た工業高校～

工業高校に勤務する普通科の教員が一様に感じることは単位数の少なさではないだろうか。国語の場合、語彙力・表現力・読解力など、身に付けさせたい力は多岐にわたる。本校でいえば３年間でわずか７単位の授業数で「実社会・実生活に生きて働く国語の能力」を養うには相当の工夫が必要である。

2　目標～文章で「学び」をつなぐ～

これは個人的な体験になるが、臨時的任用教員として教壇に立った１年目、教科主任の先生は年間を通してずっと、私の授業を観察してくださった。説明する際の言葉の使い方、発問のタイミング、発言の拾い方……その先生が、いかに細部まで心を配り授業を行っているかを学ばせてくださる指導だった。

ある時、授業の振り返りにこんなことを言われた。「今日、生徒の顔が上がったでしょ、あの光景をきちんと覚えておきなさい。」教科書に書いてあることを説明しても生徒の顔は上がらない、興味を持てば子供たちは自然と前を向くし耳を傾ける、と。講義形式の授業をしない、と日々指摘されていた私にとって、この出来事はその理由が分かった瞬間でもあった。

国語で扱う教材は、知識があるほど読み取りも深くなる。歴史・風習・時事……文章中の単語を拾い必死に様々な話題を織り交ぜていく中で、授業者としての面白みを感じるようになった。以来、文章で各科の学習（点）をひとつの知識（線）にできないかと考え続け、生徒に「知っている面白さ」を体験してほしいと、工業高校への着任を機にコラボ授業を思い立った。

3　実践～「何ができるようになるか」への試み～

コラボ授業のポイントは軸になる教材があることだ。評論・小説・詩歌・古典、何をとっても話題が豊富な国語は、十分、軸になり得る。

工業高校で学ぶ生徒に国語の授業を展開するにあたり、私が意識しているのは次の三つである。

①社会とのつながりを知ること
②人が持つ感性に気づかせること
③つくり手としての職業観を養うこと

体験が主である工業高校は学びの実感を得やすい。昨年度、担当する１学年機械科・電気科において以下の実践を行った。なお、本校では教科書に第一学習社「標準現代の国語」を選定していることを先に述べておく。

(1) 国語×英語

山崎正和著「水の東西」は、文化比較を題材にした二項対立の分かりやすい評論である。新しい環境に慣れる１学期、教材を読むにあたり、まず「比較する時に大切なこと」を考えた。生徒たちの答えは「相手のことを否定しない」であった。読解のまとめ、筆者が主張する「見えないものを感じる日本人の感性」について日本語と英語の語順、表現方法の違いに着目し、英語科の教員とT･Tの形式で授業を進めた。

最後まで聞く日本語と先に主張する英語。謝罪・依頼・感謝を「すみません」で表す日本語と場面ごとにはっきりと伝える英語。二つの視点から言語を考えた生徒たちからは「英語が難しい理由が分かった」「察する力が日本文化の良さだと思う」という感想があった。

(2) 国語×社会（公共）

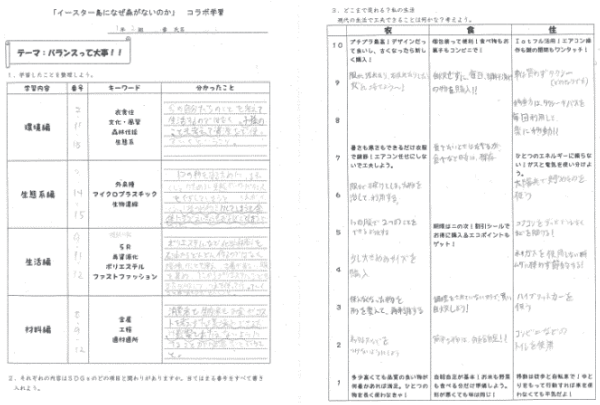
「貨幣の本質は運動を継続させることにある。仕事の本質は他者を目指す運動性のうちにある。」とする「人はなぜ仕事をするのか（内田樹著）」を３学期に学習した。経験値の少ない生徒たちに貨幣と仕事を想像させることは難しい。同じ時期に経済を学習する公共で、与えられた条件に従って自分と他人のカードを交換する「『財カード』ゲーム」をすることが分かったのでこれを事前学習に位置付け、国語では「３人の長所や特技を生かして会社をつくる」活動を行った。

どちらも他者がいなければ成立せず、特に会社をつくるときにはその目的として「誰のために」が含まれる。キャリア教育の要素も盛り込んだ２時間続きの授業では「見えないところで妥協してくれている人がいるから自分の欲しい『財』が手に入ることを知った」「単に働くだけでなく、相手のことや周りのことも考えながらするものだと思った」「働くことはお金を稼ぐ以外にも目的があることが分かった」など、読解前に要旨に関連する気付きを得た生徒もいた。

(3) 国語×家庭×理科×工業（機械・電気）

学校生活で生徒たちに接していると、SNS で気に入らない人をブロックする、負けたゲームをリセットして最初から始めるなど「０か 100 か」で物事を捉える場面が非常に多いことが気になる。こうしたことは機械の中だから簡単にできてしまうが、現実の社会で“嫌だからゼロにする”ことは不可能だ。「物事の折り合いをつける」ことを学ぶ機会にしたいと考え、一昨年度は別の切り口で実践したコラボ授業を「バランスって大事！」を共通テーマとして改良した。

継続して扱ったのは、鷲谷いづみ著「イースター島になぜ森がないのか」。ヒトと生態系の関係史から持続可能性を考えさせる教材である。２学期の実践に合わせ、夏季休業中に各科教員の協力を仰いだ。文章を読んだ上で重なりを洗い出し、家庭科は学習内容の掘り下げとして、理科は単元の導入として、機械科は１学期の復習として、電気科はエネルギー問題を考える場として展開することを決め、ワークシートの構成や本文とのつなげ方など意見交換を繰り返した。



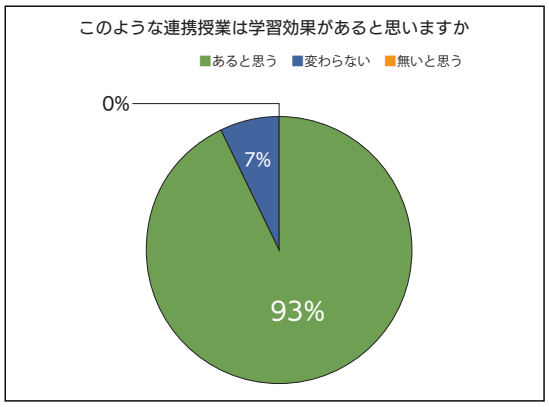
【資料①：活動まとめワークシート】

共通点を持つ同時期の学びは「教材で教える」ことを可能にする。４種類の学習を SDGs と絡めて表（上図左）にまとめた後、「どこまで戻れる？私の生活」と題して衣食住に関する身の回りの“便利”をランキング形式で書き出し、それが本当に必要なものか考えるグループ活動を行った。

4　振り返り～生徒たちの声～

学習後、生徒たちからは次のような感想が挙げられた。

- 他の科目をつなぐことで新しい発見ができた
- 広い範囲で考えることができて、周りのことも考えられて楽しかった
- それぞれの分野で知識がつき、苦手な分野でもやる気を持って取り組めた
- 自分なりに考えることが増え、積極的に取り組めた
- 国語だけじゃない関連性を多く知ることができ、脳が素早く動くようになると思った
- 金属や植物、そして生物は離れているように見えてすべて密接な関係にあることが分かって興味がわいた
- 一つの授業だけではわからない部分が他の教科で知れるし知識が増えて楽しかった



【資料②：生徒振り返りアンケートより】

5　まとめ～「生きて働く知識」の手応え～

彼らが進級した今年度、１学期の授業で小関智弘著「豊かな仕事言葉」（三省堂）を扱った。旋盤工だった筆者が、ものづくりの現場に生きる言葉を紹介し日本に根付いた細やかな感性の奥深さを伝えつつ機械化が進む現代に一石を投じるこの文章には、最後にこのような一節がある。「豊かな言葉を失うことで、手のひらから大事なものが逃げてゆくのではないか」。

これについて作業の実感が得られなくなっている道具を挙げる活動をした際、生徒たちからは「洗濯板→洗濯機」「ガス→ IH」「手紙→メール」など、昨年度の活動を思い出したともとれる意見が上がった。効率化を進歩と捉えることへの筆者の憂いと生徒たちの気付きが重なったと感じた。また、機械科の生徒の中には「手書き製図→ CAD」と答える者もいた。ヒトの関わりの深い金属を扱う機械科の学習はものづくりの基幹と言える。汎用機と最新の工作機械を併用させた実習を体験しているからこその気付きだと思う。

国語科の教員の理解もあり、私は数年、連続して機械科の授業を中心に担当させてもらっている。学科の数だけ学校があると言われる工業高校はそれぞれに特性があり興味深い。普通科の教員が歩み寄り継続的に一つの学科を見ることで広がる連携は必ずある。何より「知識あっての技術」である。単位数は少ないが、普通科の学習が不要ということは決してない。

ちなみに、二つの学科を合同にしたグループ活動で彼らが出した「大事なもの」の答えは「何を使って作っても、材料の特徴を考え使う人のことを思うこと」であった。私の三つの柱を、生徒が形にしてくれた。

高等部におけるデュアルシステムの導入と生徒の新たな主体性の芽生え
～「健やかな成長と幸福を目指す地域と共にある学校」の学校教育目標をテーマに～

卒業後、長く働き続けられる生徒の育成を目指すため、高等部における進路指導の在り方を見つめ直し、デュアルシステムを導入した本校の事例を紹介する。

県立行田特別支援学校　教諭　天野（あまの）　真樹（まさき）

1　はじめに

本校は昭和53年４月に県北部地域最初の県立知的障害養護学校として開校し、本年度で創立46年目を迎えている。通学区域は、行田市、羽生市、熊谷市の一部、鴻巣市の一部である。学校教育目標は「健やかな成長と幸福を目指す地域と共にある学校」であり、令和６年度より開始されるコミュニティ・スクールの準備を学校全体で進めている。私は進路指導担当の立場からコミュニティ・スクールの一端を担う「デュアルシステム」の構想から実践までについて紹介する。

2　デュアルシステムとは

デュアルシステムは、企業等の「学校外の社会の場で行う実習就労体験」と、「学校の中での学習」を組み合わせた教育システムである。「働きながら学ぶ、学びながら働く」ことができる点が大きな特徴であり、埼玉県内のいくつかの特別支援学校では、このデュアルシステムが既に実施されており、生徒の学びをより深める「教員も生徒と一緒に働きながら指導・支援を行う」ことが特徴である。

3　高等部の進路指導とデュアルシステムのねらい

本校では高等部１年生より産業現場等における実習（以下、現場実習）を行い、１年生は１回まで、２年生では２回まで、３年生では進路先が決まるまで行っている。現場実習は就職活動（出口指導）の一環と、社会人に向けた学習（社会を知る、積み重ねた学習成果の確認）の一環という二つの側面がある。これまで行ってきた現場実習では、「働く上での課題」や「自分の将来」等について生徒なりの発見や自覚が、日頃の学習に対する姿勢や意欲の改善につながり、より深い気づきに結びつくと考えてきた。しかし、生徒の出口指導をするにあたり、「自分はどんな仕事が好きなのか、どんな仕事ができそうなのか分からない」と口にする者が多く、数日間だけの断片的な現場実習だけでは「進路を主体的に選択・決定する力」が育ちにくいと感じていた。学習成果としても、障害特性上、不慣れな環境下では本人の力が発揮しにくいということもある。また、進路決定にあたっては、時に、本人の意思やニーズが尊重されず、保護者の思いに重きが置かれることもあった。私が大切にしたいことは、訓練的な進路指導ではなく、生徒本人が自分から学び、自分で課題を解決し、進路を主体的に自己選択・自己決定できるようになるためのキャリア教育を日常的に実践していくことである。デュアルシステムを実施することにより、現場実習だけでは獲得しにくい職場でのコミュニケーション方法や将来をイメージするための職業観や勤労観を身に付けさせたい。また、一緒に働く教員の言葉かけ（「今は○○だから○○しよう」「これは○○するとうまくいくかも」）等をヒントに考え、実践し、身に付けることができればと考えている。そこで「支援を受けながら自分で気付き、自分で課題を解決し、進路を主体的に選択・決定できる」ことを大きなねらいに設定した。

4　デュアルシステムの導入に向けた取組

(1) 教育課程の整理

教育課程上の位置付けとしては、現場実習と同様「作業学習」に位置付けることが適当と考えたが、「週２日実施していた作業学習も大切にしたい」という教職員の考えもあり、作業学習を週３日に増やし、うち１日（午前中のみ）をデュアルシステムの時間として実施することにした。

(2) 実施対象生徒の決定

本校高等部の教育課程は、２年生から一般学級が二つのコースに分かれ「発展型」という、授業内容がより高次なものになるコースが増える。この発展型の授業は、個別指導ではなく「集団の学習グループ」の中で、自分で考えて表現や表出をしたり、企業が求めるビジネスマナーを学んだりする授業内容となっており、前述した本校のデュアルシステムのねらいである「自分で気付き、自分で課題を解決する」と相応することから、本校は「発展型」の教育課程の生徒をデュアルシステム実施対象生徒として設定をした。

(3) 引率教員の捻出

デュアルシステム初年度は試行年度として、受け入れ先をまず１か所開拓して実施する計画を立てた。引率教員数に関しては、受け入れ先企業の許容人数や教員の指導・支援が行き届く範囲などを考慮し、生徒４～５名に対し教員は１名とした。具体的な引率教員として、校長の校内人事配置により、もともと担任であった進路指導副主事を担任外とし、組織を再構築した。

(4) デュアルシステム受け入れ先の開拓

開拓にあたり、「本校から比較的近距離である」・「障害者雇用の実績がある」という理由から、「カインズ行田店」様に受け入れ依頼をし、承諾をいただいた。業務の「品出し」は他社でも汎用性があることも検討の視点にあった。

5　デュアルシステムの実践

デュアルシステムの実施に際し、本校独自の取組として生徒の「個人目標」の確認や「振り返り」を当日にすべて完結させるスケジュールを組んだ。具体的な手立てとして、次回に学習が繋がるように、また、生徒が「具体的に何を意識して取り組めばよいか」が視覚的に分かるように、企業実習の際に使用する評価票をもとに、図１のデュアルシステム評価票の生徒記入用を作成した。この図１は体験終了後すぐに記入し、デュアルシステムで生徒が感じた気付きや学びを教員のフィードバックを交えて次回に生かせるようにした。また、引率教員も評価票を記入し、次回以降の指導の参考になるように、適切な評価を教育支援プランに反映できるようにした。

デュアルシステム評価票（生徒用）

埼玉県立行田特別支援学校

実習生徒氏名		体験日	
デュアルシステム先		担当者名	
仕事内容			
今日の目標			
評価項目及び評価　A:よくできる　B:できる　C:あまりできない　当てはまるものを○で囲んでください			
コミュニケーション	自発的に場に応じた挨拶・返事・報告ができる	A ・ B ・ C	
	適切な依頼・質問ができる	A ・ B ・ C	
	感謝や謝罪の言葉が言える	A ・ B ・ C	
	場に応じた話し方ができる	A ・ B ・ C	
日常生活力	身だしなみや清潔に配慮ができる	A ・ B ・ C	
	トイレ使用のマナーが守れる	A ・ B ・ C	
作業力	正確に作業できる	A ・ B ・ C	
	決められた時間内作業する体力がある	A ・ B ・ C	
	集中して作業ができる	A ・ B ・ C	
	一人でも根気強く最後まで作業ができる	A ・ B ・ C	
自己コントロール	休憩時間を適切に利用することができる	A ・ B ・ C	
	素直に指示に従える	A ・ B ・ C	
対人関係・社会常識	時間を守って行動できる	A ・ B ・ C	
	安全に配慮して行動できる	A ・ B ・ C	
	会社の規則を守れる	A ・ B ・ C	
自分なりに良かったこと・反省点			

【図１　生徒用評価票】

6　デュアルシステムの成果

現在の学習頻度としては月１回程度の実施になっているが、継続することでつまずきやすい課題に対しても少しずつ変容が見られてきた。例えば、「品出し場所が分からないときの質問」ができなかった生徒は「どう質問してよいか分からない」という課題がある。そのため、引率教員が「この商品が見つからないので教えてください」と質問をしてみよう等と言葉掛けすると、生徒は場面とセットで質問の「仕方」を学び、段々と同じ場面で自分から質問ができるようになった。同様に、相手が認識できる意思表示（返事）に課題があった生徒も段々と「意思表示」を学ぶことができた。これは、本人なりのうなずきや小声による「はい」という返事と、企業側が求めている明瞭な返事との乖離（かいり）を埋めるやりとりである。また、別の生徒は「品出し」という業務に自信が持て、「卒業後もカインズ行田店で働きたい」と自ら進路希望を教員に伝え、本来募集のなかった「カインズ行田店」での現場実習が実現できた。これはデュアルシステムの延長上に生まれた成果であると考える。教員が一緒に働きながら指導・支援を行い「具体的な場面を共有し、どうしたら良いか」をその場でやりとりできる。このことが生徒の理解や自信に繋がっていると実践から強く感じた。

【図２　デュアルシステムでやりとりする生徒と教員】

7　今後に向けて

デュアルシステムの最終目標としては「発展型の生徒は毎週デュアルシステムを実施する」ことであるため、あと２か所デュアルシステムの受け入れ先を開拓する必要がある。また、「進路を主体的に選択・決定できる」ことを大きなねらいとしているため、今後開拓する２か所は現在の「品出し」以外の業務が経験・学習できるようにしたい。さらに、願わくは、デュアルシステムを繰り返していく先に、企業側と生徒・保護者側の合意のもと、「雇用」に繋がるよう、障害者雇用をする可能性のある企業を開拓先としていきたい。このことで、デュアルシステムが「デュアルシステムのためのデュアルシステム」で終わることなく、本校の生徒が「地域で育ち、地域で学び、社会で長く活躍できる生きる力の育成」に繋がる取組となるよう努めたい。

特別支援学校における高校通級指導への関わり

新座高等学校の通級指導（授業名「キャリアサポート」）の実践を通じて、特別支援学校の立場から高等学校における通級による指導の成果と今後の展望を報告する。

県立和光南特別支援学校　教諭　高萩（たかはぎ）　直子（なおこ）

1　はじめに

令和５年度は、県内８校（拠点校４校･推進校４校）が通級指定校となっている。拠点校は、推進校が通級による指導を準備、実施するに当たり、指導助言の協力を行う。また、指定校は通級による指導の実施に当たり、特別支援学校のセンター的機能を活用することができる。（高等学校を以下、「高校」と表記する。）

(1) 拠点校
　八潮南高校、鳩山高校、新座高校、皆野高校

(2) 推進校
　上尾橘高校、川越初雁高校、いずみ高校、小鹿野高校

(3) センター的機能を提供する特別支援学校
　三郷特別支援学校、毛呂山特別支援学校、和光南特別支援学校、秩父特別支援学校、上尾特別支援学校、川越特別支援学校川越たかしな分校、大宮北特別支援学校

本校は、新座高校の通級指導と令和２年度から関わり、今年度で４年目になる。

これから、高校通級を実施する高校は増え、通級への関心は高校でも高まっていくことが考えられる。

2　センター的機能の発揮について

次に本校が新座高校にどのように関わっているのかを述べていきたい。まず１学期に、生徒の行動観察を行っている。行動観察の対象者を挙げるのは、新座高校であり、行動観察をした生徒の様子を通級実施日に行う「通級会議」で報告している。

また、本校担当者が「通級会議」に毎回参加し、①各学年の特別な支援が必要と思われる生徒の情報共有（通級生徒以外も含む）②授業の打合せ③今後の日程確認を主に行っている。

その後、生徒にとって、何を学ぶのがよいのかを新座高校通級担当教員と話し合い、授業づくりを進めている。

3　新座高校での通級指導「キャリアサポート」（通称「キャリサポ」）

キャリサポでは、学年ごとに小集団による指導を週１回放課後に実施している。生徒の参加については、診断の有無にかかわらず、「継続的に特別な時間・場での支援が必要な生徒であるか」を校内委員会等で検討し、本人や保護者との合意形成を図った上で、決めている。そして、表１のように学年ごとにテーマを決め授業を展開している。学習内容の例は、表２のとおりである。

１年	２年	３年
自己理解と コミュニケーション	人間関係の形成と セルフコントロール	進路実現 社会の中の自分

【表１　学年ごとのテーマ】

１年	２年	３年
自分を知る リフレーミング コミック会話	トピックス・トーク アンガーマネジメント コミュニケーションのコツ 自分の取り扱い説明書づくり	１分間スピーチ 面接練習

【表２　学習内容例】

4　Ａさんに対する支援について

Ａさん（仮）は、学習意欲は高いが、コミュニケーションに関して苦手意識を持っており、特に自分の意見や考えを書いたり、伝えたりすることに課題がある。また、まれに感情のコントロールがうまくいかないときがある。

そこで、「キャリサポ」では、自己理解を深めるところから始め、(1) ～ (6) までの授業を行った。

(1) 自分のことを知る
　好き、嫌い、得意、苦手、考え方の傾向を知る。

(2) 言葉をつなげていこう
　言葉から連想することを「〇〇と言えば△△」と言って隣の人に伝える。

(3) リフレーミング
　ある出来事に別の視点を持たせる考え方。授業では、自分の長所、短所を考え、短所も見方を変えれば強みになる学習をした。

(4) かんたんヨガ
　深呼吸をして、リラックスした状態を知るなど自分のからだに意識を向ける機会を作る。

(5) クイズ　「これは何でしょう」
　片仮名を使わない教員の説明を聞き、生徒どうし

で話し合い、それが何であるかの答えを出す。
例　小麦粉を練って作っていて、長靴の形をした国の料理で使われる麺は何でしょう。

(6) 怒りをコントロールしよう
怒りは自然な感情で悪いものではなく、コントロールするという考え方を知り、イライラしたときの対応例を複数学習し、できそうなものを選択する。

Aさんは授業を進める中で、質問をされたときに頭の中がどのような状態になっているのかを話すようになり、言葉が出てくるのに時間はかかるが、少しずつ考えを伝えたり、質問をしたりするようになってきた。キャリサポ以外の場面でも初めて会った相手に質問例を見ながら質問をすることができるようになったり、毎回ではないが、ペアワークに参加するようになったりしている。Aさんからも「自分のことを客観的に見ることができるようになった。」という感想があった。また、日常でも深呼吸をするようになったと報告を受けた。今後も、コミュニケーション力の向上を目指し、授業を続けていきたい。

【授業（毎回）の終わりに自己評価・感想を記述する様子①】

【授業（毎回）の終わりに自己評価・感想を記述する様子②】

5　新座高等学校キャリサポの成果

キャリサポは、少人数で学ぶことができるので、そこで学ぶ生徒たちは、他の生徒も同じようなことで困っていることに気付き、困っていることを他者に伝えて良いということを知った。そのことがキャリサポという場を「面倒くさい場」から「楽しい場」へ変え、生徒にとっての「居場所」として確立されてきているのではないだろうか。

そして、生徒からは、「コミュニケーション力が少し上がったと思う。」「カッとすることも多かったけれど、少し減ったと思う。」「悪いことばかりに目がいっていたけれど、違う見方があることを知った。」という感想が出ている。

新座高校の教員からは「授業のグループワークの輪に入って、参加することができるようになった。」「以前よりは、少し先の予定を気にすることができるようになった。」「大人への信頼を寄せるようになり、困ったときなどに教員に相談することができるようになった。」という報告がある。これは、キャリサポの少人数の中でできたことが、その他の場面でできるようになっているということであり、成果は上がっていると考える。

6　課題と今後の展望

小中高と連続した学びの場ができたことは、喜ばしいことであるが、通級指導連絡会での報告によると、高校における通級指導に関しての理解は、学校全体での共通理解が課題であるということが各学校から挙がってきている。

成果が認識されていけば学校全体で取り組む姿勢は作られていくと考える。新座高校では、キャリサポ担当以外の授業参観や３年次に担任を交えて強みの確認や進路について話すケース会議を行っている。このように多くの教員が情報を共有していくことが学校全体での理解となっていくに違いない。

また、ここ数年地域の中学校の通級の担当教員が新座高校の通級指導の授業を見学することが増えてきている。中学校との連携がどの地域でも広がっていくことで連続した学びに繋がっていくと考える。

それから、高校卒業時に本人、保護者の希望があれば進路先への引き継ぎを考えていくことで、切れ目のない支援ができるのではなかろうか。

最後に、通級による指導を通して生徒たちが「自分の強み」を理解し、苦手なことは、周りに自分から伝えられるようになったり、少しずつこうすればうまくいくという工夫ができるようになったりすることを期待する。それが社会に出た時に繋がっていくことを願っている。

熊谷市初の統合新設校　成田星宮小学校

「世に立つ力」～知・徳・体を磨き　未来を拓く～

熊谷市立成田星宮小学校　校長　爪川（つめかわ）　由美子（ゆみこ）

1　はじめに

本校は熊谷市初の統合新設校（熊谷市立成田小学校と星宮小学校の統合）として、今年、令和５年４月１日に開校した。学校教育目標「世に立つ力」を核とし、教育活動を行っている。

【正門の新しい表札】

【スクールバスによる登下校】

2　開校式学校長挨拶より（令和５年５月 26 日）

麦秋の候、本日は小林市長様をはじめ、多くの御来賓の皆様の御臨席を賜り、熊谷市立成田星宮小学校の開校式を盛大に挙行できますことに、教職員を代表し、心より感謝申し上げます。

また、こうして開校の日を迎えることができましたのは、ひとえに、熊谷市並びに熊谷市教育委員会の皆様方の御尽力と、地域、保護者の皆様から頂いた熱意あふれるお力添えの賜であります。

先程、市長様から重みのある校旗を拝受し、改めて開校を実感するとともに、その期待と職責に教職員一同、身の引き締まる思いでございます。

【開校式　校旗授与の様子】

さて、社会情勢や私たちを取り巻く環境が急速に変化するなか、学校教育も大きな転換期に入りました。しかしながら、そうした状況でも義務教育である小学校６年間は学習・生活ともに人間形成の土台を築く重要な時期であることに変わりはありません。そして今こそ、学校には、いつの時代にも貫かれる「不易」と、それぞれの時代の状況、「流行」を見据え、子供たちにどのような土台が必要かを見通し、明らかにし、バランスよく教育活動を進めていくことが求められていると言えます。

本校の校歌の歌詞には、「学と徳とをいよいよ磨き、世に立つ力、その身につける」という言葉がございます。まさにこれから未来を力強く切り拓いていかなければならない子供たちに必要な力であると確信しています。予測困難な社会状況の中で子供一人一人が多様な環境を柔軟に受け入れ、自分らしく生き抜いていく…。本校は、この「世に立つ力」を学校教育目標に掲げ、子供たちに知・徳・体の確かな学力を身に付けさせるとともに、自ら考え、判断し、実現する未来を拓く力の育成を目指します。「目の前の子供たちにとってどうか」、「学校教育目標に向けてどうなのか」。これを全ての判断基準とし、質の高い教育活動を展開してまいります。

そして、ここにいる 481 名の児童の皆さん。成田星宮小学校は、たくさんの子供たちが共に学ぶ、大きな学校になりました。皆さんには、学校生活の中で、まさに切磋琢磨しながら、知・徳・体の学力を高めるとともに、明るい挨拶をする、時間やきまりを守る、友達と仲良くする、「ありがとう」「ごめんなさい」と言う、自分の仕事は最後まで責任をもって行う…。こうした「世に立つ力」も、しっかりと身に付けて欲しいと願っています。

そして、成田星宮のふるさとから多くを学び、たくさんの仲間と先生方と一緒に、新しい伝統、笑顔と元気いっぱいの素晴らしい学校をつくっていきましょう。

結びとなりますが、「教育の道は、家庭の教えで芽を出し、学校の教えで花が咲き、世間の教えで実がなる」という言葉がありますとおり、引き続き、家庭、地域の皆様のお力添えを頂きながら、本校教職員一同、「世に立つ力」を身に付けたたくましい子供たちを育てていくことをお約束し、学校長挨拶とさせていただきます。

3　ヒストリーロードの設置

児童、保護者、地域が大切にしてきた旧成田小学校と旧星宮小学校の校旗や校歌、歴代校長の写真等、思い出の品々を中央廊下に掲示し、児童はもとより、地域の方々も自由に見られるように公開している。

【思い出を振り返る子供たち】

4　成田星宮小学校ホームページ・学校要覧

２次元コードをかざし、本校の教育活動を是非、御覧ください。

学校 HP　　学校要覧

指導主事として埼玉県の子供たちの未来を創る

～指導主事の役割と心構え～

教育局　東部教育事務所　指導主事　牛島（うしじま）　健一（けんいち）

1　はじめに

現在、私が勤務している東部教育事務所（以下、本事務所という。）のモットーは、①課題の把握と対応、②情報の収集と発信、③的確な指導と見届けである。まごころ応援団として「未来へつながる学びを支援」を合言葉に掲げ、管内市町教育委員会（以下、市町教委という。）、学校、及び関係諸団体等に対し、確かな学力の育成、信頼される学校づくり、教職員の資質・能力の向上、人生100年時代における生涯学習の推進に全力で取り組んでいる。管内は15市町（小学校191校、中学校92校、義務教育学校1校）で構成され、それぞれ地域の特性を反映しながら様々な教育活動を展開している。

現在、本事務所には教育支援・学力向上推進を担当する指導主事が主席指導主事を含め13名いる。業務内容は多岐にわたるが、一人一人が指導主事としての役割と心構えを強く意識し、市町の教育に関する事務の適正な処理を図るため、必要な指導、助言又は援助を行っている（地教行法第48条第1項）。

2　指導主事の役割と心構え

(1) 職務について

指導主事の職務は、まず、管内の幼稚園、小・中・義務教育学校が抱えている課題をつかむことである。次に、国や県の施策と照らし合わせながら、その方向付けと充実策について構想と計画をもち、それらを実行していくものである。地教行法第18条第4項には、「指導主事は、教育に関し識見を有し、かつ、学校における教育課程、学習指導その他学校教育に関する専門的事項について教養と経験がある者でなければならない。」と記されている。この資格要件を有しているかどうかは他者からの評価によるものと考えている。そのため、常に専門性と人間性を磨き、自分におごらず謙虚に、国や県、市町、世界の動向をつかむ等、教養と識見を高める努力をし続けることを肝に銘じている。

(2) 人材発掘と人材育成

私自身、これまで多くの方々に声をかけられ、お世話になりながら育てられてきた。今は指導主事として埼玉教育を担う人材を発掘し、育成する視点を強くもっている。そのためには、学校を観る眼、教職員を観る眼、授業を観る眼を磨くだけでなく、①大局を見る眼（世間は学校をどう観ているか）、②新しい眼（新しい発想、感性）をもつことが大切である。教育行政としての一貫性と継続性に留意しつつ、自分の持ち味を発揮しながら、学校や教職員のよさ（強み）を生かす指導を心掛けている。

(3) 組織の一員としての自覚

県（本事務所）の指導主事は、埼玉県教育委員会教育長の意を体し職務に当たる必要がある。また、市町教委との緊密な連携の架け橋・パイプ役を果たさなければならない。そのため、常に正確・迅速な事務処理を行うとともに、市町教委や学校の悩みや困りごとを把握し、寄り沿った指導・助言を心掛けている。そして何よりも学校教育に関する指導・助言を通じて、一人一人の子供を健やかに育てていきたいという大望をもっていなければならないと考えている。

(4) 指導主事としての喜び

本事務所では、市町教委の要請に基づき「教育支援担当・学力向上推進担当学校訪問」を実施している。各学校へ年に1度、直接訪問できる貴重な機会であり、子供の伸び、学校の躍進、地域の交流等を感じることができる。実際、私が教室に入ったとき、頭を抱えながら考えている子供が、教員との関わりの中で主体的に考え、変容していく姿を見ることができた。自然と笑みがこぼれると同時に、授業者の学習指導の在り方に感銘を受けた。

また、県や市町教委の指導主事、各学校の管理職、教科等で関わった教職員の方々のおかげで、多くの事業が推進できている。人とのつながりを感じながら職務に従事できることはとても幸せであり、喜びでもある。

3　おわりに

これまでに出会った多くの方々のおかげで、一人の人間として成長できており、感謝の気持ちでいっぱいである。引き続き、自身の識見と専門性を高め、今後の教育理念の基盤づくりに生かしていきたい。そして、埼玉県教職員MOTTO「未来を創る、こどもたち。未来を育てる、わたしたち。～未来への責任～」にあるように、県の指導主事として「埼玉県の子供たちのために」今後も市町教委や学校等への支援に力を尽くしていく所存である。

「三方よし」のススメ

～〝生徒・保護者よし、学校よし、社会よし〟の学校運営を目指して～

県立春日部高等学校　校長　上原（うえはら）　一孝（かずたか）

1　はじめに

江戸時代に全国を行商した近江商人が大切にしていたのは、“買い手よし、売り手よし、世間よし”という「三方よし」の精神であった。「三方よし」とは、商いは自らの利益のみならず、買い手である顧客はもちろん、世の中にとっても良いものであるべきだという現代の経営哲学にも通じる考え方である。この商訓は、現在でも生きており、今日の日本を代表する総合商社や百貨店など多くの企業の経営理念にもなっている。

2　学校経営に必要な視点

この「三方よし」の精神は、現代の日常生活においても、“相手よし、自分よし、みんなよし”という言葉に置き換えられる大切な考え方だと思う。

現在の学校は、学力向上や健全育成、地域との連携や安全確保など、多様な課題を抱えている。社会状況の変化の下、保護者から学校への期待が高まり、一部には、理不尽とも言える要望を受けるなど深刻な事態も生じている。また、埼玉県でも超少子化社会により、地域間格差が生じており、急速に学校規模が縮小してきている。

学校が抱えるこうした課題は、一人一人の教員の努力だけでは、到底解決はできない。校長のリーダーシップの下、学校組織として取り組まなくてはならない。学校管理職には、学校や地域の実態・課題を把握し、課題解決に向けた経営目標を設定し、その内容を所属職員一人一人に理解させ、力を結集し、目標に基づく組織的な教育活動を実施するなどの学校マネジメント能力が強く求められている。

学校管理職には、教育に対する県民の期待を理解し、その職責を自覚して充実した学校経営を推進できる能力が求められている。具体的には、学校経営力、外部折衝力、人材育成力、高い見識の４点が求められる。

3　どのようにスキルアップするか

今日の日本社会では、戦後の終身雇用が前提のメンバーシップ型雇用から、ジョブ型雇用へと移行してきている。私は、学校管理職を「教諭」が昇任したものではなく、転職したという意識で取り組んできた。専門職である「教諭」のメインの業務は授業であるが、学校管理職は教育活動経験を生かした学校経営がメインであると思っている。そのためには、スキルアップする必要がある。私が先輩の先生方から教えていただき、20 年間実践してきた内容を紹介したい。

〇勤務校の生徒・保護者・教員・外部者のアンケートを分析し、ニーズを把握する。
〇学校の予算希望を把握して、費用対効果を把握する。
〇「書く力」「読む力」「発信する力」を伸ばす。

昨今、データサイエンスが人気である。学校はデータの宝庫であるが、それを分析して活用することは、学校管理職として勤務校の課題を把握する第一歩であると思う。過去の分も含めて、勤務校のアンケート結果を分析することは大切である。

組織運営には経費が必要である。学校経営者として、学校の予算規模を把握し、限られた予算を必要なところに重点的に投資する姿勢が大切だと思う。限られた予算の中で、選択と集中を図るためには、日頃からアンテナを高くしておく必要がある。

昨今、教員で新聞を講読していなかったり、読書をしなかったりする者が増えている感じがする。特に学校管理職にとって「読む力」「書く力」「情報発信する力」は大切である。私は、月に最低５冊は本を読むこと、教育関係の雑誌を定期購読すること、月に５本以上の文章を書くことを自分自身に課している。校長１年目の４月、学校 HP 担当者から「校長ブログ」の開設依頼があり、熟慮の末に引き受けた。現在３校目の校長職であるが、どの学校でも学校 HP に「校長ブログ」を掲載している。今では学校 HP は、校長にとって重要な情報発信の場であると考えている。私の場合、読者を限定せず、ある時は生徒向け、ある時は保護者向け、ある時は県民向けなど、学校の魅力を伝えることを第一義に発信している。

4　おわりに

教育でもエビデンス（合理的根拠）を重視している。しかし、人間としての成長度など、一般商品販売のように数値目標を提示するのが難しい部分もある。進路実績や部活動実績などの数値だけが独り歩きしすぎるのはよくないと思うが、数値はウソをつかないことも事実である。「生徒･保護者よし、学校よし、社会よし」と言える学校組織づくりが大切だと思っている。

八潮市の教育　～小中一貫教育の歩み～

八潮市教育委員会　教育長　井上（いのうえ）　正人（まさと）

1　小中一貫教育の夜明け

あれは忘れもしない小中一貫教育を八潮市で導入する前年、平成17年のことである。小学校で6学年の学級担任をしていた私は、小中一貫教育が八潮で始まるらしいという話を聞き、大袈裟（おおげさ）な表現だが戦慄（せんりつ）を覚えた。当時、勤務していた学校には、放課後毎日のように卒業生を含む中学生が来て、学校の施設でいたずらを繰り返し、小学生が遊びに来られない状況であった。中学校に連絡しても、あまりに頻繁なので、自分たちで指導が出来ないのかと、中学校の先生方に言われる始末。小学校教員も指導をしていなかったわけではなく、指導しても全く従う気配すらなく、逆に大人数で凄まれて身の危険を感じるほどであった。先生方もほとほと困っていた。そんな状況下で小中一貫教育が行われたら、小中学生が更に繋がって、非行の低年齢化が進むのではないかと不安が募った。当時小学校で生徒指導主任をしていた私は、想像を遥かに超える中学生の小学校施設での問題行動に困り果てていた。これは、中学校の現場、先生方とて同じで、授業を行うのにまず着席をさせることから始めなければならなかった。更には夜も遅くまで生徒指導の対応に追われる日々であったと聞いている。今は昔の話である。

2　小中一貫教育はじまりの10年

当時の八潮市の大きな課題は「基礎学力の定着不足」「不登校・非行問題行動の多さ」であった。その課題解決の手法として、この小中一貫教育が導入された。何度も文部科学省とやり取りし、教育特区を申請→認定され、教育課程にも手を入れた。更に小中一貫教育を進めるための組織づくりを行った。「できることから創（はじ）める」を合言葉にトップダウンではなく、ボトムアップで先生方の英知を結集した。その結果、様々な提案がなされ、次々と課題解決の推進策が生まれた。ここでは紙面の関係で詳しくは述べないが、本当に先生方には感謝しかない。先生方の努力、保護者・地域の方々の協力もあり、次第に不登校・非行問題行動は減少していった。このような中、小学校の教員と中学校の教員が互いの苦労や困り感を共有し、それぞれの校種で何をどう取り組むかを具体的に理解し、協力体制が構築されたことが大きな原動力となった。

3　小中一貫教育の今

スタートから10年間で不登校・非行問題行動の減少に一定の成果が見られた。また、基礎学力の定着にもある程度の成果は見られたものの現状は厳しい状態が続いていた。そこで、次なる策として授業改善に重きを置く取組が本格的に始まった。小中一貫教育導入当初は生徒指導が優先し、なかなか授業改善まで手が付けられない実態があった。もちろん基礎学力を定着させる手立ては、先生方のアイデアの下、取り組んできた。ここから更なる高みを目指し、集中的に授業改善に着手しなければならない。参考としたのは、秋田県小坂町の授業手法「小坂スタンダード」である。これを手本として、「八潮スタンダード」を作り上げ、今では更に進化し、各学校においてもそれぞれ工夫を凝らした授業手法で、学力向上に取り組んでいる。正に「守・破・離」である。本市は毎年、市の予算で市内の先生方を秋田県小坂町立小坂小中学校へ派遣している。ここでの優れた学びを持ち帰り、現場の先生方の力で広めていった。今でも相互の交流があり、良き関係性が続いている。そして、その成果も徐々に実を結び、今年度の県学力・学習状況調査結果は、過去最高となった。ここまで18年の歳月を費やした。教育改革は一朝一夕ではいかない。そこには、多くの方々の努力、協力がある。そして何よりも、市内小中学校の先生方の熱い気持ちが、時を経てもバトンを繋ぎ続け、現在に至っている。

4　未来に向けて

「国家百年の計は教育にあり」と教育の重要性が常に取り沙汰されているが、本気で教育を考えれば考えるほど不透明でどうなるか未来予想できない。しかも、ものすごいスピードで変化し続けている。人々の価値観も多様化し、様々な場面で個別の対応が求められる中、大切なのは人としての根幹の部分だと考える。私はそれが愛と想像力・創造力ではないかと思う。本市教育のこれまでの道のりも、多くの方々の愛と想像力・創造力でここまでたどり着くことができた。それが本市の取組から学んだことであり、伝えていきたいメッセージでもある。これからの埼玉教育の未来を担う先生方に大いなるエールを送りたい。

輝く未来へトライ　熊谷市

熊谷市市長公室　広報広聴課　主事　磯野（いその）　駿太郎（しゅんたろう）

熊谷市は東京都心から約 50 ～ 70km 圏に位置し、荒川や利根川の水に恵まれた大地と豊かな自然環境を有しています。また、江戸時代には中山道の宿場町として栄え、現在も鉄道網や道路網が発達した要衝であり、埼玉県北部の中心都市としての歩みを進めています。

さらに、「西の花園、東の熊谷」といわれるラグビーの聖地であり、平成 18 年に行った「スポーツ熱中都市宣言」の下、スポーツによるまちづくりを推進するとともに、ラグビーチームの「埼玉パナソニックワイルドナイツ」をはじめ四つのスポーツチームが本市を活動の拠点としています。

ラグビー
埼玉パナソニックワイルドナイツ

野球
埼玉武蔵ヒートベアーズ

女子ラグビー
ARUKAS QUEEN KUMAGAYA（アルカス熊谷）

女子サッカー
ちふれＡＳエルフェン埼玉

【市内で活動するスポーツチーム】

歴史ある熊谷の文化

熊谷市には古くから受け継がれている文化が数多く存在しています。縁結びで有名な日本三大聖天のひとつである「妻沼聖天山（めぬましょうでんざん）」には、平成 24 年に国宝に指定された「歓喜院聖天堂（かんきいんしょうでんどう）」をはじめ、多くの歴史的建造物、文化財が残されています。

また、伝統の製法で作る、埼玉三大銘菓のひとつ「五家宝（ごかぼう）」と、妻沼地域の名物として 200 年以上前から食されている「妻沼のいなり寿司」は文化庁が選定する「100 年フード」に認定されました。

熊谷の夏の風物詩である「熊谷うちわ祭」は「関東一の祇園」と称され、例年 75 万人以上の人出があります。うちわ祭当日は 12 台の山車（だし）・屋台が各町それぞれのお囃子を奏でながら、３日間に渡って市街地を巡行します。３日目の夜には、各町の山車・屋台が集結し、うちわ祭最大の見せ場である「曳（ひ）っ合（か）わせ叩き合い」が行われます。

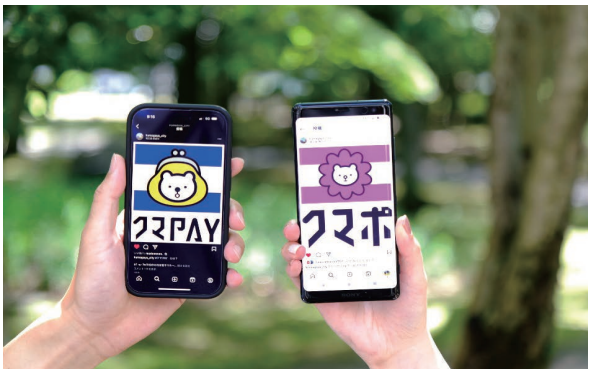
【関東一の祇園　熊谷うちわ祭】

デジタルで拓くやさしい未来

熊谷市では、デジタル技術を活用し、誰もが自律的に幸せを追い求めることのできる未来を目指し、「熊谷スマートシティ」の実現に向け、７月４日に「熊谷スマートシティシンポジウム」を開催しました。

このシンポジウムでは、令和５年度に実施予定の事業の発表や市長によるスマートシティ宣言が行われました。主な発表内容は、令和５年９月に予定している熊谷市の公式 LINE アプリ「クマぶら」の大幅なリニューアルのほか、令和５年 11 月に利用開始予定の地域電子マネー「クマ PAY（ペイ）」と、令和６年３月に利用開始を予定している、地域コミュニティの活性化などを目的とした、熊谷市独自のコミュニティポイント「クマポ」などについてです。

これからも、受け継がれる文化・歴史と合わせ、「スポーツのまち」として培ってきた結束力を生かし、デジタルと人の力で豊かなまちを目指していきます。



【クマ PAY・クマポ】

生涯をかけた情熱　～木村九蔵と養蚕～

本庄市教育委員会　文化財保護課　主事補　田辺（たなべ）　萌那（もえな）

【木村九蔵】

木村九蔵（くぞう）（1845～1898）は、養蚕改良とその伝習・教育に生涯を捧げた近代の偉人である。九蔵は、上野国緑埜郡高山村（現在の群馬県藤岡市高山）に高山寅三・さよの五男として生まれた。幼名を巳之助という。実兄の高山長五郎は高山社を興（おこ）した人物であり、九蔵は幼い頃から養蚕に興味を持ち、兄と蚕の飼育を行っていた。

この時に飼育した蚕が、育てている環境によって繭になった際のできが異なっていた。それから九蔵は、どうしたら良い繭が収穫できるのか問題意識をもって養蚕に取り組むようになった。九蔵の養蚕改良の歴史の第一歩である。

九蔵は元治元年（1864）に武蔵国児玉郡新宿村（現神川町新宿）の木村しまと結婚し、廃家となっていた木村家を再興、慶応３年（1867）23 歳の時に木村九蔵と改名し独立した。

九蔵は、養蚕改良に励み、明治５年（1872）に新しい飼育方法である「一派温暖育」を発表した。一派温暖育とは、蚕室内の環境を自然条件に委ねるのではなく、蚕の生育に適した温度や湿度を人為的・人工的に調整して養蚕を行う飼育法である。これは、火熱を利用して外気との循環によって乾燥を図り、また暖房することによって蚕の食欲を増進し生育期間を短縮するという方式であった。人為的に生育環境の調整が容易な小さな養蚕室に区切り、あるいはこれを連接することによって蚕の生育に適した人工的な環境を作り出し、安定した養蚕を達成するための方法は、蚕室の構造と一体のものであり、九蔵は自らが考案したこの方法に適した蚕室を長年構想していた。その理念と技術を実現した蚕室が競進社模範蚕室である。

競進社模範蚕室は、明治 27 年（1894）に児玉町（現本庄市児玉町児玉）の競進社養蚕伝習所内に建築された。この建物は、木村九蔵の近代的養蚕法の理念と技術を今日に伝える貴重な建造物として、昭和 47 年（1972）に埼玉県指定文化財の建造物に指定されている。競進社とは、明治 10 年（1877）に九蔵を組長として、近在の養蚕を志す仲間と結成した「養蚕改良競進組」が始まりであり、明治 17 年（1884）に競進組への入門者が増加したため、養蚕改良と伝習の結社としての組織化を図り競進組から改め「競進社」とした。競進社は、三重県の養蚕伝習所に教師を派遣したのをはじめ、明治 19 年（1886）以降、全国に支部を開設し、競進社と木村九蔵の名声は全国に広まっていった。

明治 22 年（1889）パリ万国博覧会の官費視察の一員として九蔵が派遣され、ヨーロッパの養蚕の在り方や先進の蚕種貯蔵庫を視察し、多くの知見を得た。特に近代的な蚕種貯蔵の必要性を痛感した九蔵は、初代埼玉県知事を務めた吉田清英の協力を得て、明治 25 年（1892）、本庄町（現本庄市中央）に日本初の蚕種貯蔵庫を建設し、蚕種貯蔵の先駆けとなった。

先のヨーロッパ視察を通して、養蚕も学問的に究め教育する必要性を認識した九蔵は、実技教育のみならず学科教育を取り入れた本格的な蚕業学校の設立を目指して、明治 30 年（1897）伝習所内に蚕業講究所を開設した。明治 32 年（1899）には、実業学校令に基づく競進社蚕業学校となり、その後幾多の変遷を経て、埼玉県立児玉高等学校となり、今日に至る。

養蚕改良と蚕業教育に情熱を注いだ九蔵は、明治 31 年（1898）、54 歳で亡くなった。病床にも蚕架を設けて、病に冒されながらも養蚕改良を行おうとした姿勢は、教え子たちに深い感銘を与えた。九蔵の死後、明治 32 年には青柳村（現神川町）の武蔵二宮金鑽神社参道西側に九蔵の業績を称えた頌徳碑が建てられ、遺徳を現在まで伝えている。この頌徳碑の石材は、本庄駅から金鑽神社まで人力で三か月あまりをかけて運ばれたという逸話が残っている。

【競進社模範蚕室】

川越の歴史と文化の魅力を発見！

ここがすごい！川越市立博物館

川越市立博物館　指導主事　長谷川（はせがわ）　和志（かずし）

1　川越市立博物館について

川越市立博物館は、平成２年３月１日に開館し、今年で 33 年目となります。川越が繁栄した江戸時代から明治時代を中心に、原始時代から近・現代までの長い川越の歴史が総合的に理解できるような展示となっております。館内見学後の本丸御殿見学や市内散策は、楽しみと理解が倍増すること間違いなしです。

2　展示がすごい！

一番始めに入る近世展示室の広さや城下町模型の大きさに、小学生が「おぉ！」とよく歓声を上げている場面が印象的です。近世・近代展示を通して「どのようにして川越に蔵造りの町並みが生まれたのか」が分かるような工夫がされております。特に、城下町全体が見られるジオラマ模型や細部まで復元した蔵造りの町並み模型、蔵造りの建築工程を再現した実物大模型は迫力満点です。また、中学生は江戸図屏風の複製から徳川家光を探す活動や学習カードを活用して様々な時代の展示物を探したりする活動に取り組んでいます。

【幕末（1867 年）頃の川越城下町模型】

3　解説がすごい！

職員や解説員が各学校の学年や学習進度に合わせて、より楽しく分かりやすいオーダーメイドの解説をしております。

校外学習で利用する小学生には、１クラスずつ職員や解説員が対応し、蔵造りの町並みが生まれたきっかけや蔵造りの工夫などについてクイズを出しながら分かりやすく解説しております。「楽しかった。」「もっと見たい。」という声をたくさん聞きます。

市内小学校３年生、６年生は教育課程に位置付け、博物館を活用して学習しております。３年生は、学校の要望に沿った昔の道具の解説を受ける他、体験や調べ学習をしております。６年生は、各学校の学習進度と要望に合わせて対応し、江戸時代の川越と日光のつながりについての学習や縄文時代の丸木舟や土器を活用しながら当時の川越についての学習をしております。

中学生は班別活動が多く、解説員が様々な展示場所や展示物を利用して、質問に対して回答したり、解説をしたりしながら調べ学習の支援をしております。

【クイズを交えた展示解説】

4　資料がすごい！

校外学習で来館できない学校のためにホームページ上に江戸や明治時代の川越、蔵造りの工夫についての学習用資料を掲載しております。また、博物館や資料を効果的に活用するための学習カードや活用の手引き、活用方法のヒントなども掲載し、授業づくりの支援を行っております。

市内の教員には、研修会で川越の教育資源の活用事例や消火道具・戦争資料などの実物資料を紹介し、資料の活用と保存への理解を深めてもらっています。

5　「博学連携」がすごい！

開館以来、指導主事を配置し、市内をはじめ県内外の小・中学校を中心とした校外学習の受入、出前授業による学校教育への支援、川越の文化財や収蔵資料を活用した教員研修などを通して、「博学連携」を深めております。また、「博学連携」の中核となる博物館利用研究委員会を組織し、小・中学校の教員と博物館職員が協働し、学校教育における効果的な博物館活用について研究・実践も行っております。

その結果、令和４年度は年間 300 校、約 27800 人の小・中・特別支援学校の児童生徒に来館していただいています。

シリーズ　改訂版生徒指導提要

第３回　個別の課題に対する生徒指導

～不登校児童生徒への支援～

県立総合教育センター　指導相談担当　主任指導主事　中川（なかがわ）　こずえ

１　はじめに

研修等で自校の生徒指導上の課題について尋ねると、ほとんどが「不登校児童生徒の増加と支援方法」を挙げる。現在、学校が特に困っているのは、「どのような支援の仕方が正しいのか分からないこと」「物理的な理由（人的、時間等）により十分な支援ができていないこと」の大きく２点ではないだろうか。

第３回では、「不登校」をテーマに支援の在り方について考えていく。

２　不登校の現状

「令和４年度埼玉県公立学校における児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」によると県公立小・中・高等学校の不登校児童生徒数は 16,914 人となっている。令和５年３月には、文部科学省から、不登校により学びにアクセスできない児童生徒をゼロにすることを目指す「COCOLO プラン」が打ち出され、国、県全体で「誰一人取り残されない不登校支援対策」が進められている。

不登校児童生徒への支援の目標は、「将来、児童生徒が精神的にも経済的にも自立し、豊かな人生を送れるような、社会的自立を果たすこと」である。社会的自立とは、依存しないことや支援を受けないということではなく、適切に他者に依存したり、自らが必要な支援を求めたりしながら、社会の中で自己実現していくことである。

生徒指導提要には、「不登校児童生徒への支援においては、学校に登校するという結果のみを目標とするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉え、社会的自立を目指せるように支援を行うことが求められる」とある。この考え方が浸透してきた一方で、将来の社会的自立を見据えて、適切なアセスメントの下、本人や保護者と相談しながら、本人の意向に寄り添い学校に登校することを目標とすることももちろんあり得る。以下、実際の事例から考えていきたい。

３　事例から

【事例① 30 日未満の欠席で登校復帰したケース】

小学生のＡは、仲のよいＢが他の児童と意気投合したことで「Ｂを取られた」と母に訴え、それを理由に欠席し始めた。母は当初「Ａが仲間外れにされている」と捉えた。遅刻や欠席が続く中、担任は丁寧に関り母にも頻繁に連絡して学校での様子を伝えた。登校した日は、保健室で担任や養護教諭が話を聴いたり友人が迎えに来たりしてから教室に向かった。母はＡを無理やり学校に連れて来たこともあったが、１か月が経とうとする頃、Ａの内面に目を向け始め、対応に変容が見られた。同時期、Ａの表情が変わり「もう大丈夫」と通常どおり登校し始めた。

担任は、初期の段階でＡとじっくり話ができたことや母へのこまめな連絡で状況が伝わり、対応が変わったこと等が登校復帰の要因となったと捉えている。

【事例②長期の不登校から登校復帰したケース】

Ｃは、小学校高学年から中学校１年生まで登校していない。家庭訪問等を繰り返し、２年生時にようやく実現したスクールカウンセラーとの面談で、Ｃから「母は病気療養中で、他の家族には障害があり、父は、母と家族に対して暴力を振るう」旨の話があった。学校は初めて状況を把握し、スクールソーシャルワーカーや関係機関と繋ぎ、家庭への支援が始まった。徐々に父の態度が変容しＣとの関係が改善に向かった。その後、Ｃは相談室登校を始め、授業の受け方等は本人の意思を尊重した。３年生進級時にはＣと母、教頭、担任で面談を行い、Ｃは「大人を頼ってもいいと分かった」と話した。３年生では休まず登校している。

スクールカウンセラーや医療に繋ぐ必要性を感じても、本人や保護者と合意に至るまでに時間を要するケースも多い中、学校と関係機関等の力を結集した事例である。Ｃは、母と家族を心配し、自ら欠席することを選択していた。学校がＣと信頼関係を築いたことから、ヤングケアラーでもある自身の家庭のことを話し、適切に他者に依存し社会的自立への一歩を踏み出した。

４　おわりに

二つの事例から登校復帰に繋がった支援について考えると、①じっくり待っている大人の存在があったこと②無理強いはせず、本人に寄り添ったこと③自己決定を促し支えたことの三つの共通点が見えてくる。

生徒指導は、最適解を探し続けることだと常々思う。深い児童生徒理解の下、悩みながらも児童生徒にとってベストと思われる支援を積極的に提案でき、機動的で実効性のある生徒指導体制を築くことが望まれる。

動画コンテンツの活用による研修の充実を目指して

～「あらたな教師の学びワーキンググループ」による今年度の活動～

県立総合教育センター　教職員研修担当
指導主事兼所員　浅見（あざみ）　寿文（としふみ）

1　はじめに

県立総合教育センターでは、教員免許更新制の発展的解消に伴い、より一層の教師の資質・能力の向上を図る研修の在り方について検討するため、「新たな教師の学びワーキンググループ」（以下、WGと呼ぶ）を令和四年度より設置した。

令和四年度は、高校教育指導課と連携し「教員等の資質向上に関する指標」の見直しを行った。今年度は、新たな教職員の学びに資するオンデマンド動画の作成と活用に向けて「所員のスキルアップ」に重点を置き、動画の作成方法の共有や効果的な動画コンテンツの形式の検討を行っている。

動画コンテンツの有効活用は、研修の質を向上させ、ひいては所員の働き方改革（負担軽減）にもつながる。センター全体で取組を進めるためのけん引役となるべくWGは担当横断の組織として活動している。

2　これまでの取組

動画コンテンツの作成と活用についてはWGの中でもそのイメージや作成のためのスキルが様々であった。中には苦手意識を持つメンバーもいた。

まずはNITS（独立行政法人教職員支援機構）の「校内研修シリーズ」等を用いてイメージを共有した。次に新たに導入した音声作成ソフトとプレゼンテーションソフトを活用した動画作成の方法を共有し、スキル向上を図る機会を設けた。加えて、これまで研修の最初や最後に所員が口頭で行っていた諸連絡や不祥事防止ワンミニッツ研修の動画を作成し、動画コンテンツ活用の可能性を探った。

3　今後の取組

取組を通して「これまで動画作成の経験はなかったが、簡単に作ることができた」「様々な場面で動画コンテンツの活用ができそうだ」といった声がWGメンバーから出てきた。こうしたメンバー内での意識の変容は重要な一歩であると感じる。今後も改革を所内全体に広げ、以下の取組を実施していきたい。

① 所員全体のスキル向上に向けた研修会の実施

② オンデマンド研修コンテンツの様式や内容の検討

③ ①・②を踏まえ、全所をあげた動画コンテンツの作成・活用

右記に加え、教員の個別最適な学びが実現する研修システムの検討を行うこともWGの重要な所掌事務である。文部科学省が開発を進めている「研修受講履歴システム」の動向を注視し、適切に対応していく。

4　おわりに

「令和の日本型学校教育」「GIGAスクール構想」「働き方改革」など現在の学校を取り巻くキーワードからも、WGの取組の意義は大きい。センターのビジョン「学び続ける教職員・学校の教育力向上を図る」の実現に向け、積極的に挑戦し続けていきたい。

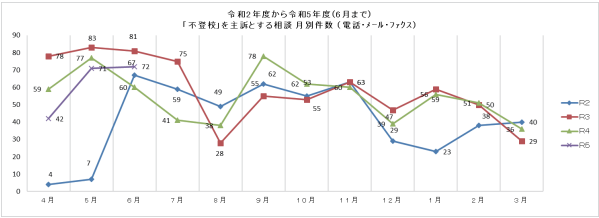
本活動の問合せ
教育DX担当
〇四八－五五六－三三四五

電話・メール相談の現場から

～不登校の相談から～

私たちが行っている「よい子の電話教育相談」には、一年間を通して、電話・メールで様々な相談が寄せられている。第二号では、「いじめの対応」についてお伝えしたが、今回は、令和二年度から令和五年度（六月まで）の「不登校」を主訴とする相談から、不登校の現状についてお伝えする。

左のグラフは、令和二年度から令和五年度（六月まで）の「不登校」を主訴とする相談件数のグラフである。①四月から五月、②九月、③十一月に相談件数が増加する傾向があることがわかる。令和二年度は、新型コロナウイルス感染症に対応し臨時休校等の措置が行われたため、四月から五月の相談件数が減少したと考えられる。



では、①から③のそれぞれの時期の不登校に関する具体的な相談内容から、不登校のきっかけについて考えてみる。

①の時期は、「クラスの雰囲気が合わず学校にいきたくない。」「思っていた学校と違った。」等、新しい環境の変化への不安、②は、「一学期から不登校だが九月も登校できない。」「夏休みが明けるが登校したくない。」等、一学期からの継続と夏休み後の心身の変化、③は、「宿泊行事の班を勝手に決められた。」「文化祭で友人ともめてしまった。」等、学校行事による人間関係による悩みと、それぞれの時期の、不登校のきっかけが見えてくる。子供が不安を感じ、悩みを抱えやすい時期であると捉えることができる。日々の子供たちの表情、声、姿、雰囲気などから、子供の小さな変化に気付く力、子供の声を聴き受け止める力を、毎日の関わりや会話の中から高めることが大切である。あわせて、子供が不安や悩みを抱えた時、周りに安心して話すことができる大人の存在が必要である。子供を取り巻く一人一人が、子供にとって安心して話すことができる大人の存在になることを願っている。

埼玉県公立学校における令和四年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果では、小中学校における不登校児童生徒数は一万四一一〇人であり、昨年度より二九三二人増加している。また、令和五年三月には文部科学省から「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策【COCOLOプラン】」が示され、児童生徒が学びたいときに学べる環境を整えること、チーム学校での支援の必要性、誰もが安心して学べる学校にすること等が求められている。

私たちは、子供にとって安心できる存在となり、子供が安心して学び、生活できる学校を築いていかなければならないと考える。

県立総合教育センター
指導相談担当

部活動で学んだ生徒育成と学校運営

県立不動岡高等学校教頭
島田（しまだ）　淳一（じゅんいち）

埼玉の教育界に籍を置いて四十余年が過ぎた。その間のことを振り返ってみると、教師・管理職としての考え方は部活動から学んだことが多いと実感している。部活動の運営は学校運営にとても類似しており、部活動には学校の教育活動の様々な要素が凝縮した形で詰め込まれている。選手育成のためのプログラム作成や勝てるチームづくりに費やした試行錯誤の日々は、指導者としての知見を鍛える場となり、その後の生徒育成や学校運営に大きく生かされた。

教師としての情熱と日々の研鑽

「人にものを教える」ということはどういうことか、これも部活動から学んだことである。生徒に教師の指導を受け入れてもらうためには、教師としての情熱と日々の研鑽が何よりも大切で、この二つのうちどちらかでも疎（おろそ）かにした瞬間に、教師としての魅力は色褪（あ）せるものと考えてきた。一例を挙げれば、授業で生徒に一〇のことを教えるのに、教師は最低でもその一〇倍の百の知識が必要であり、六十～七十では生徒を引き付ける魅力的な授業は不可能である。百から百十、百二十・・・とその知識量に比例して生徒の理解力の度合いも向上し、生徒の心に火を着けることが可能となる。「教える」ことの基本がそこにある。そのことを自分自身の座右の銘としてこれまで生徒と向き合ってきた。県内有数の進学校である春日部高等学校に勤務していた時には、学年成績のトップ集団の生徒たちから「島田先生に論述補習をお願いしたい。先生の補習を受けることができるなら、現在通っている予備校は辞める。何人集まれば開講してもらえますか？」と依頼されたとき、真の春高（カスコー）教師になれたと実感した。

管理職としての学校運営

管理職になっても部活動の経験は随所に生かされた。チームは毎年選手が入れ替わり、戦力が同じという年はほとんどない。新チームの戦力を冷静に分析し、勝つための戦略を考え、どのように戦力の底上げを行って結果に結び付けるかに腐心した経験は、学校運営に携わる時にとても有益であった。戦略を考える過程で身に付けたことは、過去の常識にとらわれず、現実に照らして最も効果的な選択を行うという考え方であった。この考え方を身に付けたことが管理職として勤務校での学校改革に寄与したことは言うまでもない。

どの学校でも課題のない学校はない。課題解決のために管理職として最も重要なことは、勤務校の課題を正確に把握しているかどうかということである。課題を正確に把握することは課題の半分を解決していることと同等であり、次に課題を数値化して教職員に改革の必要性を納得させること、そのことが学校改革の第一歩だと考えてきた。

学校改革は、管理職だけでは成功しない。学校改革の成否は、管理職と教師集団が一枚岩になれるかどうか、そのためには教職員の理解と協力が得られるかが大きな分岐点となる。管理職として、部下である教職員の悩みや相談に丁寧に応じ、健康には常に配慮する。そういう姿勢で対応していると最初は頑（かたく）なな態度でも半年ぐらいで対応の変化が生まれてくる。管理職の人柄は黙っていても教師には伝わるものであり、それが同じ職場で働くということである。良好な人間関係ができると、「あの校長があれだけ頭を下げて頼んでいるのだから、意見の違いはあるけれど、まあ協力するか」という雰囲気が生まれてくる。

そして、忘れてはならないのは人とのネットワーク、管理職間の横の連携の重要性である。どんな優秀な管理職でも、一人で全てのことを経験し、あらゆる対処方法に精通することは不可能である。自分の知らない情報を入手し、経験のある管理職から不得意分野の対処方法を教えていただけるような関係を構築できたことは、特に校長職の時代にとても心強い支えとなった。

最後に頼りになるのは「人」

ここ数年のコロナ禍の影響は、教育界に大きな爪痕を残した。コロナ禍を経験した若者たちの意識は私たちが想像する以上に多様化し、教師としての指導力がますます問われる時代となった。管理職も社会の変化に応じて、今後様々な改革を求められるであろう。現在、多くの分野でＩＣＴ機器を活用した教育改革が進められているが、私は最後に頼りになるのは「人」「人とのつながり」だと信じている。私のこの拙い経験が皆様の今後の教育活動に少しでも役立つことがあれば、それは望外の喜びである。

〈プロフィール〉
鷲宮、春日部、北川辺高等学校で教諭の後、県教育局生徒指導課に勤務。その後、教頭（二校）、副校長を経て、羽生ふじ高等学園、進修館高等学校長で定年退職。現在、教頭として不動岡高等学校に勤務。

教職員相談道しるべ

学校ぐるみで授業改善するためには？

高校で勤務しています。現在三校目で、今年から主幹教諭になりました。

初任校では、授業をどうしてよいか悩むこともありましたが、二校目からなるべく研修会に参加し、まだ模索中のところもありますが、よりよい授業が分かってきたと思います。そこで気付いた際には若手教員へアドバイスするようにしています。

主幹教諭になり、自校を見てみると、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、授業改善をしないといけない教員がたくさんいると感じています。私自身も改善しないといけない部分があることは、十分承知しています。

私は、「主体的・対話的で深い学び」のみならず、「総合的な探究の時間」を通して、生徒が自身で問いを見つけて、課題意識を持って学習に取り組んでいかないといけないと思います。

残念ながら、昔ながらの講義形式の授業をしている教員も多く見られます。学校ぐるみで授業改善を図るために何かよい方策はあるでしょうか。

（高等学校　S）

「教師の学び合い」から

県立総合教育センター　教職員研修担当
指導主事兼主任専門員　永田　祐子

よりよい授業づくりは、教師にとって大きな課題です。生徒に対する深い理解と確かな教材研究に基づき、目標をしっかり見据えて授業をすることは、「教師は授業で勝負する」という教師としての不易の部分です。いうまでもなく授業改善と学力向上は大きな関係がありますので、「学校ぐるみで授業改善を図る」流れをつくることは「学び」を考える土台となるでしょう。

まずは、「自分（たち）の授業（実態）を知る」つまり、お互いの授業実践を知ることです。教育課程委員会等を柱にして「教師の学び合い」の機会をつくれるといいですね。十一月一日の彩の国教育の日を絡めて、「授業見学週間」として、相互の授業見学・観察カードの交換・放課後の協議会（意見交換会）等を実践している学校は少なくありません。

ミドルリーダーとして、若手教員を育てることを含めて、生徒が課題意識をもって学習に取り組める授業の在り方を意識する風土づくりをしていきましょう。

小さな種まきから、自分たちの理想とする「花」を咲かせられるといいですね。

次号予告

令和５年度第４号（冬号）　令和６年２月刊行予定　の特集は
①現代的な諸課題に対応するために
②地域と連携・協働した教育の推進　です。

巻頭言は、京都大学　大学院教育学研究科　石井　英真　准教授に御執筆いただきます。御期待ください。

本号の
アンケートは
右の QR コードから▶

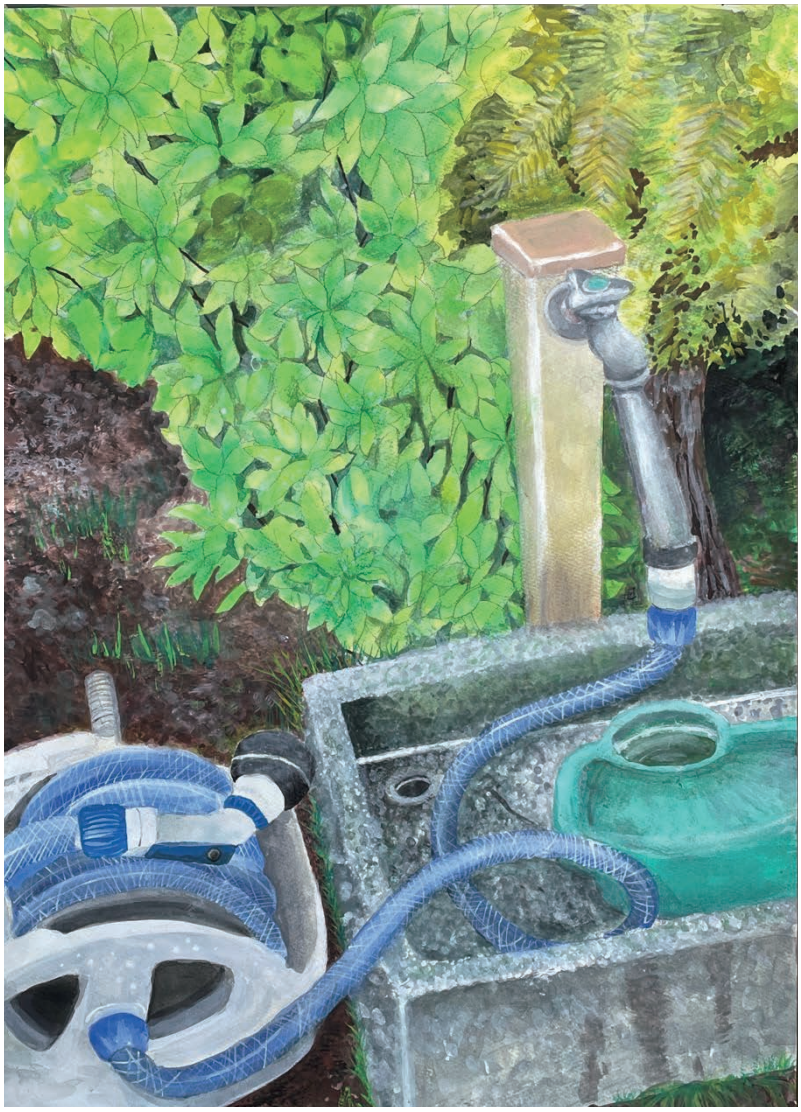
令和５年度　身体障害者福祉のための
第 65 回埼玉県児童生徒美術展覧会
埼玉県教育委員会教育長賞　受賞作品

回転！お寿司づくしの花

熊谷市立佐谷田小学校　第４学年　神沼（かぬま）　陸斗（りくと）

※学年は出品当時です。

令和５年度　身体障害者福祉のための
第 65 回埼玉県児童生徒美術展覧会
埼玉県教育委員会教育長賞　受賞作品



大きな庭に小さな水道

羽生市立西中学校　第１学年　大澤（おおさわ）　寧々（ねね）

※学年は出品当時です。

彩の国 埼玉県

埼玉教育　第 77 巻　第３号（第 823 号）

編集・発行　埼玉県立総合教育センター
代　　表　所長　田中　洋安
〒 361-0021　埼玉県行田市富士見町 2-24

レイアウト　有限会社　マックスアーリー　熊谷市柿沼 841-5